
プリキュアハーレム！

ぽつさき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリキュアハーレム！

【Nコード】

N0860L

【作者名】

ぼつさき

【あらすじ】

Sだったり兄だったり鬼畜だったりジゴロだったりする青年のハーレム

プリキュアハーレムもの。Max、SS、5まで出演予定。予定は未定。妖精はでてこない予定。（ココ、ナッツ、シロップ以外）原作フラグばつきばき

処女童貞作。厨2病をこじらせ気味。手探り。恥ずかしい。

第1話 【名前】（前書き）

前書きは読む時邪魔なので極力無しです

第1話 【名前】

その昔、暗黒界が妖精界を侵略した。

押し寄せる暗黒軍は目に入るもの、触れるもの全てを破壊していった妖精たちはただなすすべもなく故郷が破壊される様を逃げながらただ眺める事しかできなかった。

妖精界の半分が闇に堕ちたとき暗黒軍の前に1人の男が立ち塞がる。その男は精霊王と呼ばれ妖精たちからは崇拜の対象であり永遠の象徴。その身はただそれだけで光輝いているかのように神々しい。

かつては妖精たちの笑い声や笑顔が溢れていた草原は、いまや血走った目をぎらつかせる妖魔が立ち並んでいた。

森は赤く染まり煙をもうと吐き散らし、瓦礫の山からは肉の焼ける匂いが立ち込めもはや生き物の住める場所では無い。

その男はゆっくりと、ただ真っ直ぐに地獄へとその歩を進めていった。

その足は震えているのだろうか。その瞳は涙を流しているのだろうか。

精霊王といえどきつと助からない。妖精界は終わる。世界は終わるんだ。

生き残った妖精達はその地獄絵図ともよべる光景を丘をはさんだ遠くから眺め、涙と絶望を吐き出していた。

男は軍勢の目の前までやってくると、ゆっくり・・・顔を天へと向けて、手を大きく広げた。

ただそれだけのことだったが、それは、儀式のようであり、追悼のようであり、祝福のようであり、悲哀でもあった。

世界が——寂しそうに——笑った

刹那、戦慄が走る。

男から天まで届くような、天を切り裂くような光の柱が吹き上げた。その光は憤怒を孕んだ叫び声のような音を立て一瞬で暗黒軍を、妖精界を包み込んだ。

痛みもなく、叫ぶことも出来ず、死を理解することすら許さず妖魔を消滅させた。

「なんて・・・綺麗で・・・悲しい光なんだ・・・。」

だれかがそう呟いた。

光は妖精達を祝福と希望と子を守る母の温もりのように優しく撫でていった。

あふれ出る光は暗黒界までおよびやがて静かに消えていった。

妖精たちは光が消えてからも目から零れ落ちる雫を、ぬぐう事もせ

ずただ地面に注いでいた

それから500年という年月が過ぎた
精霊王の光は大地に潤いと緑を与え、自然も妖精も世界もかつての
繁栄を取り戻していた。

しかし500年という年月は世界を覆うほどの巨悪を育て上げるの
に充分すぎるほどの時間だった・・・

起きろ・・・目を覚ませ・・・

「・・・な・・・んだ・・・」

汝・・・世界を・・・力・・・

「じじは・・・オ・・・レ・・・は・・・」

汝・・・その名を・・・

「・・・オレの・・・名前は・・・」

第1話 名前

デュアルオーロラウェーブ!!!

七色のオーロラが2人を包み込み光がはじけ衣服がその姿をかえていく

黒「光の使者！キュアブラック！」 白「光の使者！キュアホワイト！」

「ふたりはプリキュア！！！」

白「闇の力のしもべたちよ！」

黒「とつとお家に帰んなさい！」

妖精の力によって黒と白の衣を纏い、世界を滅ぼさんとする悪の存在と戦う力を授かった伝説の戦士、プリキュア。

男を睨みつけるその凜とした表情は、幼いながらも戦士のものであった。

「なるほど。これが伝説の戦士プリキュアか。」

黒「あんた一体誰なの！？」

白「この真っ暗になった世界はあなたの仕業！？」

町から遠く離れた薄暗い森の中、運動場ほどに開けた場所に男と少女たちはいた。

2人の少女は構えているわけでもなくただ飄々と立っているだけの男に問いかける。

その男は一目で仕立ての良いと思える黒いシャツ、黒いズボン。その上から膝まである純粋に濃い黒のコートを羽織い、目線を覆うよ

うなサングラスをかけていた。

「敵にものを訪ねるなら、まずやるべきことがあるんじゃないのか？」

言い終わるや否や男が拳を振り上げる。同時に黒いサッカーボール大のエネルギー弾がプリキュアに放たれる。

「！？」

左右に跳び回避したプリキュアのもと居た場所で小規模の爆発がおりり粉塵を巻き上げた。

白「ブラック！大丈夫っ！？」

黒「大丈夫！ホワイトは・・・えっ！？」余所見は相手に失礼じゃない・・・かつ！」つあっ・・・！」

一瞬で間合いを詰めていた男に回し蹴りをされガードする暇もなく木々をなぎ倒しながら吹き飛ばされた。

白「ブラックッ！！」だから余所見はするんじゃないと・・・」えっ・・・！？」

キュアブラックに視線を飛ばし男の声に気付き振り向いたときには男は目の前に迫っていた。

白「はっ！！」

苦し紛れの正拳を繰り出すもその手をとられ逆に関節を極められその場に組み敷かれてしまう。

白「うう・・・くっ・・・やつ・・・。」

「あんまり暴れると体を壊すよ。パワーはあるけど錬度はまだまだだな。中学生ならしょうがないんだろうけど。」

白「あっ・・・あなた・・・誰なの・・・!？」

― コレは、勇気を失くした少年と―

「ん?・・・そうだな。教えてやるよ。オレの名前は」

― 勇気にあふれた少女達の―

「フリティラリアだ。」

― 物語―

第1話 【名前】（後書き）

後書きも無しにしたいです。あと更新は気まぐれです。
あったらいいな。くらいの感覚でお待ちください。

感想を食べて生きてます。（エロ）

第2話 【はじまり】

あたしの名前は美墨なぎさ。ハルム学院女子中等部3年生。ラクロス部でキャプテンをやってるの。

好きな食べ物はチョコレート！チョコレートのお風呂に入るのが夢なんだってほのかに話したら「なぎさらしいね」って笑われちゃった。

そうそう、そのほのかっていうのが今私の向かいの椅子に座って本を読んでる女の子。

あたしの親友で雪城ほのか。同じクラスで科学部の部長ですごく頭がいいの！テスト前なんかは教えてもらってるしね。

ほのかってば本を読み始めるとすぐ周りが見えなくなるんだから・・
・ほっといたら1日中読んでそう。

新しい本が見たいって図書館まで来たんだけど。

「ねえなぎさあ、ちょっとだけ読んでいてもいい？」

なんて上目遣いで言われちゃって、いいよっ！なんて言ってからもう2時間。初めはあたしも可愛い絵の表紙の本を読んだんだけど・・
・10分くらいで飽きちゃった。

ラクロスの練習なら3時間だってイケちゃうのにな。

黒「ほのかあ、飽きちゃったよ」

白「・・・」

もう何度目の台詞なのか。それでもその少女は親友に視線を向けることは無い。

普段の少女からはありえない態度である。つまりは聞こえていないのだ。いや、聞こえてはいるが右から左へ状態だった。

先ほどから動いているのはページをめくる少女の右手と、愛らしい瞳だけであつた。

せつかくの土曜日を文字と文化に囲まれた図書館で親友の読書姿を眺めるだけで終わってしまう。

それでも構わないのだがスポーツ少女であるなぎさには周りに詰まれた知識たちはただそれだけでプレッシャーとなっていた。

黒「もう、ほおのおかあ！」

白「・・・えっ！？なっ・・・なぎさ・・・どうしたの？」

机に突っ伏していた少女は我慢の限界が来たらしく親友を呼びながらもう少しくスをするのではないかというぐらゐに顔を近づける。

そこでやっとほのかは親友が不貞腐れていることに気付く。チラッと時計を横目で見てここへ来てから2時間も経っていたことを自覚した。

あう、またやつちゃった。まだ30分くらいしか経ってないと思つたのに。

なぎさ待っててくれたんだ。

白「ごめんね、なぎさ。わたし夢中になっちゃって・・・。」

手を合わせて頭をさげ謝罪するが言葉が返ってこない。目を開けてみると親友は腕を組んでそっぽを向き、頬を膨らませていた。

そんな姿もかわいらしく見えてしまうのは彼女の美德なのだろう。

白「ほんつとにごめんね？HARMでケーキ奢るからあ、ね？」

黒「チョコのやつ？」

白「先週でた新製品のケーキ。なぎさ食べたいって言ってたでしょ？」

ケーキという単語がでたときに親友の肩がピクツツと反応した。それから彼女の機嫌が目に見えてよくなるのがほのかには微笑ましかった。

黒「じゃあ行こっ！今からっ。」

不貞腐れていたのが嘘のように笑顔になったなぎさがまだ座っているのかを手を握り出口へと引つ張ろうとする。

その顔には「早く！ケーキ！」と書いてあるかのようなだ。

白「ちょ・ちょっと待つてよなぎさ。この本借りてこなきゃ。」

黒「まあ、そんなの後でいいじゃ〜ん。はあ〜やあ〜く〜！」

さっきまでの笑顔がまたすぐに一転しお気に入りのおもちゃを取られた子どものようにむくれた顔になる。

ほのかが本の貸し出しの手続きをしている間も「はあ〜やあ〜く〜う

」と少女と司書に催促している。

そして貸し出しが終わったとわかるとほのかの手を引っ張り図書館を飛び出すように後にした。

白「ちょっとなぎさ。そんなに急がなくてもいいでしょ。」

黒「もたもたしてる間にケーキが逃げちゃうでしょ！」

白「ケーキは逃げないと思うけど・・・」

実際、なぎさが急ぐ必要はほとんどないといっていい。なぜなら目的の喫茶店HERMはハルム学院の敷地内のあり、図書館からは歩いて10分にも満たない場所にあるからだ。

ここでハルム学院の簡単な説明

ハルム学院。創立100年以上を誇る歴史ある学校。小・中・高・のエスカレーター式のマンモス校だ。

小・中までは女子のみだが高等部からは男子の一般受験も受け入れている。

女子ばかりでは面白くなくつまらない青春になり男子がいれば良い刺激になる。という校長の方針である。

図書館やプール。体育館や運動場。寮に通学バスなど施設に多額の資金が使われているため生徒達からは【かゆい所にてが届く】とまでいわれるほど充実していた。

喫茶店HERMもその施設の一部だ。

カラン、と小気味良い音と共に扉があく。

「いらつしゃい。」

黒「えへへーゆーりさん。また来ちゃった。」

「昨日ぶりだな。今日も2人でデートか？」

白「ちっ・・違います！なぎさに図書館に付き合ってもらって・・。
」

「デートじゃなか。羨ましいかぎりだなあ。」

白「だから違います！もう・・有里さんすぐからかって・・。」

黒「いつもの席開いてるー？コーヒーふたつね！」

「はいはい開いてるよ。」

白「待つてよお、なぎさ。」

2人が席へと向かう姿を眺めながらコーヒーを入れる。

多分注文するんだろっとな、と新製品のチョコケーキとモンブランも準備しおぼんに乗せる。

エプロンをしコーヒーとケーキをなぎさ、ほのかに運ぼうとしてるこの男こそ、この物語の主人公である

朔路有里高等部3年。身長170cm、体重62kg、帰宅部、学業・中の上、スポーツ・上の下。髪は真つ黒。肩にかからない程度に切りそろえてある。女顔と女のような名前をすこし気にしている。

ももとは喫茶店のバイトであつたが店長が本場のコーヒーを飲み干してくると旅立ってから代理店長を務めている。校長からも許可を得ており平日の昼・放課後、土日祝日営業している。

店の前にはテラスもあり女子生徒からは絶大な人気を誇っている。有里のルックスと人当たりの良さもそれに貢献していることは言うまでもない。

有里「ほれコーヒー。」

黒「さっすが有里さん、はい！」

白「あつ、有里さん注文なんですけど、なぎさが新製品のチョコケーキでわたしが……」

有里「モンブラン？頼むと思ったからね。ついでに持ってきたよ。」

コーヒーの横にケーキをふたつ置く。

白「えっ！？なんでわかつたんですか？」

黒「有里さんすっごい！エスパー？」

有里「喫茶店の店長つてのはそのぐらいできて当たり前なのさ。」

言いながら伝票を置きカウンターへと戻っていく。
ほのかはその背中を見つめていた。その視線に込められていたものが恋慕か、尊敬か、感心かほのか自身にも知りえることはできなかった。

黒「うっひゃー！おいひーっやっぱりHERMのケーキは最高だよっ！」

白「なぎさ週に1回は食べてるもんね。太っちゃうよ？」

黒「部活で消費したカロリーへのご褒美だからいいのー。」

ケーキを大切そうに頬張りながら悦に入っただような顔をしているなぎさをほのかはいつものように微笑ましいというような苦笑をしている。

そこへさっきまで食器を洗っていた有里がすこし慌てた様子で駆け寄ってきた。

有里「悪い、ちょっと用事が入ったから店を開けなきゃならん。ちよっと出るけどまだゆっくりしてていいよ、お詫びに今日のお代はいいからさ。あと玄関だけ鍵閉めよろしく！んじゃ、行って来る。」

2人のいる机に鍵を置き足早に店内を後にした。

扉を開け出て行く有里を「いつてらっしやい……。」とすこし呆然とした様子で見送った。

それからしばらくしケーキもコーヒーも完食したところではのが

白「やっぱりお金をおいてったほうがいいんじゃないかしら……。」

黒「なんでよーせっかく有里さんがただでいいって言うてくれたのに、断るほうが失礼だよ！」

白「それもそうだけど・・・せめて今度お礼をしなくちゃ・・・。」

黒「そうだね。有里さん何が欲しいかな？明日探しに行こっ！」

白「そうね。新しいエプロンなんか・・・！？・・・なぎさっ！」

黒「うん・・・この感じ・・・妖魔！？・・・裏山の方から！」

2人は瞬時に椅子から立ち上がり出口へと向かう。

白「あっ戸締りしなきゃ！」

机に忘れていた鍵を取り玄関の鍵を閉め、今も嫌な感覚を吐き出す裏山へと走り始めた。

森に入ると今までの嫌な感覚が一層深まる。

肌をぬるま湯のような空気が撫でていく。空気は重みを増し木々が高さを増してきたこともあって森の中は進むにすれ暗くなっていた。

しばらくしてひらけた場所にでる。まだ夕方近いというのにその場所には既に夜のように暗くなっていた。

周りからは生き物の気配は全くしない。立っている木ですら死んでいるかのようにであった。

そんな夜と死が支配した世界に

その男は立っていた。

．．．．．。

黒「あれ．．．ここは．．？」

白「．．．なぎ．．．さ？」

黒「ほのか！！大丈夫？」

白「腕と首がすこし痛いけど．．．大丈夫．．。」

黒「あたしも背中が．．．ここって．．．。」

目を覚ますと2人は見知らぬ部屋にいた。

おそらく一人用のベッドだろう、それに2人寄りそうように眠っていたらしい。

2人は置かれた状況を確認するため部屋をキョロキョロと見回す。

落ち着いた色のある色のカーテン。シンプルなデザインの机。本棚には漫画や小説、それに料理本が置かれていた。

その雰囲気から男の人の部屋かな？と思い至った時、部屋のドアが開き2人がよく見知った顔、有里がおぼんにコーヒーを乗せ入ってきた。

有里「起きた？とりあえずコーヒー入れてきたけど・・・。」

「「ええ！？なんで有里さんがあ！？」」

―偽りは甘い毒となってその身を緩やかに殺す―

マンモス校、略して（ry

第3話 【夜の城】

有里「なんで・・・って言われても・・・ここオレの部屋だしなあ。」

黒「ええ！？ここ有里さん部屋なの！？」

白「ってことはこのベットは・・・。」

（有里さんのベット・・・／／／）

2人はさっきまで横になっていたベットを凝視し頬を染めてうつむく。

黒（あたしさっきまで有里さんのベットで・・・だからいいにおいだったのかな・・・ってなに考えてるの！？）

白（こんなことならもっと可愛い服着てくればよかったかしら・・・）

ベットを見てニヤニヤしたり、自分の服をみてため息をしたりと各々違った反応を見せる。

そんな2人を有里は不思議そうに眺めていた。

有里「で、なんで2人は裏山の前で寝てたんだ？日光浴か？」

黒「違いますよお！」「んじゃ何であんな所に？」「え〜っと・・・その・・・。」

なぎさの顔はまだ先ほどの赤みが引ききつておらずしどろもどろになりながら「あの・えっと・その・」。と動揺を露にしている。

白「えっと、わたしが立ちくらみを起こしてなぎさへ倒れ掛かったら一緒に倒れてしまつて……。なぎさも頭を打つたらしくてそれで……。」

狼狽するなぎさを見てほのかが咄嗟に考えた嘘で助け舟をだす。

有里「なるほど。それで体のほうは大丈夫なのか？ほのか。」

と、極自然な動作で右手をほのかの額にあて熱を計る。

白「あつ・。あああの・。ゆっゆゆりさん！？／／／」

有里「熱はないみたいだけど……。まあ日頃の疲れが出たんだな。今日は早く帰つて寝たほうがいい。」

白「あ……。わかりました。」

額から離れていく有里の手を、ほのかは名残おしそうに見つめた。

黒「あの・。ありがとうございました。」

有里「いいつてことよ。今度からは気をつけるんだぞ。なぎさはお

「つちよこちよいなとこがあるからな。」

黒「むう、おつちよこちよいじゃないもん！」

白「それじゃ、ほんとにありがとございました。」

有里「ああ、またな。」

黒「有里さん、またあした！」

白「失礼しますね。」

3人が互いに手を振り別れる。有里は2人が見えなくなるまでその背中を見送っていた。

白「ねえなぎさ。」

黒「どうしたの？」

白「わたし達は今日あった敵にやられて気を失った。」

黒「うん・・そうだけど・・。」

白「でもキュアジュエルが取られてない・・。どういふことかしら。」

黒「キュアジュエルが目的じゃなかった・・・ってこと？」

白「わたしがそう思ってるわ。むしろ腕試し・・・そんな感じがしたの。」

黒「もっと・・・もっと強くなきゃね・・・」

白「うん。わたし達は負けるわけにはいかないもんね。」

2人は現れた謎の強敵との再戦に意識を高めていった・・・。

・・・。。

なぜ2人を逃がした。フリティラリアよ・・・。

重々しく、暗く、低く、くぐもった声が部屋中に響き渡る。

闇の世界のさらなる暗き場所に立つ、弱い妖魔は近づくことすら許されぬほどの妖気が渦巻く場所。

中世の古城を模したその姿は茨に囲まれより近づきがたい空気を醸していた。

そこは妖魔を支配する暗黒軍の本拠地である、古城カロニクティオ

ン。

そしてその最上階に位置する夜の間。そしてそこに座するものこそ、暗黒軍を支配するもの妖王アクレアタムである。

答えよ。フリティリア

「オレが命令されたのはプリキュアの所へ向かえてことだけだ。消して来いだなんて今はじめて言われたんだよ。そういうことだバカ野郎。」

・・・・・・・・下がれ。

「言われなくても出てくわ。胸糞悪い。行くぞ闇^{メイ}」

闇「はい・・・お兄様。」

ポケットに手をつ込み3mはある重厚な扉を足で蹴り開け夜の間を後にする。

その後ろを黒とワインレッドを基調としたゴスロリを着た少女が小走りでついていく。

その少女、名を闇夢^{メイヤ}。アクレアタムと闇の力により生まれた妖魔の1人である。

闇夢という名前もフリティイがつけたもので実際の名は”ダークドリーム”だが闇夢自身はフリティイに冥と呼ばれるのを気に入っており、普段は闇夢のほうを名乗っている。

闇の力が強すぎて存在が安定せず消えかかっていた所をフリティイが

ある少女を基に自らの力を加え安定させた。その時から闇夢はフリティを兄と慕い何かと後ろを付いてくる様になった。

闇「あの・・・お兄様・・・。」

フリティ「・・・。」

闇「あまりアクレアタム様に食って掛からないほうがいいんじゃない？」

フリティ「オレはあいつの言うことを気かなきゃならんが、あいつの為になることをしなくちゃいかなわけじゃないからな。」

闇「お兄様がそうおっしゃられるのなら・・・。あら？」

「うおおおおおおお！フリティ殿おおおおお！」

フリティ「どあつ！！またか・・・この筋肉バカ！！！」

闇夢が視線を向けた先から猛スピードで走ってきた男がフリティヘタツクルをかました。

その男とは

全身金色、鍛えられた大胸筋、磨き上げられた上腕二等筋、6つに割れた腹筋！

体の9割が筋肉でできているのではないかというほどの鍛え抜かれた体。

髪型は赤いモヒカン、赤いひげ。下半身にはその筋肉のラインを際立たせるかのようなピチピチのタイツ。

彼を見た人は変態、気持ち悪い、筋肉バカ、男臭い、と口を揃えるだろう。

その漢、名をキントレスキーといった。

その変態は組み伏したフリティをその上腕二等筋で背骨を砕くほどの力で抱きしめ頬ずりをしていた。

フリティ「やめろ・・・この筋肉バカッ！！くさっ・・・筋肉くさいんだよ・・・やめっ・・・ひげっ・・・ちよっ・・・」

筋肉「フリティ殿おおおお！なんとおおおお可憐なのだあああぁ！わたしと・・・わたしと筋トレをおおおおおお！」

フリティ「筋トレ・・・筋トレはするが・・・お前なんかとするか！！！」

筋肉「その冷たい態度もおおおお！！うごおっ！！」

抱きしめるだけに飽き足らず体を擦りつけはじめたキントレスキーの無防備なわき腹に冥夢の容赦のない鋭い蹴りが突き刺さった。キントレスキーはわき腹をおさえもだえ苦しんでいる。

フリティ「助かった・・・闇夢・・・ありがとうな。本気で殺されるかと思った・・・」

闇「お望みでしたらここでとどめを刺し、二度とこのようにならないように・・・」

フリティ「嫌、いいから。時々恐ろしいほど怖いな、闇夢は・・・」

闇「他ならぬお兄様のことですの。」

フリテイ「嬉しいこと言ってくれるね。まあでも一応……。」

2人が会話している間も

「うおおおお私の体がああ私の愛があああこのようにこ
とでええええ!!」

「立てえええ立ち上がるのだキントレスキーいい！今日こそフリテ
イ殿とおおお！」

と喚いているキントレスキーの顔に拳を振り下ろしその意識を刈り
取った。

フリテイ「帰るか。」

闇「はい。お兄様。」

もの言わぬ黄金の塊を置いて二人は帰路へとついた。

「よいのですか……。アクレアタム様……。」

よい……。あれは……。私には逆らえん……。

「しかしあのようなことではキュアジュエルを得ることなど……。」

「

ならば・・・次はおぬしに任せる・・・

「はっ。キュアジュエル奪取の任、このスコルプめにお任せください。」

―それは仕組まれていたことが、運命か。―

第4話 【風月の少女】

そこは風月ふうげつの泉と呼ばれていた。

かつては、木々が青々と生い茂り草花は風に揺れ、その中心には大きく、澄み渡り美しい湖があり空に浮かぶ月を水面に揺らしていた。しかし今は、木々は枯れはて草花は腐り落ち、美しかった湖は干上がり乾燥した土を残すばかりとなっていた。

そんな荒廃した場所に2人はいた。

霧生満きりゆうみちる

赤色のショートヘアに緋色の瞳。灰色のシャツにロングスカートの出で立ち。

歳は見た目から13〜15歳というところだろう。ハレム学院の中等部にいてもおかしくは無い様な年頃の少女であった。

霧生薫きりゆうかある

青いロングヘアに藍色の瞳。髪は前髪を後ろへ流し額を出している。満と同じ服装をしており年頃も、おそらく満と同じぐらいだろう。

美少女、と呼んで差し支えない2人だったがその顔は喜怒哀楽の全てを取り払い、死人のように無表情なまま今は無き泉をただじっと見つめていた。

2人はアクレアタムの命によりこの泉で監視、守護、番人を務めていた。

しかし彼女達は妖魔ではない。”精霊王の楔”と呼ばれる妖精界と

暗黒界の狭間を見に行き暗黒界に迷い込んでしまった妖精なのである。

しかし幼かった2人はやがて力尽きた。そこを通りがかったフリテイが助け城へと運んでいったのだ。

聖なる力を失いかけた満と薫はその記憶を失っていた。アクレアタムはそこに目をつけ記憶が戻るまでの間泉の番人を命じたのだ。

行くあても記憶も無い2人は命ぜられるまま従うしかなかった。が、嫌々という訳ではなかった。

「何か思い出すまででいいしやってみたら？出来るだけ手伝うし住むのはオレの部屋を使えばいいよ」

というフリテイの言葉が9割以上の理由であった。

力尽き、見知らぬ土地で気を失いかけた自分達を抱えあげてくれたフリテイに命の恩人以上の気持ちを抱いていた。

出会いから3年の月日が経った・・・。

夜の間に後にしたオレは風月の泉へと足を運んでいた。毎日というわけには行かないがここへ来るのは日課みたいなものだからだ。

かといってこんな何も無い場所に遊びにくるほどオレは酔狂じゃないし狂ってもいない。

フリテイ「よっ！元気にしてたか？って3日前に来たばっかだけど

な」

湖を見渡せる草が茶色く変色している原っぱに小さく座っている2人の少女にオレは声をかけた。

あの糞野郎の言うことを律儀に守っている、あの日オレが助けた彼女達の様子を見に来ることこそ、オレの日課であり癒しだった。

満・薫「あに様・・・お久しぶりです・・・／＼／＼」

2人はオレに気づくと慌てた様子で立ち上がり服装や髪型を整える。妖魔や冥達は彼女達を無表情だの氷の姉妹だの呼ぶがオレにはその意味が全く解らなかった。

フリティ「悪かったな、三日ぶりになっちまって・・・あのバカ野郎から仕事まかされちまってな。」

満「いえ・・・あに様が来て下さってくれただけで・・・。」

薫「それだけで・・・私達は・・・。」

オレの一言一言に顔を赤くしたり俯いたり指を絡ませもじもじしたりと可愛い反応を見せる。

少し前まで何の感情も表さず無口だったことを考えると嬉しくなってくる。

満「それで今日は・・・どんなお話を？」

フリティ「ああ、昨日な、伝説の戦士プリキュアに会って来たんだぜ。」

薫「キュアジュエルを持つと言われる？」

フリティ「そうだ、ちょうど2人と同じくらいの女の子でな、なかなか強かったぞ。あれじゃあ妖魔部隊がてこずるのかもしれないな。」

満「フフ、あに様なんだか楽しそうですね。」

フリティ「そうか？あの子達は強くなるぞ。今は経験不足だけどな。」

薫「あに様の話を聞いていると、私達も虹の郷に行ってみたくありません……。」

フリティ「そうだよな……。満と薫はこと城しか見たことないもんな。」

満「はい……。私達もあに様の喫茶店に行って見たいです……。」

2人の顔が残念そうに下を向く。

番人とは言うがこの泉に他の生き物が訪れたことなどは無い。アクレアタムが封印の扉を使い誰も入れないようにしているからだ。

この泉は他にも9つあり、キュアジュエルの封印のためにアクレアタムが作ったものだった。

しかし風月の泉にキュアジュエルは封印されていない。

本来なら門番などという存在はここには必要ないだろう。ならば何故2人はここにいいのか。

アクレアタムが聖なる力の研究、解剖するために2人を縛り付けているからに他ならない。

幼かった満と薫の聖なる力は小さく、研究するまえに死んでしまうだろう。ゆえに力が大きくなるまで門番という役目で縛り付けておこうとしたのだ。

しかし3年経った今でも2人の力は小さいままである。

アクレアタムの思惑に気付いたフリティはあえてその策にのり妖魔たちから彼女達を離れさせた。

そして力を抑える宝石を自らつくりそれを首飾りとして2人に身に付けさせることでアクレアタムを欺いているのである。

フリティ「・・・よしっ！外の世界へ出してやるよ。満！薫！」

「えっ・・・！！」

フリティ「そうと決まれば準備だな！なかなか忙しくなるぞこれは2人ともまたな！」

と1人納得したフリティはいまだ茫然としてる満と薫をおいて走っていつてしまった

満「あ・・・あに様？」

薫「行っちゃった・・・。」

2人は茫然としていたもののどちらともなくその場に座り込む。

満「あに様・・・虹の郷へ連れてってくれるって・・・。」

薫「うん・・・。そう言ってた。」

満「あに様嘘つかないもんね・・・。」

薫「うん・・・きっと連れてってくれる・・・。」

―どんなところかな・・・―

―あに様がいるならどんな世界でも・・・―

―そうね・・・色んな人がいるんだろうな―

―友達が・・・できたら・・・素敵ね―

―そうね・・・―

「あれ？こんな箱あつたかなあ？」

「なにかしら・・・綺麗な箱・・・。」

「うわっ！開いた！なにこれ・・・宝石？」

「きゃっ！な・・・なに！？・・・綺麗な・・・石・・・。」

―花と鳥は出会い、月と風はそれを夢見る―

第5話 【睡魔】

有里「あゝ眠い……。もう店しまつて寝ちゃおうかな……。」

放課後の喫茶店HARMのカウンターで眠たげな目を擦りながら有里は食器を拭いていた。

寝たのは日付が変わってから3時間が過ぎてからであり、また昼食の仕込みもあつたので5時には起床していた。

ふらふらしながらも仕込みを終わらせ学校へと向かった。

とはいってもHARMは校内にありその一室で寝泊りしている有里は学校まで徒歩0秒である。

有里はまだほとんど生徒のいない7時ごろに教室へ行き持参枕に顔をうつめ惰眠を貪るのが日課なのだ。

喫茶店のほうで寝ろよと皆に言われるがそれではおそらく昼まで起きることは無いだろう。

授業中もほぼそのまま過ごす。時々起きたり教師に注意されないかぎりそのままの体勢だ。

咲「ちょっとお！有里さん話聞いてる！？」

舞「眠たそうですけど……。大丈夫ですか？」

声に気付き前を向いてみるとむくれた顔と心配そうにこちらを見つ

める顔があつた。

このむくれているほうが日向咲。ひめうがさき

2年生でソフトボール部所属、実家がパン屋を経営していてうちもお世話になっている。

髪は短めで明るいオレンジがかつた色をしている。

左右にヘアピンをしておでこを出しているのが可愛らしく持ち前の活発さをより際立てている。

そしてこつちの上目遣いがたまらないほど可愛い子が美翔舞。みしょうまい

同じく2年生で確か咲と同じクラスだった気がする。

髪は黒に少し紫が入つたような色。長髪だが頭のとっぺんで結つてある。

美術部に所属していて絵の腕はなかなからしいが・・・なぜか見せてもらえない。

有里「眠たいんだって・・・」

返事をしながらあくびを噛み締める。

舞「確かにちよつと目の下にクマが・・・」

咲「ほんとだ、ちゃんと寝てないんでしょ!」

有里「だからそう言つてんでしょ・・・」

なんかもう限界来たかも・・・頭は痛いわ瞼は重たいわ・・・

よし、なんとか2人にはお引取りいただいて今日は店じまいだ・・・

咲「でねでね! すっごい綺麗な箱があつて、それをあけたらすっご

い綺麗な石が・・・。」

有里「うあー！すっげー！かっこいー！マジかよー！オレも欲しいなー！帰れー！」

咲「ちよつとお！有里さん全然聞いてないでしょ！？」

ダメか・・・頭がおかしくなったテンションでいけばドン引きついでに帰るかと思ったが・・・。

舞「あの・・・ほんとに大丈夫・・・ですか？」

やっぱり舞は天使だなあ・・・。よしっ狙いは舞だ！

有里「すまない・・・舞のそのかわいい顔を見ていたら胸が苦しくなつて・・・！だから今日のところはお引取りを・・・」

舞「ええ！？そんな可愛いとか・・・わたしそんなこと・・・有里さんてば・・・／＼／」

ダメか・・・なんかうつむいてしまった・・・。こりゃ下手すると夜までコースになるぞ・・・。

なんかもう眠たすぎて訳わかんなくなってきた・・・。
よし寝よう、すぐ寝よう、寝る寝る寝るね。

有里はふらふらとカウンターから出ると奥に置いてあるソファに横になり、すぐに寝息を立てはじめた。

咲「って有里さーん！なに寝てるの、まだ話の途中ー。おーきーてー」

その様子を見ていた咲はすぐさま有里に寝ている有里の上に馬乗りになり揺すりはじめた。

咲「有里さーん・・有里さんってばー起きてーってわっ！」

寝返りをうち咲きがバランスを崩し倒れる、とその体を有里は抱き枕のように抱きしめた。

有里は抱き枕派であり夏・冬関係なく愛用しこたつで寝るときも抱き枕をかかしたことはない。

咲「ちよつと有里さつ・・うきゃっ！・・もお起きてって・・やめ・・。。。」

突然のことにパニックになり顔を真っ赤にしながらもその拘束から逃れようとじたばたもかく咲。

その声にさっきから「そんな可愛いだなんて・・男の人にはじめて言われた・・でも有里さんだから誰にでも言ってるのかな。」などとぶつぶつ言っていた舞が気付いた。

舞「ちよつと咲い！なにしてるの！」

咲「違うつて有里さんがいきなり・・！」

舞「いいからうはうなうれうさうい！」

咲「いたつ・・ちよつと痛いつて舞！」

舞が咲きの腕を持ち思いつきり引つ張っている。抱き枕の刑から開放された咲と舞はその勢いで後ろにひつ転んだ。

咲「もう、なんなの舞い！」

舞「いや・・・その・・・咲が変なことしてるから・・・。」

咲「有里さんがいきなり・・・。ってそうだと有里さん寝ちゃったね。」

舞「ずっと眠たそうだったから。今日はとりあえず帰りましょ咲。」

咲「うん・・・そうだね、起こしちゃ悪いもんね。」

2人は荷物をまとめ代金を置くと静かにHARMを後にした。

それからしばらくすると同じ制服を着た少女2人が入ってきた。

（お兄様・・・起きてくださいますか・・・お兄様・・・。）

（寝顔も素敵です・・・お兄様・・・。）

なんだ・・・あいつらまだ居たのか・・・。

1度は放って置いてみたものの気が知れているとはいえそこはお客様、嫌々ながら重たい体を起こす。

寝ぼけ眼で見上げるとそこにはハルム学院の制服を着た満と薫が立っていた。

有里「なんでお前らこんなところに・・・？」

満「お兄様・・・寝ぼけてるんですか？」

薫「お兄様のおかげで私達虹の郷へ来ることができて・・・それにお兄様と同じ学校に通うことも・・・。」

2人は言い終わり互いに目配せをすると小さく頷きその場でクルツと1回転をした。

長すぎ短すぎないスカートがフワツツと捲りあがり人形のような白いふとももをあらわにさせた。

そしてスカートの裾をつまみポーズをとって見せた。いつもは無表情なその顔も頬は少し赤く染まりなにやら照れくさそうだった。

登校は明日からだつてのに・・・こいつらよっぽど嬉しかったんだろうな、ずっと外の世界が見たいって言ってたもんな。

有里「可愛いよ、2人とも。よく似合ってる。オレも頑張ったかいがあるってもんだ。」

そう言いながら有里はスツツと立ち上がり2人の頭を優しく撫でる。満も薫も目を細め心底幸せそうな顔でその感触を楽しんでいた。

HARMの中をほんわかしたピンク色の空気が流れる・・・

しかしそんな静寂をぶち壊すかのように窓ガラスを突き破り冥夢が

飛び込んで来た。

驚きそちらを見た有里は恐怖する。明らかに体から黒いオーラが溢れ出ている修羅がそこにはいた。

やばい！なんかよくわからんが怒られる！？逃げな・・・とそこまで思考したところで一瞬有里の意識が飛ぶ。

その修羅は有里のところへ跳躍し、空中で3回転するとその勢いのまま有里の顔へ全力の空中回し蹴りを放ったのだ。

満と薫はその修羅の侵入に驚いた様子は無く、ジャンプした時点で有里から離れていたので巻き込まれることはなかった。

いつて・・・なんだってんだ・・・冥夢までなんで虹の郷に・・・。
っていうかそりやそうだよな・・・普段からライバル視してる満と薫が虹の郷へ行けるってのに自分だけお預けだからな・・・。

有里が顔を上げると冥夢は拳を振り上げ留めの一撃を繰り出す寸前だった。

有里「ちよつと待った、動くな、ストップ、というかやめてくれー
！！」

そう言い一瞬動きが止まった隙について閻夢の後ろに回り込みその体を腕ごと抱きしめた。

閻「ちよつとお兄様！離してください！こんなことされたからって許しませんわ！」

有里「わかる！お前の気持ちはわかるが朝までサンドバックコース

は勘弁してくれ・・・そしてオレの話を聞け！」

満「お兄様を蹴り上げるなんて妹の風上にもおけないわね、薫。」

薫「そうね、やっぱりお兄様に相応しいのは私達ね、満。」

満「虹の郷とお兄様のことは私達にまかせて、」

薫「あなたはキントレスキー様と筋トレでもしてたらいいんじゃない？」

満と薫は有里の腕の中でじたと暴れる闇夢にいつも以上の無表情でそう告げた。

闇「言わせておけばあああああ！！この性悪姉妹が！！！」

満「女の嫉妬は醜いわね。」

薫「そうね、ああはなりたくないわ。」

闇夢はたださえワインレッドの瞳をさらに血走らせ抱きしめられたまま手足を振り上げ2人に殴りかかろうとした。

しかし2人に届くことはなく溜まった怒りを発散することが出来ずに涙となつて溢れはじめ、しまいには大声で泣き出してしまった。

闇「うええええ・・・お兄様ああ・・・なんで私だけ・・・わたしだけえええ・・・。」

有里「あいつをやり込むのは2人が限界だったんだ・・・それにこの2人は枯れ果てた泉しか見たことが無い・・・そんなの悲しすぎ

るだろ？」

有里の胸に顔をうずめ泣き出してしまった闇夢の頭優しく撫でながら話しかける。

それだけですぐに冥夢の泣き声は小さくなっていく。

闇「でも・・・でもお・・・。」

有里「大丈夫・・・お前もいつかこの世界に連れてきてやる・・・ホントウだ。お前との約束を破ったことがあったか？」

闇「いっぱい・・・ある・・・。」

有里「あはは・・・そうだったかな・・・。」

闇「でも・・・。」

有里「ん？」

闇「メイが泣いてるときにくれた約束は・・・破ったこと無い・・・。」

有里「ん・・・そうだな。」

闇夢はすっかり泣き止み顔を有里の胸に擦り付けていた。

満「あの・・・。」

2人の姿を静かに見守っていた満と薫がおずおずと近寄ってきた。

薫「私達のせいで・・・無理を・・・なされたんですか？」

そう言いながら満は右の、薫は左の有里の袖を掴み不安そうな、怒られている子どものような目で有里を見つめている。

有里は2人の頭に手をのせ、さきほど冥夢にしていたように優しく、頭を撫で始めた。

有里「あいつからちよつと仕事をいわれただけだよ、無理なんてしてない。・・・それにお前達のためならどんな無理だってこなしてやるさ。」

その言葉に満も薫も涙をこぼした。必要とされたことが嬉しかった。自分を認めてくれるのが嬉しかった。

満「フリティ兄様・・・」

薫「一生付いてゆきます・・・」

2人はこぼれる涙を隠すように、有里の体を強く抱きしめていた。

・・・。

懸命な読者であろう皆様は2話の段階で気付いていただろう。

朔路有里とは仮の姿。その真の姿こそ妖魔軍の告死戦士フリティラリアその人なのだ。

―喫茶店HARMを包むピンクの空気は―

―その主人の睡魔が限界になるまで続いていた―

第6話 【5つの宝石】（前書き）

感想ありがとうございます。
頑張ります！

修正：ミント↓ミルク。

ありえないミス、死にたい。寝ぼけながら書くのは控えましょう。

第6話 【5つの宝石】

常しえの闇を礎に建てられた古城の中を男は歩いていった。

その日は雨が降りしきり、所々廊下にある窓は雨に当てられ小さく声を出している。

空気は湿気を運び、撫でる風は生暖かさと重さを孕んでいた。

廊下をだらだらと歩くその男は、お世辞にも機嫌が良いとはいえなかった。

フリ「クソ野郎が・・・こんな平日の真昼間からお呼び出しかよ・・・」

昨日の夜、就寝しかけていたフリティの元へアクレアタムから朝から城へ来るよう報せがあったのだ。

無論昼間でぐっすり寝て昼食をとった後でやっとフリティは暗黒界へとやってきた。

めんどくさくなってきた・・・なんかイライラしてきた。壁殴ろうかな・・・イライラしてきた。窓割ろうかな。

ぐだぐだしたり壁を蹴ったり窓を開けっぱなしにしたりしているうちに夜の闇へとたどり着く。

3mはあるかという扉をフリティはヤクザキックで蹴り開ける。ポケットに手をつ込み気だるそうな顔でそこらへんに唾を吐きマ―キングもおこたらない。

不遜を無礼で煮しめたような態度で玉座へと近づいていく。
1つ歩くごとにそこらじゅうを睨んでいる。壁を睨んだり、天井を
睨んだり、もはや頭のおかしい人と紙一重である。

アクレアタムの前まで来ると仁王立ちを決め込みペツと吐き出した
後、腕を組み玉座を睨みあげた。

フリ「んで用件は？さつさと言えよ・・・ああもうノロマが・・・お
い！喋れねえのかよ！」

夜の間に入ってまだ3分も経っていないだろう。
しかしフリティは足は貧乏ゆすりをし舌打ちを10秒に1回行つて
いる。我慢の限界というよりは我慢をしていない。

アク「貴様には約束を果たしてもらおう。」

黒い霧のようなものが人の形を模し、くぐもった声をかけてくる。

フリ「うるせえ喋れなくせえんだよ黒いんだよ暗いんだよ。」

アク「妖精界への潜入を命じる。」

アクレアタムは毎度のフリティの無礼を無視し話をすすめる。

約束とは満・薫を虹の郷へと行かせるためにフリティが交渉したと
きのものだ

精霊力とは心の力、それも善の心が源である。人とのつながりの中
でそれは強くなっていくものだ。フリティはアクレアタムに説いた。

しかしアクレアタムとしては2人は目の届く場所においておきたい。そこでかねてからアクレアタムが臭わせていた妖精界への侵入を自らが行うと言ったのだ。

妖精界との狭間には”妖精王の楔”とよばれる封印があり、妖魔は下手に近づくことも叶わない。

しかしフリティはそれが出来るのだ。しかしそれを知っているのは冥夢、満、薫の3人だけであった。

妖精界の情報が喉から手が出るほど欲しいアクレアタムがその取引に応じた。

アク「妖精妃クイーンと守護精フェーリア。この2人への接触と情報収集。可能ならば消して来い。」

チツと大きく舌打ちで返事をし、入ってきた扉を同じように蹴り開けてでていく。

アク「スコルプ」

スコルプ「ここに」

アクレアタムが名を呼ぶと闇の中からスコルプが姿をあらわし玉座の前に跪く。

アク「解っているな。」

スコ「はい、邪魔者なきときに・・・。」

行け、と一言アクレアタムがかけると跪いていたスコルプの姿が消える。

そして、玉座を覆っていた闇が広がり始め、夜の間は完全に闇に染まった。

城からでたフリティは泉の前にいた。

その泉の名は”狭間の月”といい小さな泉の真ん中に月が妖しく映り浮かんでいた。

しかし空に月は浮かんでいない、それどころか星すらないのだ。暗黒界の空は純粹に黒の情景だった。

半径は5mほどだろうが、その小さな泉のふちに足をかけ右足から確かめるようゆっくり入っていく。

腰ほどまで浸かりながら泉の中心へと進んでいき水面に映った月へ飛び込んだ。

ゆっくり・・・ゆっくりと沈んでいく・・・真っ暗な世界が続く・・・。

どれほど経っただろう、気付くと足が地面のようなものについていた。

フリティはしゃがみ、そっとその狭間に手をつける。

すると手をつけた場所から視界を奪うような光が溢れだした。

懐かしい・・・やさしい・・・あたたかい・・・ひかり・・・。

フリテイの体は光に包まれゆつくりと浮かんでいった。

フリ「ここが・・・妖精界・・・」

泉からでて体を伸ばしながら辺りを見回す。

不思議なことに服は濡れてはいなかった。周りには草花が生い茂り木々に覆われており生氣に溢れていた。

フリ「とりあえず・・・第一村人に会わなきゃな」

道らしきものを見つけキョロキョロしながらもその道を歩いている。

へえ綺麗な花が咲いてるんだな、誰かが世話してんのかな？

あいつらにも見せてやりたかったな、なんとか持って帰って店に飾れないもんか・・・って無理かなあ

おっ？なんだあれ？

道端にしゃがみこんで花を見たり木の実を取ってみたり食べてみたり摘んでみたりしていると建物を発見した。

壁も屋根も柱も白く装飾が施されていて神聖な雰囲気醸し出している。その周りを花卉がひらひらした赤い花が囲んでいた。

ぐるりと一周してみると白い扉に気付いた。特に迷いもためらいもせずその扉に手をかけ静かにあける。

中は床に大きな魔方陣が描かれていてその上に5色の小さな宝石が浮かんでいる。

そして天井にもそれと対応した色の魔方陣が描かれ薄く光っていた。

その光に見惚れ、1歩踏み出すと部屋中の魔方陣が白く光りだした。

フリ「綺麗だ・・・オレはこれを・・・知ってる・・・？ずっと前から・・・」

そう呟きながらまた1歩、また1歩と近づいていく・・・。

魔方陣の中心、石のところまで辿り着き、右手が石に触れようと・・・

「それに触らないでください！！！」

後ろからの大きな叫び声に我に振り返りフリティは後ろを振り返る。
するとそこには白いドレスを着た少女が立っていた。

その少女は黄色く長い腰まである髪を両端で結び、ツインテールにしおでこを出していて歳は12〜13という感じに見える。

フリ「これに触ったら・・・どうなるのかな？」

フリティは5つの宝石を右手で掴みその少女を睨み返す。

「それは精霊王の輝きのかけら。いますぐそれを返してください！」

少女は踏み出し噛み付かんばかりの勢いでそう叫んだ。

フリ「どうなるのかって聞いているんだけど・・・まあいいや、気に入ったんでこいつは貰ってくぜ。」

フリティはどこか芝居じみた風に宝石をポケットにしまい今だ睨む少女をニヤリと笑った。

「クイーン様！お下がりください！！」「賊は私たちが・・・」

するとそこへ2人の青年が入りこんでくる。

1人は金髪、もう1人は茶髪をしており騎士のような正装にマントをはおりその手にはフルーレ（突き用の剣）が握られていた。

「ココ！ナッツ！ジュエルを！」

クイーンと呼ばれた少女はそう叫び邪魔にならないよう扉から出て行った。

「国の秘宝に手を出した以上命はないと思え！！」「ジュエルは返してもらっ・・・」

いい終わるや否や2人はその手に持つフルーレで切りかかってきた。

フリティは先に向かってきた茶髪の男の剣を避け足を払い金髪の男のほうへ突き飛ばす。

避ければいいものを金髪の男は受け止めてしまいたたらを踏んでしまっ

その隙をみて2人の横を走りぬけ神殿を出た。

一瞬外にいた少女と目が合うが立ち止まることも無く走り去っていった。

この神殿には封印がしてあったはず・・・それなのに・・・封印が破られてすらいらないなんて・・・どういうこと？
それなのにあの人はこの中にいた・・・

「申し訳ありません。」「お怪我は・・・。」

「彼はあちらへ行きました。追ってください。」

神殿から2人が出てくる。彼の走り去った方向を指差すと1度頭を下げまた彼を追いかけた。

先ほどの侵入者・・・少し気になります・・・。

「ミルク」

「はい、こちらに。」

呼ばれるとボンツと煙を立てて少女が姿をあらわす。

紫色の髪の少女はススツと近づき黄色い髪の少女へ跪く。

「あなたにローズジュエルを授けます。彼の尾行をお願いできますか？」

「そんな・・・ローズジュエルは城に伝わる秘宝です・・・私なんかが受け取るわけには・・・。」

「お願いします。あなたにしか頼めないのです。」

「かしこまりました。このミルク、必ずや精霊妃様の命を成し遂げて見せます。」

少女は紫色に光る石の指輪を手にとると現れたときと同じようにボンツと煙をあげてその姿を消した。

その姿を見送ると少女は神妙な面持ちで城へと踵を返すのだった。

「待て!」「死んでもらう・・・。」

神殿を出てからも2人は付かず離れずの距離を追いかけてきた。時折茶髪の男が剣をふるい衝撃波を飛ばしてくるが、そのたびにフリティも地面に拳を打ち生じた衝撃派で相殺していた。

石を投げたりけん制をしつつフリティは狭間の月へと辿り着いた。

フリ「あれがクイーンか・・・フィーリアには会えなかったが、仕方がないか。」

チラと後ろを見た後、泉のふちを飛び越え水面に映る月へ飛び込んだ。

「くっ・・・逃したか!」「この泉は暗黒界へとつながっていると
いう・・・まさか。」

ミルク「ココ様、ナッツ様。」

少しして追いかけていた2人も泉へと到着する。当然のように逃亡者の姿はなく泉にはまだ波紋が浮かんでいた。

すると泉を眺めていた二人の後ろへ音も無く先ほどクイーンにミルクと呼ばれていた少女が現れる。

その顔は出陣する戦士のように目をぎらつかせていた。

「ミルク・・・!?!」「何故ここに?」

2人の青年は振り返りそう少女に尋ねた。

彼らからすれば少女は城のお世話係である。

しかし普段の彼女からは考えられないような剣呑なオーラが2人から次の言葉を奪っていた。

ミルク「賊の始末は私にお任せを。ココ様、ナッツ様はお城へお戻りください。」

そういい終わると彼女は一礼し泉へと入っていく。

水面に映る月の前まで来るとミルクを紫色の光が包んだ。

少女は振り返ることもせず、月の中へ姿を消した。

2人はそれをただ呆然と眺めていた。

フリ「闇に囲まれて・・・嫌な・・・感覚・・・でも・・・オレは・・・とかやってる場合じゃねえ!!」

狭間の月を通り暗黒界へと戻ってきたフリティは転がるように泉から出てその勢いのまま走り出した。

数刻走った所で、

フリ「あれ？あいつらってこっちの世界に来れんのか？」

ということに気付き、ふうと一息ついてからだだらと歩き始めた。

やっと城が見えてきた・・・全然妖精界見られなかったな・・・報告めんどくせーし、このまま虹の郷行っちゃうか。

とフリティが虹の郷へ向けて歩いていると、

「見つけた！ジュエルを返しなさい！スカイローズ・トランスレイト……！」

という叫び声とともに青紫の光が視界を奪った。

何事だ？っていつか誰だ？そしてこれはなんだ？待ってたほうが良いのか？

広がった青紫の光が凝縮されていく様をフリティはボーツと眺めていた。

ローズ「青いバラは秘密の印……ミルキーローズ……！」

青いバラを咲き散らせミルキーローズと名乗った少女が決めポーズを決めている。

しかしその顔は親の仇を見るようにこちらに眼を飛ばしていた。

フリ「おおー！かつこいい、かつこいい。パチパチパチってうおおー！！」

死んだ目をしながら拍手をしているとローズが飛び蹴りをかましてきた。

後ずさりながらもそれを避けるが体勢を整える間もなくローズがキックやパンチのラッシュをかけてくる。

それをはじき、受け止め、払い、避けながら押されっぱなしになっている。

以前目は死んだままでやる気のなさがありありとでている。それがローズの反感を買いラッシュはより激しくなっていた。

気付けば二人は虹の泉近くまで来てしまっていた。

フリ「ああもう！・・・このっ・・・しつこいんだ・・・よ・・・！」

ローズも多少息切れしてはいるがその勢いは衰えずむしろ早さも重さも増してきている。

くそっ・・・女の子だからって下手に出れば・・・つつつても女の子に手は出せないし・・・。

ローズ「くっ・・・いい加減に・・・倒れなさい！！！」

ローズが右手に力を込める。右手に青紫のオーラが集まり明らかにやばい雰囲気だ。

左足に力を入れ思い切り踏み出し右手をフリティの顔めがけて振り下ろす。

フリティ「させるか！！！」

負けじとフリティもその右手を受け流し隙の出来た足を蹴り払う。しかし勢いの乗ったローズの体はそのままフリティに当たり抱き合う形で倒れこんだ。

「くっつて噓！？」「」

しかし倒れこんだ先は泉の中、ばっしやーと大きな水柱を上げた。

「うつひやあああああ！」「いやあああああ！」「」

2人はそのまま泉のそこへと沈んでいった。

――出会いはきつかけを生む、それは善くも悪くも――

第7話 【新たな戦乙女】

フリ「のああああああ！！！すげえ！落ちてる！？オレ落ちてるよ！！」

紫「なに！？なにこれえ！？いやあああああああ！！」

どうもフリティラリアです。先ほど変身した青紫の少女に倒れ掛かれ

（これが少女というやつか！？やわらかいしおい・・・たまらんち！）

とか考えながら体が浮遊感覚に包まれその少女と一緒に泉に突っ込んだ訳で。

普通ならハルム学院の隅っこにある泉に繋がってあるんだけど、2人して飛び込んだもんだからずれたらしい。

横にずれるなら良かったんだけどずれた出口はなんと上空3000m。

散々殴りかかってきていたミルキーローズ？と名乗った少女はいまや恐怖心からオレの右腕にしがみついている。

今も「いやあああああ！きゃあああああ！！」とか叫び続けている。

横でこうも叫ばれると逆に冷静になってしまふよね。

フリ「くつつくな！腕を広げて胸を張れ！」

すでに涙目というか泣きながらも言われるがままに左手を繋ぎながら手を広げ体勢を整える。

ああ、このまま行ったら学院に落ちるなあ・・・

と、いまだに悲鳴をあげる少女を横目に見て、少なくともこの右手は離さないでいてあげよう。着地くらいはかばってあげようと密かに心に決めるのだった。

チャイムが鳴り響き学院は放課後を迎えていた。

静まり返っていた校舎はがやがやと騒がしさを取り戻し、生徒達がぞろぞろと出てくる。

”ほぼ女子校”と言われているハルム学院は校舎から出てくる生徒達も当然ほとんどが女子であり、年頃の少女というものはただそれだけで賑やかだった。

その中でも容姿、賑やかさという点で一際目を引く4人組の姿があった。

咲「ねえねえ、満さんはどこに住んでるの？どこから来たの？ソフトボール興味ある？」

舞「ちよつと咲、いっぺんに聞いたら・・・満さんも困ってるじゃない

い。」

満「いえ・・・いまは学校の近くに宿を借りて薫と2人で暮らしています。」

咲「ええ！二人暮らし！？すごーい！」

舞「でも大変なんじゃ・・・。」

薫「家事は最低限出来ますし、近くに兄も住んでいますので・・・。」

咲の度重なる質問攻めやリアクションを微笑みながら満が返し、薫がそれに付け足しをする。そんな咲の若干の暴走を舞がたしなめている。

しかしそんな咲の暴走も、朝からすれぱずっと和らいだものだった。

咲が教室に来てみるとなにやら教室がざわついている。

親しい友人に聞いてみようとしたらむしろ友人のほうから近づいてきて説明してくれた。

なんでも転校生が来るらしい。それも2人も。

へえ、そうなんだ。どんな子なんだろ？と先に登校していた舞と話していると担任が入ってきた。

寸前まで噂話に花を咲かせていた少女達も蜘蛛の子を散らすように席に着く。

「もう知ってると思うが我がクラスに生徒が2人増える。それじゃあ早速、入ってきてください。」

担任が教卓に立ちそう告げると教室の扉が開き2人の女の子が入ってくる。

咲は担任の横に立った2人を見て素直に”綺麗な娘”と思った。中学2年生という歳ではまだ体も発達途上で若さに溢れ、可愛いといわれる事はあっても綺麗、美しいということは少ないだろう。

しかし咲の目にはその2人がただ美しく見えたのだ。容姿、というだけなら満も薫も可愛らしいという部類にはいるだろう。

ただ溢れ出る気品と自分達よりも人生の少し先を歩いている、というような達観した様子が咲にそういった感想を持たせたのだ。

ホームルームも終わり担任が退室するや否や咲は舞を引きつれ席に座る満・薫に歩み寄った。

そこからは休み時間の度に咲は舞を連れ満と薫のところへ行き話しかけ続けた。

咲が突破口を開いたこともあり他の女子もその輪に入り結果として1日で2人はクラスに溶け込むことが出来たのだった。

放課後になり咲は学校の案内を名乗り出た。当然のように舞もそこに加わり4人で校内を回っていた。

咲「まずはどこを見たい？」

舞「今の時間なら部活動も見れるし。」

満「学院内に喫茶店があると聞いたんですが。」

薫「そちらに行って見たいです。」

咲「HARMのこと・・・？今日やってるかなあ。」

舞「お昼はやってなかったみたいだけど・・・。」

満「これから利用することも多くなると思いますし」

薫「場所だけでも知っておきたいんですが・・・」

咲「よし！じゃあ行きますか！」

舞「あ、ちよつと1人で走ってたら案内にならないじゃない。咲い！」

咲が率先する形で4人は喫茶店を目指し玄関口へと向かった。
靴を履き替えHARMに向かう間も咲は2人にずっと話しかけている。

HARMの近くまで来ると4人はお店の前に2人の人影がいることに気付き、そちらの2人も同じく気付いたようでトコトコとこちらに近寄り話しかけてきた。

なぎさ「咲、舞！やつほ！」

ほのか「咲さん、舞さんこんにちわ・・・そちらの方は・・・。」

咲「あ、先輩！お久しぶりです！」

舞「お久しぶりです。・・・2人は今日クラスにきた転校生で・・・」

満「霧生満です。よろしくお願いします。」

薫「霧生薫です。よろしくお願いします。」

なぎさ「えっと・・・3年の美墨なぎさ！ラクロス部キャプテン。よろしくね！」

ほのか「同じく3年の雪城ほのか。科学部部长なの、困ったことがあつたらいつでも声かけてね？」

満と薫が自己紹介と呼ぶには短すぎる紹介をし小さくおじきをするとなぎさが腰に手を当て元気よく、ほのかが鞆を前で持ち静々と自己紹介を返す。

舞「先輩達もHARMですか？」

ほのか「そのつもりだったんだけど・・・。」

なぎさ「有里さんまたサボってるみたい。昼からずっと開いてないし学校も来てないんだって。」

咲「そうなんですか・・・。」

舞「また寝てるんですかね・・・。ごめんね、有里さんのことも紹介したかったけど・・・。あ、有里さんってこのマスターさんなんだけどとってもかっこよくて気さくだし優しいしちょっとだらしないしすぐからかってくるけど本当に嫌な事はしないし・・・。」

咲「舞？ちよつと舞つてば！」

舞「ひう！どっ．．どうしたの！？咲？」

咲「どうしたのってこっちの台詞だよ。有里さんのこととなると暴走するんだから．．。また明日こよ？」

満「場所がわかったただけでもありがたいです。」

薫「案内ありがとうございました。」

なぎさ「それじゃ帰ろっか。みんなと一緒にね？」

ほのか「そうね。帰りましょ？．．．そういえばさっきから．．．やけに静かな気が．．。」

なぎさ「ほんとだ。他の生徒がみんないない．．．まだ夕方前なのに？」

咲「部活の声も聞こえませんか。」

舞「なんか不気味な感じ．．。」

4人があたりをキョロキョロと見回しているとき、満と薫は目を見合わせ小さく、まだ辺りを見回している4人に気付かれない程度に頷いた。

満・薫「教室に忘れ物をしたみたいなので1度教室へ戻ります。」

咲「あ、じゃあ一緒にいくよ。」

満「いえ、皆さんは先にお帰りください。」

薫「それでは失礼します。」

舞「あ、満さん、薫さん・・・。」

2人は1つお辞儀をすると校舎のほうへ歩き去ってしまった。
咲と舞が若干寂しそうな表情を浮かべているのをみて、

なぎさ「それじゃあ帰ろっか！」

ほのか「HARMには寄れなかったしタコカフェでも寄ってく？今日
はわたしが奢ってあげる。」

咲「ほんとですか？やった！行きます行きます！」

舞「それじゃお言葉に甘えちゃいますね？」

なぎさとほのかが気をきかせて話題を変えると2人は花が咲いたよ
うな笑顔を見せる。

4人が連れ立って校門へ歩き始めると・・・

スコルプ「貴様等がプリキュアか？我が名はスコルプ。暗黒軍が一
の幹部。」

バシユツつと4人の目の前で黒煙が立ち、声と共に男が姿を現した。

なぎさ「だれ！？」

ほのか「咲さん、舞さん！校舎に避難して。」

咲「えつでも先輩達は!？」

舞「先輩達も一緒に!」

なぎさとほのかはゆつくりと男と咲・舞の間に入る。

ほのか「私達は大丈夫だから。」

なぎさ「行くよ!ほのか。」

ほのか「ええ!なぎさ。」

2人は片手を握り合いもう一方の手を力強く天に掲げた。

「デュアルオーロラウェーブ!」

7色の光が2人を包み込み華麗なる戦士の姿へと変身・・・するはずだったが・・・。

少女達の体は3mほど吹き飛ばされ地面に横たわっていた。

スコルプ「変身などさせるものか・・・そうでなければただの少女・・・。
容易いな。」

なぎさとほのかが手を上げた瞬間にスコルプは間合いを詰め、2人に当身をかませ変身する前にその体を吹き飛ばしたのだった。

完全に無防備の所へ当てられたために2人はなすすべも無く意識を刈り取られた。

舞「なぎさ先輩!ほのか先輩!!」

咲「あんた一体なんなの！？何で先輩達にこんな・・・！」

舞が倒れる2人に近寄り咲がその前にかばう様にして手を広げ立ちふさがった。

なぎさとほのかが気絶しているだけということを確認すると舞も立ち上がり咲のすぐ横に立った。

男はそんな2人を何の感情も籠もらない目で見ていた。

風に流され浮かんでいるたんぽぽを邪魔だと思っただろうか、道に落ちた一滴の雫をうつとおしく思うのか。

男にとって倒れた少女にかばい立ち、こちらを睨みつけてくる少女などその程度の障害でしかなかった。

どかしたっていい、無視したっていい、気まぐれに蹴飛ばしたっていい。

どれを選んでも今も気を失っている少女達からキュアジュエルを奪うということは変わらない。

変わらないはずだった・・・。

誰だかわからない・・・訳もわからない。先輩達が手を上げたと思ったらあの男に吹き飛ばされた。

今も気絶してるもしかしたら病院に連れて行かなきゃかもしれない。

気がついたら先輩達をかばって立っていた。

怖い怖い怖い怖い！いつ舞が横に来たのかも解らない・・・。
震える手で舞の手を握り締める・・・。

舞の手も震えていた・・・強く握り返してくるのが解る。それだけで勇気が沸いた。

絶対に先輩を助けるんだ！ってそれだけは決めた。そうしたらあたしも舞も不思議と震えが止まっていた。

咲「えっ？」

舞「なに・・・これ・・・？」

いきなりポケットに入れてた宝石が光りだした！

あたしは黄色い、向日葵みたいな色の光。舞は水色の空みたいな綺麗な光だった。

2人してポケットから光ってる宝石を取り出して手のひらに乗せてみた。

言葉が浮かんでくる・・・今なにをするべきか、それが解かった気がした。

舞も同じみたい、お互い顔をあわせて手を力強く掲げた。

「デュアルスピリチュアルパワー！！！！」

虹色の光が2人に降り注いだ。

「花開け！！大地に！！！！」

輝く花びら、しなやかな羽。それを咲き散らせ、舞い躍らせて少女

達はその様相を変えていく

「羽ばたけ！！空に！！！！」

凜として咲く花のように、優雅に舞う鳥のように、可憐さも愛らしさもありませんながら

「輝く金の花！！キュアブルーム！！！！」

その雄々しさは・・・

「煌めく銀の翼！！キュアイーグレット！！！！」

戦乙女のものだった。

「ふたりはプリキュア！！！！」

花「つてなにこれえ！？」

鳥「勝手に台詞が頭のなかに・・・プリキュアって！？」

頭に浮かぶまま、体の動くまま気付けば二人は変身していた。

服装も、髪型すら変わってしまったいなにやら力もみなぎっている。動揺するなというほうが無理だろう・・・。

しかし状況がそれを許さなかった。

スコ「・・・貴様らがプリキュアとはな・・・回収できるジュエルが増えた。」

写真を切り抜いて顔に貼っているだけなのではというほど全く動かなかった表情が少しだけ変わり

おそらく誰にも解からない程度だったが、その顔は若干の愉悦が混じっていたように見えた。

スコ「事情が変わったな。一撃で終わらせてもらっ。」

そういうとスコルプは腰を落とし手を後ろで構え気を溜め始めた。かめ。め波というよりはギャ。ツク砲のような構えといえは解かりやすいだろうか。

徐々に空気が重みを増し、大地が小さく震え始める。

花「ちょ・・ちよつとまずくない？」

舞「でも先輩達も校舎もあるし・・。」

花「こうなったら目には目を！舞っ！」

舞「ええっ！？は・・歯には歯を！！」

花「あ！なんか来た！行けるかも。」

舞「ホントだ・・もうこうなったら行くよ、咲い！」

2人は手を繋ぎながら静かに目をつむる・・。そして開いているほうの手をゆっくりと前に出した。

花「大地の精霊よ・・。」

鳥「大空の精霊よ・・・」

言葉に呼応し、精霊達が集まってくる・・・。

鳥「今！プリキュアと共に！！」

花「奇跡の力を解き放て！！」

「プリキュア！ツインストリーム・・・スプラアアシュー！！」

スコ「これで終わりだ。消えうせろ！プリキュア！」

ブルームとイーグレットが思い切り突き出した手から黄色と青色の精霊の力が放たれる。

と同時にスコルプの手からも赤黒い光が放出される。

互いの力がぶつかり合う！！はずの場所にそいつらは落ちてきた。

フリ「うばああああああ！！！！！！」

ぶつかり合った力は大きな衝撃波を伴い爆発し、霧散していった。

花「な・・・なに!？」

鳥「叫び声が聞こえたけど・・・。」

巻き上がった土ぼこりが晴れていくとさきほどまでいた男はすでにいなくなっており、別の男と少女が横たわっていた。

花「さっきの男は・・・逃げたのかな・・・？」

鳥「それよりあの人たちは・・・上から落ちてきたみたいだけど・・・っ!？」

イーグレットが後ろを見上げていると後ろから赤いエネルギー弾がいくつも飛んできた。
威嚇射撃のように二人の手前で着弾し先ほど落ち着いた土ぼこりをまた巻き上げる。

その土ぼこりを手で払い周りを見渡した時には、今だ倒れているなぎさ、ほのかと謎の少女以外は誰もいなくなっていた。

花「一体なんなの??」

鳥「さあ・・・。とりあえず先輩達と・・・その子を安全な場所へ連れてかないと・・・。」

沈み始めた夕日に照らされながら3人もどうやって運ぶんだろう・・・と咲も舞もしばし呆然と立ち尽くしていた。

—そろそろほのぼのした話がしたい・・・—

第8話 【決意】

小さく身じろぐと体中に痛みが走った。

フリ「つつ・・・ふいゝ・・・HARMか？ここは・・・」

体を起こしてみるとすぐにここが我が城HARMだと解かった。
時計を見ると19時になりかかっていた。

体内時計的におそらく1時間も寝ちゃいなかっただろう
目線を下に向けると妹分である満、薫が土下座をしていたことに気付く。

フリ「2人が運んでくれたのか・・・助かったよ。とりあえず顔を上げろっていうか立て。」

言葉は荒っぽいが自分の中ではきわめて優しく声をかけると満も薫もおおずと顔色を伺うように顔を上げゆっくり立ち上がった。
2人は俯きながらもこちらを上目遣いで見つめている。

フリ「お前らがそんな顔してるってことはなんかやらかしたんだろ？言ってみろよ・・・多分大したことないことだろ。」

窓ガラスが割れようが盗んだバイクで走り出されようが全く関心を表さない2人が、こんな風にしおらしくしている時は大体オレの物を壊したり無くしたりまたはオレを困らせることをした時だけだ。
とはいっても頼んだコーヒーを零したり、朝食のパンを焦がしてしまったり、洗濯物を失敗してしまったりとしょうもないことばかりである。

琵琶湖より大きいオレの心はそんなつまらないことで怒ったりなんだのはしない。

と、その度に言っているのだが未だにその落ち込み癖？は直らない。聞けばオレがどう思うかどうかではないらしい。

全く理解できないがいわゆる1つの乙女心ってやつだと思って特に気にしないようにしている。

満「兄様が落ちてきたのが見えたので・・・」

薫「兄様が営んでいると聞いた喫茶店まで運んだのですが・・・」

満「裏口が施錠されていたので」

薫「扉を破壊し中に入りました・・・。」

そついい終わると2人は深く、深く頭を下げた。

ベットから起き上がり私室の扉から出てみると粉々になったと扉の木片がちりとりとほうきで片付けられている途中だった。

おそらくオレを寝かせてから掃除をして、その途中でオレが起きたから中断したんだろう。

部屋に戻ってベットの上にあぐらを掻いて座り2人に向き直る。

フリ「扉ぐらいだったら多分学院のほうで修理を頼めるはずだと思うし別にいいよ。」

満「それでも兄様の物を壊したことに変わりありません。」

薫「どうかわたし達に・・・」

「「相応のお仕置きをしてください・・・」」

そう言いながらゆっくりと後ろを向き、前かがみになるとハルム学院のスカートをめくり上げ、淡い赤と青の下着に包まれた小ぶりのお尻を露にさせた。

フリ「何かあるたびにそうやってオレを変態プレイに巻き込むのをやめろ・・・」

椅子を探せば「兄様、わたしの上にお座りください」と四つんばいになったり、泥で靴が汚れば「兄様、わたしが今舐めて綺麗にいたします。」と跪いたり。

雌奴隷全開Mッ気で尽くしてこようとする。

初めのうちはどうしてもということに触れる程度に腰を乗っけたり、靴の掃除をお願いしたりしていたが、徐々にお仕置きでもなんでもないのに蹴ってくださいだとか、わたし達がト。。の代わりになりますのでいつでもお申し付けくださいとか本やテレビの中だけで楽しむべき性癖になりつつあったのでなんとかそうならないようあしらっている。

決して何かに目覚めてしまいそうだからではない。・・・決して。

フリ「そんなことしてる暇あったら店片付けるぞ。・・・それと・・・その制服、似合ってるよ。」

「「はいっ!」」

さっきまでの泣き出しそうな顔はどこへやら。我先にとほうきを手に取りメイド張り全開Mツ気で掃除に取り掛かっている。すぐ落ち込むしすぐ立ち直る。その要因がオレだってんならいい方向に働きかけてあげる、それが兄貴分の仕事ってやつだ。

きびきびと働く2人を見ながら、引越し祝いに今日はご馳走でも作ってやるかな、とそう思った。

ばらばらの扉の破片が袋にいれられ纏められている時、ハルム学院の保健室で目を覚ました少女達がいた。

なぎさ「うつ・・いたたた・・ほのか？」

ほのか「ん・・なぎさ？ここ・・保健室？」

なぎさが先に目を覚まし体を起こすとそれにつられほのかも起きだした。

消毒液のにおいが少し染み付いたベットからここが保健室だとわかった。

咲「あつ先輩気付きましたか。」

舞「お体のほうは大丈夫ですか？」

その様子に気付いた咲と舞が椅子から立ち上がり声をかけてくる。しかしその顔はどこか暗いように感じとれた。

なぎさ「2人が看病してくれたんだ・・ありがとう。」

ほのか「2人ともありがとう・・・。」

感謝の言葉を述べるが空気はより重たくなってく。

数秒の沈黙が場を流れた時、耐え切れなくなった咲が重々しく口を開いた。

咲「あの・・・先輩達も・・・プリキュア・・・ってやつなんですか・・・？」

その一言に3人が息を呑んだ。

恐らくこの場の誰もが同じことを考えていたのだろう、咲が言わずとも誰かが言い出したに違いない。

なぎさ「うん・・・1ヶ月前くらいから・・・かな。」

ほのか「”も”ってことはやっぱり2人も・・・？」

舞「はい、咲もわたしもちよつと前に綺麗な石を手に入れて・・・。」

咲「それで今日いきなり変身しちゃって・・・。」

ぽつぽつと重たい空気を払うように話していく4人。

正体がばれてしまったことによる動揺と訳も変わらず変身してしまいくわからないうちに変な男と戦わされてしまった動揺。

まだ中学生である彼女達には突拍子もない現実に関が若干着いてきていなかった。

ほのか「えっと・・・わたし達も1ヶ月前くらいに石を拾ったの、なぎさは部活中で私は下校中に。それからすぐに暗黒界と名乗る人た

ちがその石を奪いに来たの。」

なぎさ「そう、ちょうど今日みたいな感じにね、その時にあたし達もプリキュアに変身したの。訳もわからないまま戦ってなんとか追いついたんだけど、その時に声が聞こえてね。」

咲「声・・・」

舞「ですか？」

比較的冷静な部分がまだあったほのかとなぎさが停滞した話を進めるように話していく。

それは咲と舞も知りたかった部分の話でありこれから自分達の動向を決めていくのにも必要なものであった。

ほのか「うん・・・女の人の声なのかしら、その石はキュアジュエルといってそれを狙うものたちに奪われると精霊界が闇に染まり、虹の郷すらもその支配に置かれてしまうって・・・」

なぎさ「虹の郷っていうのがあたし達の世界？らしいんだけど・・・だからこの世界を守るためにあたし達は戦ってるの。」

咲「そうだったんですか・・・」

舞「じゃあ私達も・・・」

同じ力を得たのなら自分達も戦わなくてはいけない、尊敬する先輩達が世界のために戦っているのだ、その力になれるのであればなつてあげたい。

しかしその先輩達が成すべくも無く吹き飛ばされた光景が頭をよぎる。

危なくないはずが無い、世界を支配しようとする人たちだ、怪我はするに決まってる。下手をすれば命を落とすかもしれない。

そう考えるにいたるのは決して弱気ではなく当たり前のことであつた。

咲も舞も先ほどよりも落ち込み俯いてしまっている。

ほのか「確かに2人はプリキュアの力を手に入れてしまったかもしれない」

なぎさ「でもだからって無理に戦うことなんてないよ？今までだってあたし達でなんとかなつてたんだし！」

2人が落ち込む気持ちは痛いほどわかる。なぜなら自分達もそうであつたからだ。

何故自分達が？大人がやればいいことではないのか？死ぬかもしれない。小さな怪我は何度もしてる。

敵はこつちの都合なんてわかつてはくれない。部活中、下校中、授業中。いつだって襲いに来た。

そのたびにあたし達は戦つた。友達に先生に家族に迷惑がかかるから、危ない目にあわせるわけにはいかなかったから。

どっかで無理をしてたんだ。元々ただの中学生が世界を相手に戦えるわけがない。

暗黒界との戦いが続いたある日、なぎさとほのかはHARMの片隅で有里の煎れたコーヒーに手もつけず会話もせずただじつと座っていた。

どうすればいいか解からない、誰にも相談できない、やめることも

できない。そんな現実には2人は悩んでいた。
どうしようもない現実に涙が溢れそうになる。

どれほどそうしていただろう。ふと気付く顔を上げるとそこにはケーキを持った有里が立っていた。
モンブランと苺のショートケーキを机に置き

有里「ずっとそうしてるけど、何か悩みでもあんのか？」

とそう言った。

2人は少し思い悩んだがプリキュアのことなど言えないことは濁して困っていること、誰にも相談できないこと、つらいことなどを話した。

言葉の中に嗚咽がまじり話終える頃にはすでに2人はボロ泣きになっていた。

そんな2人の頭に優しく手を置き、ゆっくりと撫で始めた。

有里「それでも辛くなったらうちへおいで。うまいコーヒーにおいしいケーキ、なんだって出してやる。頭も撫でてやるし抱きしめてもやろう。だからいつでも・・・休みにおいで。」

なんでもない言葉だった・・・。三文小説を開けば書いてあるかもしれない。

それでも・・・。たったそれだけの言葉で救われることもある。
2人はずっと肩の荷が降りた気がした。休んで良いよ・・・とただそう言われたかったただだったのだ。

その言葉になぎさもほのかも、恥も見聞もなく泣きじゃくってしまった。

それからはプリキュアと中学生の生活にも余裕が出来、疲れたときはHARMで有里相手に愚痴を言う。

そんな生活が楽しくとても充実していた。

だからこそ後輩の2人には自分で選んで欲しい。

どっちを選んだって辛いことも楽しいこともある、でもそれが自分で選んだものでなかったのならただ辛いことばかりが積もっていくことになる。

ただ本音を言えば・・・後輩2人にも手伝って欲しいというものが先輩2人の正直な所であった。

そんな先輩2人の話を聞いて2人はしばし悩んだ後顔を見合わせ覚悟を決めた。

「先輩！私達もこの世界を守ります！！」

なぎさ「そ・・・それはうれしいけど・・・」

ほのか「本当にいいの・・・？」

咲「あたし達が戦うことが。世界のため、先輩達のためになるのなら。」

舞「私達に出来ることがしたいから。」

咲と舞は立ち上がりその思いを口にした。

その思いは覚悟となってなぎさとほのかの心に強く打ちつけられた。

なぎさ「うん、わかった。これから4人で頑張っていこう!」

ほのか「力を合わせて頑張っていきましょうね!」

「はい!」

なぎさ「それじゃまずは・・・」

ほのか「その子をなんとかしなきゃね・・・」

保健室にはベットが3つあり扉に近いベットには紫色の髪をした少女が今も眠っているのだった・・・。

— 誰かのためになら戦える、人はそういう弱くてかつこい生き物 —

第8話 【決意】（後書き）

親知らずの抜歯のため入院していました。

修正↓冥夢を闇夢^{めいむ}に

1話の時点でどうしようかなあと思っていましたけど今になってやはり変更することに・・・。

ご理解のほどよろしくお願いします。

第9話 【やっかい】（前書き）

基本的に1週間更新となりそうです。

第9話 【やっかい】

扉の破片も片付けられ、簞・雑巾もかけられむしろより綺麗になった喫茶HARMでは有里が料理にいそしんでいた。

満・薫の2人はせわしなく動き回る有里をカウンターの席に座りながら惚けたように眺めていた。

2人にとって有里の料理姿は、「兄様胸キュンランキングBEST 5」に入る姿でありカメラを持っていようものなら喫茶HARMはさながら記者会見の会場のようにならなう。フラッシュが焚かれていただろう。せつかく虹の郷に来れたんだからまずはデジカメを購入しなくてはと考えながら片隅では別の事を思っていた・・・。

聞けば兄様は妖精界に行っていたという。アクレアタム様に命令されたらしい。

兄様は暗黒界の中で唯一妖精界に行けるといつていた。実際に行つたのは数えるほどらしいし特に行きたいところでも無かつたらしい。

しかしアクレアタム様にとってはこれは重要な問題になる。

妖精界にある10個のキュアジュエルを手に入れることこそがアクレアタム様の野望に繋がるから。

キュアジュエルとは妖精界に伝わる伝承の一つで、元々キュアジュエルは一振りの剣にはめられていた。

暗黒軍と妖精界の戦争が起こったとき暗黒軍を追い払い暗黒界の侵入を二度とさせぬよう封印をほどこした。

その世界の狭間には今もその剣が刺さっている。今では聖地として崇められ社も建てられているらしい。

と兄様から聞いた。

その封印は強くどうやっても侵入できなくなった暗黒軍はしばしの沈黙を保っていたが、アクレアタム様が王につくや否や虹の郷への進軍を命じた。

虹の郷は妖精界と繋がりがありそこを辿り妖精界へと攻め入るつもりなのだ。

それと同時に妖精界はキュアジュエルを少女達に託した。それがプリキュアとなるらしい。

奪われたらまずいキュアジュエルをそんな簡単に人に渡してもいいのか？と疑問に思ったけどジュエルは剣と1つになってはじめて完成するらしい。

アクレアタム様はその完成した剣こそが目的であり最悪剣さえ奪われなければいいだろうというのが妖精界の考えなのだろうか。私にはわからない。

そんなことより大事なものは、今日の前で完成に近づいているふわふわオムライスにケチャップで何を書くか。ただそれだけだった。

有里「はい！、オムライス2人前いっちょあがり！期待を裏切りデミグラスソースだざまあみろ！」

料理をしている時は若干テンションがおかしくなる、そんな兄様もまた素敵です。

私も薫もなかなか空腹だったのでいただきますの挨拶もそこそこにオムライスへと手をつけ・・・

ドンッ！！

なぎさ「有里さん！たのもーっ！」

られたら良かったのに。

ほのか「こんな時間にごめんなさい・・・。」

勢いよく扉を開け元気な笑顔で入ってきたなぎさの後からほのかが申し訳なさそうに入ってくる。

咲「有里さん帰ってきてたんだーって満！薫！？」

舞「こんばんはあ・・・って2人とも、てっきり帰ったとおもった
らここにいたの？」

さらにその後ろから咲と舞が入ってくる。満と薫の姿を見つけると
トコトコと近づいていった。

咲「ああ！？HARM特製ふわふわオムライスだ！いゝなあゝいゝ
なあゝ」

舞「もう夕食の時間だもん・・・って咲い、ちよつと失礼よ。」

時刻は7時を回っておりただでさえ一仕事してきた後なのだ、育ち
盛りの咲はその匂いにつられ満のオムライスに顔を近づけ、嗅覚で
味わっていた。

有里「お前らまだ学校にいたのかよ。夕飯食ってく？今ならすぐ作
れちゃうけど。」

「『『『お願いします!!』』』」

元気な返事の4重奏に苦笑しながらも有里はオムライス作りを始めた。

待つてたら冷めちゃうし先に食べて。というほか、舞の気配りコンビの言葉で満・薫は先に食べ始めていた。その顔は無表情に見えるながら至福に包まれていたのは言うまでもない。

4人がカウンターの席に座ろうとしたときに

なぎさ「あーそうだった。ここに来た本当の目的忘れてたよ。」

ほか「外で待たせつきり・・咲さん、舞さん呼んできてくれるかしら？」

満と薫にHARMの良い所悪い所を話していた咲と舞は「はい。」と良い返事をしてってってと扉のほうへ駆けていく。

有里「何々？誰かほかにもいんの？」

チキンライスを炒めながら目線だけを向け話しかけた。

ほか「有里さんをお願いしたいことがあるんです。」

なぎさ「あたし達も困ってて・・・あああとオムライスもう1人前追加ね。」

有里「それは別にいいけど・・連帯保証人にはならんぞ。臓器もやらんぞ。」

なぎさ「なにその生々しい発想・・・」

ほのか「そうじゃなくてちょっと会ってほしい子がいるの・・・」

有里「お見合いならしないって言ったじゃないか母さん！」

なぎさ「誰が母さんか！またそうやってすぐふざける。」

カランカランと入り口の扉につけられている鈴が音を鳴らし咲、舞と1人の少女が入ってくる。

咲「ゆつりさん、この子この子。」

舞「くるみさんこつちへどうぞ。」

くるみ「えっと・・・美々野みみのくるみの申します・・・始めまして・・・
・ですよね？どこかでお会いしましたか？」

有里「！？・・・いやえっと・・・はじめまして・・・のはずだけど・・・
・どうも朔路有里です・・・喫茶店やってます・・・」

有里（おいこれ絶対オレと一緒に落ちてきた子だろ！？どうしよう？）

満：

薫：

チラ見からの無視か・・・オレが他の女性と喋ってるのがそんなに気に喰わないかね。

美々野くるみと名乗った少女は明らかに精霊界で襲い掛かってきた少女だ。髪型は1つ結いになってるけど間違いない。

あまりにもびっくりしてあからさまに動揺してしまった。向こうも若干疑い気味だし、ここはキャラを変えていくか。

有里「いやぁ可愛い子だねーばく特製オムライスをせいさくちゅうだよー！食べていってねー」

咲「有里さんどうしたんですか？またおかしくなった？」

舞「ちゃんとしてくださいよ。」

なぎさ「そудだよ！この子困ってるんだって。」

ほのか「力になってあげてほしいんです！」

駄目か・・・なんか普通に流されてるし、猫を被ったつもりが頭がおかしい人扱いか・・・満も薫も我関せず状態だし・・・とりあえずは様子を見るか。

有里「んで何を困ってるんだって？」

なぎさ「えつと校内で倒れてくるみちゃんを見つけて保健室へ運んだんだけど。」

ほのか「記憶喪失みたいなんです。名前は覚えてるみたいなんですけど・・・。」

咲「どっから来たとかなんでここに居るかとかは解からないんだって」

舞「でも警察のお世話になるのは嫌だっていうし、こんな時間で先生達も不在で・・・」

いやな予感がする・・・これはきつとろくでも無い話だ。

有里「つまり？」

なぎさ「くるみちゃんを泊めてほしいの！」

有里「バカいうな、部屋はあるにはあるが常識てきかんが」

ほのか「お願いします！」

咲「記憶喪失の女の子をそのへんに放っておくっていうの？有里さんはそんな人じゃないよね！」

舞「有里さんしか頼めるかたがいないんです！お願いします！」

4人は身を乗り出して訴えかけるような目でこちらを見ている。確かにここで断れば不親切な人ってことになるだろう。

でもホントにこのくるみと名乗った子は記憶喪失なのか？いやおそらく違うだろう。虹の郷のことを何も知らないっただけだ。

記憶喪失つてのもとつさのごまかしだな。まあまだこっちの正体もばれてなさそうだし。

有里「しょうがないな、開いてる部屋があるからそこ貸してやるよ。」

そついい終わりため息をつきながらカウンターに人数分のオムライ

スを並べていった。

なぎさ「やった！さすが有里さん頼りになるう」

ほのか「ありがとうございます有里さん」

咲「困った時の有里さんだね。」

舞「その代わりに私達もできることは手伝いますんで何でも言ってくださいね。」

くるみ「あ・・あの・・よろしく願いします。」

こうしてオレとくるみとの奇妙な同居生活がはじま

有里「ウチじゃなくても満と薫の部屋に住めばいいんじゃないか？」

満「・・・・・・・・。」

薫「・・・・・・・・。」

すぐく睨めました。スプーンを一定のリズムでカンカンカンと鳴らしている。

無言の圧力。その1つのカンという音に込められた意味を噛み締めているうちに胃がもたれたような錯覚におちいる。

なにやら奇妙な同棲生活が始まりそうだ。

明日はこの少女に皿洗いや掃除をやってもらおうか。

オムライスをおいしそうに頬張る少女たちを見ながら苦笑と共にた

め息を吐きポケットに手を突っ込んだ。

—そこには、あるはずのものが無い—

第10話 【甘えん坊と策士】（前書き）

文章量を少なくして更新頻度をあげる作戦。

第10話 【甘えん坊と策士】

昨夜の一騒動が落ち着きをみせ少女達は自宅へと帰り、ある無表情な義妹はオレの足を踏んでから帰っていった。

色々あつて疲れていたこともあり少女が使う部屋の掃除は明日に保留することにし、その少女には自分が普段使っているベットをあてがいオレは店内のソファに横になった。

ソファはいいものを使っているが元々の用途は座るものであり、横になればベットとの差異に気付くだろう。

とはいえ違う世界にお邪魔したり窃盗したり逃走したり落下したり料理したりと、日記に書けば3日分は埋められてしまいそうな体験をした後だ。

羊を数えるために頭の中に牧場を想像した時には、すでに眠りについていた。

カーテンの隙間から朝日が差し込んでくる。鳥達が縄張り争いのためにチュンチュンと可愛らしい雄叫びを上げている頃。

ドコオツツツツ！

喫茶店HARMからは変わった目覚ましの音が鈍く鳴り響いた。

有里「いったあつ！なんだ！？内臓痛え！五臓六腑が悲鳴をあげてる清々しい朝にオレおはよう！っておいこのクソあま！」

くるみ「掃除の邪魔よ、起きるか死ぬかさつさとしてちょうだい。」

この開口一番おはようございますの前にオレの臓物に右肘を落としてきた女こそ、美々野くるみ。自称記憶喪失。今日からHARMでのバイトをすることになっており、今は”何故か”うちに置いてあったハルム学院の制服を着てその上にエプロンをまとっている。

これだけならはいわゆる1つの萌え要素と言えなくも無かったが、少女の慥然とした表情が全てを台無しにしていた。そもそも店主の腹に右ひじを決める住み込みのバイトがいるだろうか。

やりきれない思いと癒えない痛みを引きずりながらのそりと立ち上がる。

すでに少女の姿は無い。さきほど起こしに来た時に片手に箒を持っていたし外を掃きにでも行ったんだろう。

何気に居候という認識はあるらしい。

時刻は6時30分を回ったところだが、店内の床や机が綺麗になつてゐるし早く起きて掃除をしていてくれたんだろう。

洗面台へ行きさっぱりしたところで昼の仕込みを終わらせる。手馴れているだけに1時間もせずに関わった。

朝食の支度を始めた頃にくるみが戻ってきた。

そつえばあいつらに頼まれた勢いで住み込ませたけどこの子とは全然話してなかったな。

有里「朝食はパンとご飯どっちがいい？」

くるみ「パンに決まってるわ。当たり前のを聞かないで。」

言い終わった後に舌打ちを決め込んだ彼女の的には朝食はパンに決まっているらしい。

癪に障ったが唯々諾々とパンをトースターで焼き目玉焼き・サラダを用意しコップにオレンジジュースを注いだ。

それをトレイに乗せ2人分をまったく手伝う気配も無く2人席に座っていたくるみの前に置きその向かいに座る。

有里「終始座りっぱなしか、でも掃除はありがとな助かったよ。それじゃ、いただきます。」

くるみ「居候のただ飯食らいにはならないわ。それよりこれはなに？」

と、俺が持ってきた醤油とソースを指差しいきりたつくるみ。

有里「なんだよ、別に醤油派ソース派の論争でも繰り広げようってのか。ちなみにオレはご飯の時は醤油、パンのときはソースの臨機応変型だ。」

節操がないだの八方美人だの中途半端だの言われるがオレはこのスタイルを貫く。

くるみ「目玉焼きには一つまみの塩に決まってるわ！それを醤油やソースだなんて味の濃い調味料で卵本来の風味を殺してしまうなど言語道断！そもそも昨今の半熟ブームがわたしは許せない！そんなものはまともな目玉焼きも作れない凡愚たちの言い訳にすぎないわ！白身のみ火を通すか、黄身まで完璧に火を通すかその両端でし

か目玉焼きの良さは引き出すことは出来ない！」

いかん、地雷地帯でタップダンスを踊ってしまったようだ。確かに目玉焼きには砂糖、塩、塩コショウ、七味、醤油、ソース、マヨネーズ、ケチャップなど多種多様な調味料が用いられる。さらに醤油マヨネーズや塩砂糖などのあわせ技によりその派閥は多岐にわたって存在してしまっている。

亜流として何もかけない派、焼かない派、殻ごと派、茹でる派、などもあることをここに明記しておく。

さらにここからおかず派、ON THE ライス派、パンにはさむ派、パスタ派、などがある。

ハンバーグの上に乗せたりロコモコなどがあるがこれらは目玉焼きが脇役となってしまうことから目玉焼きでなく卵を焼いたなにかではない。

目玉焼きとは朝食のみで用いられるメインディッシュなのだ。

また目玉焼きに相反するものとしてよく挙げられるのが”たまごかけご飯”である。

これはおかずではなく丼ものとして完璧に昇華された料理である、というのがたまごかけごはん派の言い分であるが、白米組合からの”お米の風味を味わうことが出来ない。ご飯を軽んじた行為である。”と疑問視される声もあがっている。

これ以上は長くなってしまうので割愛させていただこう。米派、パン派、パスタ派、の炭水化物論争に関してはまたの次回にとっておこう。

有里「主食がパンにならソースだろ！トマトと卵の相性の良さからケチャップというのも否めないがな。まあ食いたいように食べばい

いんだけどね。それが一番うまいに決まってるんだから。」

台所から塩をもってきてやって机においてやった。

くるみ「なかなか解かつてるじゃない……。」

どうにも釈然としないような様子で塩を手に取り目玉焼きにほんの少し振りかけていた。

その浮ついたままの空気のまま朝食は過ぎていった。

お前こそなかなか面白い子じゃなか……だなんて思ったり。

精霊界って食文化が虹の郷といっしょなのか？

朝食が終わりくるみが少し恥ずかしそうに「後片付けぐらい私がやるわよ。」だなんて言うもんだから後をまかせ、野暮用を先にすませることにした。

新メニューを増やすために学院の図書館から料理本を何冊か借りてあり、今日がその返却日だったのだ。

すぐ帰るからあと頼むね。とくるみに一声掛けてから外へとでる。

5月の生暖かい風がお出迎えしてくれた。

キィ……と小さな音を立てる扉を開けて図書館の中へと入った。

土曜日の午前中ともなれば利用者は少なく、人がいればいい方だというほどに粛清としていた。

図書館の中心にある受付へと歩み寄ると2人の少女の姿に気付いた。

「あつ有里さん、こんにちは。」

「有里じゃない、どうしたの？こんな朝から。」

受付に座っている少女と受付机をはさんでその向かいに立っていた少女から声をかけられる。

受付に座っている子が秋元こまち。ハルム学院3年生であり、図書委員をしており図書館で受付係をしたり本を読んでいることが多い。髪は緑色でショートボブみたいな髪型だが襟足を伸ばしている。実家が和菓子屋をやっておりHARMでもお世話になることがある。

そしてもう1人の少女が水無月かれん。同じく3年生でありこまちとは唯一無二の親友だ。

ハルム学院では生徒会長を務めており、容姿端麗、品行方正、頭脳明晰でキリツとしたその態度から下級生から憧れの的になっているがオレは断じてそんなことはないと思う。髪は腰まで届くようなロングで青色をしている。

大富豪の娘で実家は豪邸のお屋敷に住んでいる。うらねたましい。

有里「この前借りた本を返しにきたんだ。」

こまち「料理の本ですよ。参考にはなりました？」

有里「オレはいいなあって思ったんだけどね、お客さんに聞いたら喫茶店に中華はおかしいだらって怒られた。」

かれん「おかしいに決まってるじゃない。ホントに有里はバカね、

呆れるわ。」

確かに雰囲気的におかしいかな？とは思ったがすでに和菓子にコーヒーマイミューも存在してしまっているしいつそ和洋中すべて取り揃えたら面白いんじゃないかっていう発想だけでやってみた。これ以上無いと言うほどかれんが呆れている。バカはないだろバカは。バカだけど。

こまち「かれん言いすぎよ？喫茶店でもおいしい中華が食べられるなんて素敵じゃない？」

見かねたこまちがフォローしてくれるが、正直な所こまちの料理センスは少し変わっているので同意されたということはつまりそういうことだったのだろう。

しかし決して口には出さない。空気は吸って吐くだけでなく読むものだからだ。

有里「でも料理のレパートリーは増えたよ。メニューのほうはとりあえず保留かな。次は新しいデザートに挑戦したいんだけど・・・」

「

こまち「それならいい本を知ってるの、この本を本棚に返すついでに取ってくるわ。」

そついい受付席から立ち上がった。

有里「いやいや悪いって・・・今日は本返しにきただけだからさ。」

こまち「そんな気にしないで。すぐ取ってくるから、それまでかれんの相手をしていてくださいね。」

そっぴい本の森の中へと消えてしまった。

人が少ないからって受付を空けちゃってもいいんだろつか・・・。

かれん「ちよつとこまち!!・・・。」

しばしの静寂が場を支配している。

かれん「あ・・・あの!」

その支配を振り払ったのは先ほどから落ち着きの無いようにもじもじしていたかれんの方からだった。

かれん「有里・・・さん。その・・・ふたりつきり・・・ね。」

正直来るなと思ってました。

かれん「さつきはバカだなんて言つて・・・ごめんなさい。その・・・会えるだなんて思つてなくて・・・動転して・・・。」

有里「怒つてないよ、別にね。」

その言葉に花を咲かせたような笑顔になり近寄ってくる。

つまりはこのかれんという少女、人がいる時は生徒会長らしく振舞うがオレと2人きりになると子どものように甘えん坊になるのだ。

かれん「ホント・・・?じゃあ・・・頭撫でて・・・?」

言われた通り頭を撫でて髪を梳いてあげると蕩けたような表情になり体ごと擦り寄ってきた。

かれん「ぎゅゝってして?・・・しなさい。」

有里「人が居ないわけじゃないんだぞ? まあ命令じゃ仕方ないけどな・・・。」

そつと後ろに手を回し優しく、壊れないように抱きしめてあげる。はあゝと熱の籠もったため息がかれんの口からこぼれた。かれんの方からも手を回され強く引き寄せるように抱きしめられる。胸に顔をうずめ何かを染み込ませるかのように擦り付けている。

中学生というには少し発達が進んでいるかれんに体を密着され危うく男が全開になりそうになったが、これはあくまで兄妹的スキンシップであり反応したが最後変態になりさがってしまう。

奥歯を噛み締め本能に抗っているとかれんがススツと離れた。それからすぐにこまちが数冊の本をもって帰ってきた。

こまち「色んな国のデザートの本を持ってきたわ。ちゃんと和菓子の本もあるから。」

有里「ん、ありがとなわざわざ。新メニューの試食会には招待させてもらうよ。」

かれん「そろそろ生徒会の集まりがあるから私は行くわね。こまち、昼はHARMで取りましょう。」

こまち「ええわかったわ。昼ごろに校門で待ち合わせにしましょう。」

有里「それじゃあ昼は腕をふるわないとな。いつてらっしゃい。」

それじゃあ行ってくるわ。と、長髪をなびかせ威風堂々と図書館から出ていった。

全く人の目があると勇ましいことこの上ないな。

こまち「かれんと何を話してたんですか？」

有里「たいした話じゃなよ。ただの世間話かな。」

こまち「また抱きしめたり頭を撫でたりしていたんでしょう？」

小説家志望ゆえの洞察力なのか、親友ゆえの理解力だろうか。

かれんの甘えん坊はこまちにはバレバレである。もつともかれんは上手に隠せていると思っているようだが……。

有里「えっと……まあ……どうかな？」

こまち「ふふつ、もちろん私にもしてくれんですよね？」

自分がない間にかれんがいちゃいちゃしようとするのも、オレがデザートの本を持ってきてもらったことに小さな恩を感じていることも全て計算なのかもしれないと思うと、目の前でいまも微笑んでいる少女がとてつもない悪女にすら見えてくることがある。

すでに手を広げ待ち構えているこの少女にため息をつきつつ、女の子ってのは恐ろしいなあとかめがみあたりに鈍痛を感じていた。

ちよつとした用事のもりが大分長い用事になってしまった。

早く帰って昼食の支度をしなくちゃな。くるみにウェイトレスでも

やってもらったなんてそんな事を考えながら図書館から遠くは無い
喫茶店HARMまでの道のりをのんびりと歩いていた。

——1人留守番されていた少女のストレスのことなど知らずに——

第11話 【不安】（前書き）

全話のかれんに全力を出しすぎて適当になってしまった。

第11話 【不安】

図書館からHARMへと徒歩で帰り扉を開けた途端、オレを出迎えたのは腰の入ったローキックだった。

思わずその場にうずくまり同居人兼犯人をにらみつけようとしたその眼前に迫っているのは目潰しの指だった。

両眼球に熱のような痛みが走り玄関でのたうちまわる。

1度にじみ出た涙は後から後へと続き目じりを濡らす。

有里「てめえふつざけんなよ！訳分からんわ！」

くるみ「あ、この机まだ汚れてたわ。」

有里「あれ？この距離なのに聞こえてなかった？ごめんじゃあもいっかい言うわ。てめえふつざけんなよ！！」

くるみ「うるさい！」

ズグツ！と鈍い音を立て再び行われるローキックという名の簡易処刑が執り行われた。

再びうずくまる。気が済んだのだろうか、くるみは店の奥に消えていった。

怒りと痛みが治まりかけ冷めてきた頭で考える。

子どもが親を蹴ったり物にあたったりするのは”試し行動”と呼ばれる親の愛を確認するための行動だ。

自分に興味を持ってほしい構ってほしい、寂しさの裏返しだろう。

ひよっとしたらこの少女も寂しかった、不安だったのではないだろうか。

いきなり知らない世界に来てしまつて頼る人がいるはずもない。たまたま宛がわれた部屋で1人眠る夜がどれほどの恐怖なのか、誰かに理解できるはずがない。

まだ10代の少女なのだ。その不安に押しつぶされないためハリネズミのように触るものを傷つけるようになってしまふのは仕方の無いことなのかもしれない。

そう思えばまだじくじくと痛みを残すわき腹も子犬にじゃれつかれただけだと微笑ましく思える。

くるみ「まだ寝てたんですか？邪魔なんで外にいつてくれますか？」

そう言い顔を踏まれながら悪態をつかれると

こいつは単純にオレが嫌いなだけなんだなあ、いつか痛い目見せてやるこの糞アマが・・・だなんて考えてしまふのも仕方無いことなんだろうって思うんだ。

昼食時になると徐々に客が入ってくる。

外のテラス席にパラソルを差すようくるみに言つと特に反論もせず仕事にとりかかった。

なんだかんだで言われた仕事はするようでそこらへんはしっかりしているんだろう。背後にテキパキと擬音が浮かんでいるように見えるくらい手馴れていた。

HARMの敷地内にあるので一般客は少ないが部活中の生徒達が昼食をとりにくるので休日のほうが混み合う。

店内・店外からはキヤイキヤイと女の子達の会話が聞こえており、喫茶店というよりはファミレスのような雰囲気になっている。

普段は注文聞く↓料理作る↓料理はこぶ↓料理下げるを1人でやっていたので正直大変だったが、今日は愛想の悪いウエイトレスがいるのでそれでも大変なことに変わらないが料理を作るだけなのでいつもよりはよっぽど楽だった。

ピークを過ぎテラス席に空席が目立ち始めたころ

かれん「外の席でいい？こまち。」

こまち「そうね、今日は涼しいし外のほうが風が気持ちいいわ。」

生徒会と図書委員の仕事が終わったかれんとこまちが喫茶HARMにやってきた。

常連ということもあり外のテラス席へとすぐに腰を落ち着けた。

それに気付いたくるみが二人分の水を盆にのせトコトコと近寄っていった。

くるみ「いらっしやいませ、ご注文が決まりましたらお呼びください。」

テーブルに水を置くくるみ。

5月の爽やかな空気が、チリチリと音を立て熱を帯びた。

かれん「あなたはどなたかしら・・・どうしてHARMで働いているの？」

去ろうとするくるみにかれんがそう投げかけた。くるみは驚いたように立ち止まり振り返った。

こまちはしまったと思った。

親友は有里に依存的なまでに恋をしている。しかしそのプライドの高さから学校生活の中でそれを表面に出すことは無い。

だが今は生徒会の仕事も終わり完全にOFFである。わざわざ人が少なくなってからHARMに来たのも人がいなくなるまで長居し有里との時間を楽しむためだろう。

こまち自身も頃合をみて席をはずすつもりだった。

だからこそこれはまずい。前々からHARMで働きたいと零していたかれんだ。

そんな逢瀬を夢見て訪れたHARMで誰とも知らない女が働いていたとあればこの怒りようは当然かもしれない。

そして運も悪かった。

くるみ「私が誰だろうとあんたに関係ある？」

相手の少女も相当気性が荒いようだ。

よし、全て有里さんに押し付けよう。思い立った私はスツと席を立ち朴念仁を呼びに行った。

かれん「私は中等部の生徒会長なの。生徒の顔は全て覚えているわ。部外者がどうして校内にいるのか聞いているのよ。」

くるみ「あら、ちゃんと学院側には了承をとつてあるわ。生徒会長といえど一生徒でしかないあなたに許可をもらう必要がある？」

こまちに頼まれ店の外にでて理解し、そして後悔した。

くるみとかれんが対峙してくるみの手には掃除用の箒が、かれんの手には護身用か練習用か木刀が握られていた。

他の客は巻き添えはごめんだとばかりにすでに居なくなっている。当然勘定は机の上においてあった。

いつの間にか横にいたこまちが大変良い笑顔で親指を立てている。これは Good Luck なんかじゃない。さっさとしろという合図だ。

そうこうしている内に箒と木刀での殴りあいになっている。

かれんの剣術の腕はなかなかのものだがそれを的確に捌いているくるみも結構な武芸達者だ。

などと評論している場合じゃない。気付けば横にいるこまちの親指が下を向いていた。変わらず笑顔のまま。

知らん振りして逃げる道は無くなった。覚悟を決めゆっくりと二人に近づいていく。

イメージしろ！オレはア。タカだ！映画さながらに今も戦っているえ。しともの。姫を止めるのだ！

腕を取れ、足をかけろ、剣を奪え、箒をへし折れ！

今だ！！

タイミングをはかり走り出す！

そんなオレを待っていたのは、腹に突き刺さった簞の柄と首に叩き付けられた木刀だった。

とりあえず痛みが治まるまでわめき散らしのたうち回る。

気が済んだところで周りを見渡してみる。決して誰も様子を見に来てくれなくて寂しかった訳ではない。というか最近扱いがひどい。

こまちがくるみとかれんを正座させ何やら叱りつけている。

自体はある程度収集したらしく2人は大分シユンとしながらこま치의説教を聴いていた。

だったら初めからこまちがなんとかすればよかったじゃねえかと言えるわけもなく痛む箇所を撫でながら3人に近づいていった。

こまち「あ、大丈夫でしたか？ほら2人とも。」

かれん「申し訳ありません」

くるみ「すみませんでした。」

有里「なにこの棒読みの謝罪？」

こまちに促され2人がいちおう謝るが納得はできていない様子だ。

こまち「2人とも出来心だったみたいで・・・」

有里「出来心で内臓と首殴打されてたまるか。下手しなくても死んでるぞ。」

こまち「良かったわ、有里さんも許してくれるって。」

有里「おいこの距離で聞こえてねーわけねーだろ。何これ今日オレを無視する日？流行ってんの？」

もうこの人めんどくさくなってるよ。まともに入っちゃってるよ。なんかちよつとむつとするな。これは反撃するべき。

有里「怒ってないからいいんだけどね。その代わり頼みごとがあるんだけど。」

かれん「？」

くるみ「いやよ、めんどくさいわ」

有里「お前どんだけイライラしてんだよ。っていうかお前の用事だからな。お金はこっちで出すから今から街行つて必要なもの買つて来い。」

くるみ「それは嬉しいけど・・・わたしこの街のこと知らないわ。」

有里「そこでかれんとこまちに頼みごとなんだけど、くるみの買い物に付き合ってやってくれよ。もし断ったりなんかしたら悲しくて

体の一部が痛くなつてしまいそうだ。」

かれん「それじゃあ仕方ないわね。案内くらいしてあげるわ」

かれんは生徒会長モードの時はあくまで生徒会長だが基本的にオレの頼みごとは断らない。

ならなぜあんな嫌味な言い方をしたのか。それはたぬきさんへの当てつけである。

こまち（なんでわたしまで？）

有里（お前が押し付けたせいでオレが怪我したんだろうが）

こまち（女の人なんて雇った有里さんが悪いんじゃない。）

有里（あれだって押し付けられたようなもんなんだよ。それにあいつ記憶喪失らしいんだ。友達になってやってくれ）

こまち（そういうことなら仕方ないわね。）

小説家志望ゆえの観察力と感受性ゆえか知らないがこまちとは目だけで会話ができる。

こまち「わたしだってちょっと怒ってるのに・・・」

かれん「こまち何か言った？」

こまち「いいえ、なんでもないわ。そうと決まったら早速いきましょ。」

くるみ「え、ちょっといやよ。というかあんたは来ないの？」

有里「オレはちょっとやることあるからな」

こまち「ほらほら行きましょくるみさん。かれんそっち持つて。」

こまちとかれんに挟まれるように腕を持たれ引きずられながら3人は去っていった。

1日一緒に遊んでれば仲良くもなるだろ。あいつも同年代の友達くらい作らなきゃな。

3人を見送った後店の中に入りコーヒーをいれ店内奥のソファに座る。

とりあえず新聞を広げて読む。バカみたいに平和な世界のバカみたいな新聞を読んでバカみたいになうまいコーヒーを飲む。

今日は1日中だらだらしよう、むしろ昼寝でもしようか。暇なことがこんなに幸せなこととは。ひゃっほう！休みだ！

満「兄様」

薫「遊びに来ました。」

いつの間にか勝手に入ってきて、いつの間にかオレの横に座り、いつの間にかオレの腕を足で挟み抱きしめ、肩に顔を置いているこいつらをどうすればいいのか。

バカなオレには考え付きようがなかった。

そろそろ呼び出しがかかりそうだなあと考えながら徐々に荒くなり

始める妹分2人にため息をつき、最近ため息の回数が増えたことに
気付き、またため息を零すのだった。

―腐敗は静かに、ゆっくりと進む―

第12話 【呪い】

オレは夜の間にいた。

案の定呼び出され有無を言わず連れてこられた。

相変わらず世界中の黒い絵の具を塗りこんだように真っ黒なその部屋は何故かいつもよりも暗く、冷たく感じた。

いつもは豪華絢爛ながら黒を基調とした地味な椅子に座っているアクレアタムも真っ暗な闇に覆われていて姿は確認できない。

『お前に命ずる』

重く、深い言葉が走った。

夜の間にはオレとアクレアタム2人きりだ。いつもは後ろに控えているスコルプも、闇夢もいない。

その空間の重たさからオレもいつもの軽口を叩けずにいた。

こんな事は前にも1度だけあった。オレが目覚めた時だ。

．．．．．

．．．

深い．．深い海のなかにいた。空かもしれない。土かもしれない。火のなかなのかもしれない。

暖かい、冷たい、やわらかい、かたい感触が肌をなでているような

気がする。

ただひとつだけ解かるのが、オレはそんな中で浮かんでいたことだけだ。

ふいに言葉が聞こえた。それが言葉と認識することはできなかったが確かに聞いた。

震える唇で返事をした気がする・・・。

そして真っ黒い霧の蛇のようなものに包まれオレは引きずりだされた。

気付いた時、そこは真っ暗で大きな部屋だった。

周りを見渡すと一際暗い場所に気付く。黒い霧のようなものが、確かにオレを見ていた。

『服従しろ』

言葉がはしった。心臓が頭に引っ越してきたのかというくらい頭の中で鼓動の音が鳴り響く。

胸が熱くなる。体を抱きしめ歯を食いしばる。口からは意味を成さない嗚咽しか零れてこない。

何かに侵されている。血管を、骨を、肉を、魂を、じわじわと嬲るように色を変えていく。

「あああああああああああああ!!!!!!!!!!」

何故そうしたのかは解からない。ただオレは涙が溢れているその眼

で闇をにらみ、その部屋が震えるかのような声で叫んだ。

その瞬間に体が光を放った。視界が真っ白く染まっていき、オレは意識を手放した。

次に起きた時、オレは見たこともない部屋で寝ていた。

その日からオレはフリティラリアという名前をつけられた。

．．．．．

．．．．．

それがオレが今思い出せる最古の記憶だ。

全くその時と同じ状況だ。それを知ってる分なおさら心地は良くない。

『プリキュアを殺せ』

言葉が頭に浸み込んでいく。右手が痙攣しだすのを左手で必死に抑え込む。

胃液がさかのぼってくるのが解かる。それを必死で飲み込みオレは引きずるようにして夜の間にあとにした。

ひどく気分が悪い。頭はガンガンと痛みを発し四肢は鉛のように重い。

窓を覗いてみると朝の天気が嘘のように、雨が振っていた。

．．．．．。

．．．。

泉を通り虹の郷へと帰ってくる。

同じように天気は雨だった。

満と薫が遊びに来てすぐに呼び出しがかかった。付いていくといって聞かない2人を連れて暗黒界へと行ったが今は2人のことは忘れてしまっていた。

あれからあまり時間は経っていない。もう数刻すれば雨雲のうへは赤い空に覆われるだろう。

今も頭の中は『プリキュアを殺せ』と鳴り響いている。

その言葉が響くたびに意思が削られる。我を忘れる。

夢遊病者のような足取りのまま、ハルム学院の運動場へと歩いていった。

．．．．．。

．．．。

なぎさ「なんなの！？この感じ．．．」

ほのか「怖い．．今までとは違う．．．」

2人はほのか宅で遊んでいる最中だった。

学校や部活動での話などに花を咲かせているときにそれは起きた。いや来たというべきなのかもしれない。

2人は同時に息を呑んだ。

今までも敵がきたときはその気配というか嫌な感じが走りそれに気付くことができた。

その敵も”ウザイナー”と叫び楽勝とは言えないまでも2人でも追い払うことができる敵だった。

だがこれは違う。今までの敵の魔力が水風船ほどであったなら、これは50mプールほどの大きさかもしれない。

2人は顔を見合わせ1度力強くうなずくと駆け出していった。

校門前までくると向かい側から走ってくる人影が見えた。

咲と舞だった。

2人は咲の実家PANPAKパンでお店を手伝っていた。

よくお世話になっている舞がお手伝いをしたいと言い出したのだ。

そして2人も同じように邪悪な気配に気付き学院へと赴いたのだった。

4人は神妙な面持ちで学院内へと入っていった。

運動場の前まできて4人の足は止まった。

止まらざるをえなかったというのが正しいだろう。

いつもは体育の授業や部活で走り回っている見慣れた運動場はその様相を廃し、禍々しさを放っていた。

その中心部に1人の男が立っている。少女達は状況の異質さを察知し

「デュアルオーロラウェーブ!!」

「デュアルスピリチュアルパワー!!」

プリキュアへと変身を遂げた。

そしてその男へと近づいていく。生ぬるく気持ちの悪い空気が肌を撫で心を揺らす。

男は俯いた様子でたた立ち尽くしている。しかしその体からは蒸気のような黒い霧が吹き上がっていた。

黒「この人・・・前戦った人だ!」

白「本当だわ・・・でも前とはずいぶん雰囲気が違う・・・。」

なぎさとほのかが前に戦った男であることに気付き身構える。

花「強いんですか?」

黒「強い・・・前は全然適わなかった。」

鳥「そんな・・・」

白「大丈夫よ、今はキュアブルームもキュアイーグレットもいるから。負けるはずが無いわ。」

鳥「はいっ！」

花「そうですよね！」

フリ「オレは」

今まで呆然と立ち尽くしていた男が口を開いた。

ブルーム、イーグレットも腰を落とし構える。ブラック、ホワイトもこぶしを強く握り締めた。

「プリキュアを殺す」

俯いていた顔をあげ4人を睨んだ。

目が合った、ただそれだけだった。しかしその一瞬の時間で少女達の体を恐怖が支配した。

4人ともその恐怖から目を逸らし両腕で頭をガードした。体をすくめたといっていい。

それからすぐ前を見たが男の姿は無い。

見失った！？という動揺とともにブラックは気が付いた。

隣にいたホワイトが居なくなっている。

その時後ろを見たのは勘といっいい、驚愕と恐怖に支配されたブラックが見たものは、眼前へと迫る拳だった。

ドゴオッ!!

花「ブラック!!」

鳥「後ろ!?!」

重々しい打撃音のしたほうを見れば顔を思い切り殴られたブラックがきりもみ回転をしながら10数mほど吹き飛ばされていた。

イーグレットは咄嗟にまた構えることが出来たがブラックに視線を飛ばしてしまったブルームが視線を戻すには、その男にとって遅すぎる時間だった。

回し蹴りをくらいブラックと同じようにブルームは吹き飛ばされた。

鳥「てあっ!」

その隙をつき男の顔にとび蹴りをしかけたイーグレットだが、容易くその足をつかまれ勢いよく地面へと叩き付けられた。

鳥「かはっ……。」

肺の中の空気が押し出され口から吐き出された。痛みにも縮こまるその体に容赦ない蹴りがかけられイーグレットも3人の少女の下へと飛ばされていった。

そして男の突き出した右手から赤黒いエネルギー弾が放たれ、少女達の体は爆炎で見えなくなってしまった。

……。

・・・

少し時間はさかのぼる。

こまち「いきなり雨だなんて災難ね。」

かれん「天気予報では30%とっていたのだけれど・・・。」

くるみ「まあ降ってきたものはしょうがないわ。必要なものは買えたし充分よ。」

傘を差した3人が片手に荷物を持ったまま歩いていた。買い物を通して仲が良くなったのだろう、肩を並べ歩く姿からはそれが見て取れた。

買い物袋の中には歯ブラシやシャンプー、食器や服などが入っている。

ある程度必要なものが買い終わりぶらぶらとウィンドウショッピングがてら町を案内していると雲行きがあやしくなってきた。

かれんの提案から買い物を切り上げ帰路についてすぐに雨が降ってきた。

仕方なく近くのコンビニで傘を購入したのだった。

校門をくぐった所で運動場の方角から大きな音がした。

そこでやっとなるみはこの空気の異質差に気が付いたのである。

初めてできた友達と初めてみる町並みや品々に楽しくなってしまうここまで近づくまで気付かなかったのだ。

かれん「何の音かしら？」

こまち「雷の音には聞こえなかったけど・・・。」

くるみ「荷物をお願い。あんた達はあの喫茶店に荷物を置いたらすぐ帰りなさい！いいわね！」

そうまくしたて荷物を強引に押し付けると音のしたほうへと駆け出していった。

・・・。

・・・。

嫌に視界が狭く感じる・・・。

頭は熱病に侵されたように熱い。

頭痛はより激しくなりもはや正常な思考は保てていない。

少し顔を上げ今も倒れている少女達を見る。

そうだ・・・あれがプリキュアだ・・・。

―殺せ―殺せ殺せ―

少女達を視界に捉えるたびに言葉が響く。

その言葉に誘われるまま・・・オレは少女達へとその足を進めた。

「くらいなさい！・・・！」

そんな男へ飛び掛る人がいた。

その少女は空中で回転しその遠心力をそのままに男に強烈な蹴りを叩き込んだ。

男はそれを片手で受け止めるが衝撃に押されて後ろへとはじかれた。

少女も蹴りの反動を利用し高く跳躍しまだ倒れている少女達の下へと降り立った。

紫「私はミルキーローズ!!!!・・・あんたが盗んだキュアジュエル・・・倒してでも返してもらっわ!」

ミルキーローズはそう言い放ち、男の反応を待たずに駆け出した。

黒「ぐ・・・つつ・・・」

激しい音にいちはやく目を覚ましたキュアブラックはすぐさま近くに倒れている仲間たちへと近寄った。

黒「ホワイト!ブルーム!イーグレット!目を覚まして!!」

その呼びかけに答えるように3人は目を覚まし痛みが残る体をひきずるようにして立ち上がった。

白「あれは・・・だれ?」

花「分からないけど・・・あの男の人が敵ってことだけは間違いないです」

鳥「助けに・・・行かなくちゃ・・・。」

深く深呼吸をし呼吸と心を整える。痛みが少し癒えたような気がした。

黒「行くよ、ホワイト!」

白「ええ、ブラック!」

2人は戦場へと駆け出していった。

紫「くっ・・・こいつ・・・強い・・・!!」

奇襲が成功し勢いづいたローズだったが男の猛攻になすすべもなく防戦一方になっていた。

隙を見て反撃しようにもその隙が全くなく気を抜けば一撃で意識を刈り取られる攻撃を必死で捌き、かわすことしかできないでいた。

黒「くらえ!!」

白「させない!!」

疲れが見え始め膝の力が一瞬抜けてしまう。その隙をつかれ振り上げられる拳に腕ガードを固めると2人の少女が男の後ろから攻撃を仕掛けた。

男は咄嗟に振り返りキュアブラックとキュアホワイトのパンチと蹴りを防いだ。

黒「あたしはキュアブラック！」

白「わたしはキュアホワイト！」

紫「私はミルキーローズよ。」

一瞬間を見合わせ名前を交換したあと3人はすぐに男への攻撃に移った。

攻勢にすることができたが、3人がかりだと言うのに攻撃が全く当たらない。

パンチを放った手をつかまれ引き寄せられ他の攻撃の盾にされる。ギョツとして動きが止まったところを2人もろともやられる。かわされたと思っただけに足を払われ体勢を崩されてしまう。

こちらの攻撃は当たらないが、相手の攻撃は徐々にダメージを蓄積していった。

「避けてください！！」

そう叫び声がした。横目でちらりと見るとブルームとイーグレットの周りに黄色と水色の魔力が奔流していた。

理解した3人はフェイントを混ぜつつ同時に男の右足を蹴りつけた。

一瞬膝が落ちる。

すぐさま3人は男から距離をとった。

「プリキュア！ツインストリィイム！スプラアッシュュ！！」

精霊の力を借りた黄色と水色の光が高線状となって男へと襲い掛か

る。

「っ・・・」

しかし男もそれを両手で押さえつける。

力同士が拮抗しあう。が徐々に押され始めブルームとイーグレットの足が徐々に後ずさりしていく。

2人が押し負けそうになるその寸前に、

黒「これで!!」

白「おしまいよ!!」

紫「バラの花をあげるわ!」

「プリキュア!!マアアアブルツ!スクリュウウ!!」

「ミルキイローズ!ブリザード!!」

その反対側からキュアブラック・キュアホワイトとミルキイローズの必殺技が降りかかる。

ドゴオオオオオツ!!

拮抗は破れ、大地を揺らすほどの大きな爆発を起こした。

力を使い果たしたプリキュアたちは各々その場にへたれこんでしまった。

爆発によって巻き上げられた大量の砂が舞っている。

そんな現実離れた状況の運動場に新たな人物が現れた。

こまち「これは一体どういうこと!？」

かれん「なにが起きているの・・・。」

こまちとかれんだった。HARMに荷物を置いたがそこに有里の姿はなく鍵も開いていない。

くるみからは帰れといわれていたが2人の胸中には嫌な予感がひしひしと感じられていた。

新しい友達であるくるみが心配になったこまちとかれんは様子を見に来たのだった。

こまち「あなた達大丈夫!」

かれん「ひどい傷・・・早く手当しないと。」

2人は倒れている黄色と水色の服を着た少女に気付き、危険を承知で走りよっていた。

花「だいじょう・・・ぶです。」

鳥「お2人はここから・・・離れてください。」

強烈な必殺技を放った二人は、もはや満身創痍といった様子だった。

黒「2人とも・・・無事・・・？」

白「あなた達は・・・」

紫「こまち・・・かれん・・・帰りなさいっていった・・・でしょ。」

そこへ足を引きずるようにしてブラック・ホワイト・ローズが合流してきた。

体が傷が目立ちその顔はまさに疲労困憊といったところである。

こまち「もしかして・・・」

かれん「くるみ！？くるみの・・・？どうしてそんな格好で・・・傷だらけで・・・」

紫「私のことはいいの。ここが危険なのは本当よ・・・はやくはなれ」

ローズの言葉はここで止まってしまった。

全員が同じ方向を見つめる。先ほどまで巻き上がっていた砂埃が納まっていた。

黒「嘘・・・」

白「なんてこと・・・」

花「こんな・・・」

鳥「・・・。」

紫「くっ……。」

かれん「なに……？」

みな違った言葉を零したが頭の中には同じように絶望が渦巻いていた。

砂が晴れたそこには、上半身の服は吹き飛ばされ無くなっていたが、殆ど無傷なままで男は爆心地に立っていた。

こまち「なに……あれ……どういことっ……！？嘘よ……！！！」

かれん「こまち……？こまち！！どうしたの！？」

見てしまった。それを見つけてしまったこまちは狂気を孕んだような声をあげた。

そのあまりにも異常な状態にかれんがすぐさまよりそう。がこまちは体の震えが増すばかりであった。

そう……こまちは見てしまったのだ。

こまち「なんで……どうして……」

男の首と横腹にある……真新しい痣を。

「こまち」どうしてあそこに有里さんがいるのよおおっっ！……！」

「自分を見失ってしまったら、探し方すら忘れてしまう」

第12話 【呪い】（後書き）

この話は筆がすすみました。

キーボードだけど。

第13話
【決意】

黒「有里……さん……？」

白「そんな・・。」

花「え．．．なんで．．．？だってこの人．．．」

鳥「嘘よ……そんな……そんなのって……」

信じられない、いや信じない。

つらい時、悲しい時、落ち込んだとき、一番に励ましてくれたのが有里さんだ。

楽しい時、嬉しい時、幸せな時、一緒に笑ってくれたのが有里さんだ。

だからこそありえない。いつも頭を撫でてくれたその手で私達を殴ったというのだろうか。

先の爆発で壊れたのだろう、男の顔半分を覆っていたサングラスがミシッと音を立て地面へと崩れ落ちた。

「?！」

驚愕が走り、少女達は現実を突きつけられた。

目は虚ろになり死相が浮かんでいたが間違いなく男は少女たちの慕う有里だった。

黒「有里さん！どうして・・・！！」

白「有里さん！返事して！！」

花「有里さん！有里さん！」

鳥「いや・・・いや・・・こんなの・・・有里さん！！」

かれん「どうして・・・有里が・・・？こまち！こまち大丈夫？」

かれんは親友の体が震えているのに気付いた。顔を覗いてみると血の気がひいたように真っ青になっている。

紫「かれんはこまちを連れて離れて！早く！」

こまちの体を抱き上げるようにしてかれんはその場を離れた。

有里「ぐ・・・が・・・あ・・・殺す・・・」

そう呟き有里はまた走り出した。少女達は立ち上がることもできない。もし無傷の状態でも同じことだっただろう。

それほど彼女達を包んだ驚愕と絶望は大きなものだった。

紫「くっ・・・！」

男が走り出したのに合わせミルキーローズも駆け出した。

再び組み合うが有里のほうも必殺技のダメージが入っていたのか動きが緩慢になっておりローズが若干押す形となっていた。しかしローズの方も大分疲れているのか攻めきれないでいた。

4人の少女達は泣いていた。

ぐちゃぐちゃになった感情を処理しきることが出来ず涙となって溢れていた。

黒「有里さん・・・有里さん・・・」

白「有里・・・さん・・・」

花「有里さぁくん・・・」

鳥「有里・・・さ・・・ん・・・有里さん。」

有里「・・・っ」

紫「せいやっ!!」

少女達の嗚咽が聞こえた。

一瞬有里の動きが止まる。その隙をつきローズはなんと男らしい1本背負いを決めその体を投げ飛ばした。

紫「あんた達! そんなにあいつが好きならもっと呼びなさい! 叫びなさい! その気持ちの分だけあいつに伝えなさい!!」

・・・。

・・・。

オレはまた暗い闇の中に居た。

知っている世界。オレはここで何秒も何分も何時間も何日も何年も眠っていた。

体の感覚は無かった。むしろ闇の中に自分が広がっていくように感じている。時折心臓が思い出したかのように振動する。

その鼓動でオレはまだ生きているんだということを思い出させてくれる。

ふいに温もりを感じた。

その暖かさを辿っていくとそれが右腕であることに気付いた。

そうか、オレには腕があっただんだ……。

同じように反対側も暖かくなった。左腕だ。

それからすぐ後を追うように下のほうがあったかくなった。そうか、足だ。オレには足があった。

ドクン……と血が流れる感触がある。気付けばそこにはオレの足が見つかっていた。

……y……り……。。。

なんだ……何かが聞こえてくる

……り……さ……。。。

まるで悲鳴のようだ。涙が混じった叫び声。

ゆ・・・・・・・・り・・・・・・・・さん・・・・・・・・ゆりさ・・・・・・・・ん。

呼んでいる、誰を・・・・・・・・？オレを・・・・・・・・？オレは・・・・・・・・。

ゆりさん・・・・・・・・ゆりさん・・・・・・・・有里さん！！！！

聞こえた。そうだ・・・・オレは呼ばれている。

起動がせわしく動き出す。血を、命を、体中に張り巡らせた道にめぐらせていく。その熱が示している。お前は生きています、生きると。

真つ暗だった世界に光が見えた。小さな、誕生日ケーキに刺さるうそくより小さな光だ。

解かるオレには解かる。あれは出口だ。ここはオレのいるべき場所じゃない。光だ。あそこそがオレのいるべき場所なんだ

オレはその小さな光に手を伸ばし・・・・掴んだ。

・・・・・・・・。

・・・・。

顔にあたる雫に気付くオレは目を覚ました。
まだ頭がぼやけている。ああオレは地面に倒れているのか。
とりあえず立とうとするが四肢が動かない。

黒「有里さん！」

白「有里さん！」

花「有里さん！」

鳥「有里さん！」

そう名前を呼ばれてやっと自分がおかれた状況を理解した。
腕をなぎさ、ほのかに。足を咲、舞に抱きしめられていた。

オレが起きたことに気付くと4人は泣きながら今までより一層強く
抱きしめてきた。

それと同時に大きな泣き声が4方から聞こえてくる。

目線をあげると砂で汚れた制服に身を包むくるみが仁王立ちしてこ
ちらを見ていた。

くるみ「全部話してもらっわよ。」

有里「さすがにこれ以上の隠し事は嫌われちゃうな。」

そういい2人でクスリと笑った。

有里「オレはどうなってた・・・？」

くるみ「私達を・・・殺そうとしたわ。」

有里「それで？」

くるみ「みんなでアンタの名前を叫んだの。戻ってこいって。勿論
私は呼んでないわよ？そしたらアンタ苦しみだして自分の体をかき
むしりだしたの。」

有里「どうりで痛いわけだな。」

くるみ「それを見たこの子達が飛び出してね、もう変身してる力もないっていうのにアンタの体にしがみついたの。傷つけさせないよにね。」

有里「道理で体中が痛いわけだ。」

くるみ「それでも暴れるアンタを地面に引き倒して、名前を呼び続けたわ。そして今に至るといわけ。」

くるみはそう言い放ち、肩をすくめたため息をついた。呆れたというよりは疲れたといった様子だ。

泣き声が納まり始めた4人が顔を上げ一様に有里の顔を覗きこんだ。普段と変わらない有里の顔を確認すると安心したのかまた涙が溢れだしてしまっている。

オレにできることなんて謝りながらその頭を撫でてやるくらいなものだ。

高いツケを払わされそうだ。今も雨粒を吐き出す曇り空を見つめた。そこで気付く。

雨雲に小さく黒い穴のようなものが浮かんでいる。

有里「まずいつ、お前ら離れる!!」

そう叫び4人を突き飛ばした。くるみも反射的に離れたらしい。

ほぼそれと同時に”それ”は来た

有里「ぐっ・・・があっ・・・!!」

空から一直線に落ちてきた”それ”はオレの体にその勢いのまま拳を振り落とした。

スコルプ「ふはははは、これがジュエルの力か・・・凄まじいな。

」

有里は一撃で意識を刈り取られていた。

スコルプはぐったりとしている有里の体を肩に担ぎ少女達のほうへと振り返った。

スコルプ「今日の任務はこいつを連れ帰ることだ。貴様らのジュエルはまた今度奪いに来る。それまで大事に持っているんだな。」

そっぴい残し有里もろとも姿を消した。

少女達はその光景を、ただ見ていることしかできないのだった・・・。

・・・。

・・・。

次の日。

なぎさ、ほのか、咲、舞、くるみ、かれん、こまちの7人は喫茶HARMにいた。

プリキュアである4人は泣きはらしたのだろう目の周りが真っ赤になっていた。

重々しい空気の中、かれんが口を開いた。こまちはかれんのすぐ横に座って俯いている。

かれん「話してほしいの、あなた達がなんなのか。有里がどこへ連れてかれたのか。」

その質問にくるみが答えた。

精霊界。暗黒界のこと。プリキュアのこと。有里のこと。敵の事。くるみが知っていることを全て話した。

かれん「それじゃあ有里は操られていたってこと？」

くるみ「そんな様子だったわ。道理であいつを見るたびイライラするはずだわ。かすかに闇の力の香りがしていたのね。」

かれん「有里はどこに？」

くるみ「おそらく暗黒界にある城ね。」

その時、HARMの玄関がゆっくりと開いた。

そこにいたのは傷をおった満、薫と見知らぬ少女の姿だった。

咲「満？薫！？どうしてそんな傷だらけで・・・」

舞「大丈夫・・・？ここへ座って・・・」

憔悴していた咲、舞も傷だらけになっていた友達を見てすぐに手を取り自分達が座っていたソファの上に座らせた。

かれんもゴスロリを着た少女をその横へと座らせてあげる。

かれん「あなたたちは・・・？その傷はどこで・・・。」

・・・。

かれんがそう訪ねるが言葉は返ってこない。

すると3人がソファをおりて床に座った、というよりはそれはまるで土下座のようだ。

満「お願いがあります。」

薫「兄様を助けてほしいのです。」

闇夢「どうか皆さんの力を貸してください」

そう言い3人は頭を下げた。

先ほどまで言葉も発さなかったなぎさ、ほのかも顔を上げる。

なぎさ「有里さんは・・・どうなったの？」

満「兄様は今捕らわれ力を奪われています。このままでは兄様は呪

いの力によってアクレアタム様の奴隷戦士となってしまう。」

薫「兄様と一緒に捕らわれそうになった私たちを最期の力を振り絞って逃がしてくれました。」

闇夢「お兄様を救うため、わたし達はまた暗黒界へ行く。でもそれではまた返り討ちになってしまう・・・。」

ほのか「だから私達の力が必要ということね・・・、なぎさ。」

なぎさ「うん、わかってるよほのか。このままうじうじしてたらまた有里さんに馬鹿にされちゃうもんね。それに返さなきゃいけない恩がいっぱいある。」

咲「あたし達も行きます。例えどんな強い敵が待っていても。」

舞「有里さんのためなら怖くなんかない。」

さつきまでの落ち込みようが嘘のように4人の少女の目にはリンリンとやる気が満ちていた。

満「このお店の裏にある泉から暗黒界へ行くことができます。」

ほのか「早速行きましょう。遅くなるだけ有里さんが苦しむことになるわ。」

そう言い7人が玄関へと向かっていく。そんな中、今までじっと座って下を見ていた。こまちが立ち上がった。

こまち「わたしも連れて行って。」

7人の少女は立ち止まる。こまちの出したその声に込められた意思の強さゆえにだった。

恋慕ゆえか、正義心ゆえか、なぜそんなことを言い出したのか自分でも解からないがそうしなくてはいけないような気がしたのだ。

しかしただの中学生の少女に何ができるはずはない。戦うことなんてできない。下手を打てばその命だって危ないだろう。

しかし引くこともできない。自然と握り締めたこぶしが震えだす。

そんなこぶしを優しくつかまれた。

かれん「私も行くわ。こまちを放つとけないし、有里のためだもの。止めても駄目よ、無理にだって付いていくわ」

くるみはその光景を見て大きくため息を吐き

くるみ「この2人の面倒は私が見るわ。それなら文句ないでしょ？さあ行くわよ。」

スツとこまちとかれんの間に入り、その手をつかむと果然と立っていた少女達の横を通り過ぎていった。

・・・。

・・・。

10人の少女達は泉を囲んで立っていた。

満「ジュエルを泉に浸けてください。」

そう言われた5人はジュエルを取り出すと握ったまま泉に入れた。

すると泉全体から大きな光が立ち上り、徐々に真ん中へと収束されていき直径10mほどの円柱の光になった。

薫「あそこへ飛び込めば暗黒界へと行くことができます。」

闇夢「準備はいい？」

少女達は各々力強くうなづいた。

― 泉に入った少女達の体を、光が包み込んでいった。―

第14話 【フチ切れ】

なぎさ「ここが・・・暗黒界。」

ほのか「薄暗くて・・・なんだか寒いわ。」

泉を抜けるとそこは薄暗い世界だった。

木々は枯れはて草花は腐り空気もよどんでいる。

満「こちらです」

そう言い歩き始めた満、薫、闇夢のあとを少女達は付いていった。

しばらくすると遠巻きに城が見えてきた。

目を凝らしてみると城にあるひとつの鉄塔が光っているのが解かった。

薫「あの光っている場所に兄様がいるはずです。」

目的地を確認し、一行は小走りになり城へと向かった。

城の門が見えてくる。すると地面からボコボコの黒い泡のようなものが吹き上がりそれは徐々に変化し人間の形になっていった。

門を守るように真っ黒い人間のようなものが次々と出現してくる。50体ほどになると門の周りにゆらゆらと待つまっっていく。まるで侵入者を拒むかのようにだった。

闇夢「チツ・・・うざったいな・・・」

満「ここは私たちが引き受けます。」

薫「皆さんは先へ。」

咲「え・・あんなに敵が沢山いるのに・・」

闇夢「先に行けって言ってるのが聞こえないのかしら？ここに残るのは私の敵だけよ。」

なぎさ「上で待ってるからね。必ず来てよ！」

3人が黒の群れに突っ込んだ。途端に衝撃波が起こり城門までの一本道ができあがる。

少女達は振り返ることなくその門へと走っていった。

満「さっきの台詞だと私達も敵ということになるのかしら」

闇夢「あら、あなたたちが消えたら私が変わりにお兄様の愛を独り占めしてあげるわ。」

薫「やる気？」

闇夢「2対1でもいいわ？かかってらっしゃい。でもまあその前に、

」

「「「この邪魔者たちを消さないとね」「」

・・・・・。

・・・。

どこおおん！という爆発音に足を止め後ろを振り返る。

咲「大丈夫かな・・・満さんと薫さん・・・」

なぎさ「咲、急ごう。そのために3人が残ってくれたんだから。」

筋「生憎だが君達にはここでお引取り願おうか」

ほのか「だれ！？」

筋「私の名はキントレスキー。もう一度言おう、君達にはここで帰っていただく。」

舞「帰らないわ！有里さんを助け出すまでわ！」

なぎさ「あなたが邪魔をするなら倒してだって先へ進むんだから！」

「ミルキーローズトランスレイト！」

紫の光を放ち変身したミルキーローズがキントレスキーにとび蹴りを放った。

少々不意をつかれたがそれを右腕で軽々しく受け止める。

紫「ここの面倒は私が受け持つわ。あんた達は先に行っていていいわよ。」

舞「でも1人じゃ・・・」

かれん「私達が付いているから安心して。」

こまち「何の役にも立てないかもしれないけど、くるみさんだけを置いていけないわ。あなた達是有里さんをお願い。」

なぎさ「解かった。また後でね!」

少女達は走り去っていった。

紫「どうして残ったの?」

かれん「あら? 1人じゃさびしいでしょう?」

こまち「それに私達を守るって言ったのはくるみさんの方よ?」

紫「そうだったわね。じゃあ怪我しないように離れてなさいねっ!」

そう言いながらローズは再びキントレスキーへと向かっていった。

・・・。

・・・。

なぎさ「ここか・・・。」

少女達は大きな扉の前に立っていた。

咲「ここに有里さんが・・・。」

ほのか「入りましょう。」

舞「何があるかわかりませんから気をつけていきましょう。」

咲となぎさが扉を押し開ける。

そこは薄暗い部屋だった。大分広いように感じられるが奥のほうは真っ暗くなっていて視認することはできない。

「よく来たな」

暗がりからそう声がした。と同時に天井に明かりが点り明るくなる。

少女達は絶句した。

部屋の奥には先ほどの声の主である男、スコルプが立っている。その横には天井から降りているまがましい触手のようなものが腕に突き刺さりぐったりしている有里の姿だった。

有里の周りの地面にはおそらく有里のものだろう体液が飛び散っていた。

スコルプ「こいつから力を奪っているのだ。抵抗の意思を削ぐために少々拷問まがいのこともしたがな。」

そっついスコルプは膝立ちになりぐったりしている有里の顔を蹴り飛ばした。

唾液と血が混じったものが口から吐き出される。うめき声も上げる気力もないのだろう蹴りの衝撃で動いた体も再び力なくうなだれていた。

スコルプ「こいつが気を失えばその瞬間に我らの奴隷になるのだね・・。なかなか強情なものだ、身体的、精神的に痛めつけても反応をしめさない。おかげで色々な拷問をしてしまったよ。こいつにとっての不運は私が男もいける口だったということかな・・。」

そう言い男の無表情だった顔が醜くゆがんだ。

なぎさ「よくも……よくも有里さんを……」

ほのか「あなただけは絶対に許さないわ。」

咲「その顔殴つてやる……。」

舞「有里さんが苦しんだ分、あなたに2倍返します。」

少女達の肩は震えていた。恐怖などではない。

今まで味わったことのない深く、大きな怒りがあふれ出し武者震いを起こしていたのだ。

スコルプ「これももうすぐ墮ちるだろう。そうしたら私専用の奴隷とし、せいぜい可愛がつてあげるとしよう。」

スコルプは少女達のほうを見ながら、見せ付けるようにしながら有里の顔をいやらしく舐め上げた。

[illegible]

言葉も発することなく一瞬で変身した少女達はスコルプへと駆け出したのだった。

・・・。

・・・。

紫「くっ・・・こいつ・・・！」

金「フハハッ 婦女子にはなかなかできるようだが・・・一撃が軽いな。」

城の廊下ではまだローズとキントレスキーの戦いが続いていた。持ち前の俊敏さでキントレスキーの攻撃を避け、隙を見て攻撃していたローズだがその鍛え抜かれた強靱な肉体にダメージを残すことは出来ないでいた。

かれん「くるみっ下がって！」

その言葉にローズが距離を取る。追撃しようとするキントレスキーを弓矢が襲い掛かる、が全部叩き落されていた。

かれんは近くにあった武器庫のような部屋で見つけた弓を持ちローズの援護をしていた。

ローズはかれんとこまちの所まで下がる。

紫「まずいわね・・・このまま消耗戦じゃいずれ負けるわ。」

こまち「ごめんなさい・・・私何も出来なくて・・・。」

かれん「こまち、考えるの。あなたの観察力、想像力は力になるわ。」

紫「さしずめ参謀という所ね。任せたわよ、こまち！」

距離をつめつつあったキントレスキーへと再び向かっていった。

かれん「私も援護するわ。」

かれんもこまちの前に膝立ちになり弓を構えた。

こまち（私にできること・・・考えなくちゃ・・・。）

こまちは戦っている二人を見る。

ローズは常に動き回りキントレスキーはカウンター気味に構えている。

廊下の広さは横幅3mといった所か。天井までは4mほどだろう。

電灯が吊るされていてそれが淡く光り廊下を照らしている。

窓ガラスからも薄暗い光が差し込んでいた。

こまち（どうすれば・・・どうすればあの人を倒すことが出来るの・・・。電灯・・・窓・・・そうだわ！！）

こまちはかれんに近寄り作戦を話した。

こまち「できるかしら。」

かれん「やってみせるわ。くるみっ下がって！」

弓で援護をしローズが下がる。

紫「そろそろ限界よ・・・。」

こまち「作戦があるの・・・聞いて。」

こまちが作戦の詳細をローズに伝える。その間もかれんはキントレスキーに牽制の矢を放っている。

こまち「どうかしら・・・。」

紫「うまくいくかは微妙だけど・・・面白そうね、乗ったわ。タイミング任せるわよ」

再びローズが駆け出すと同時にかれんが下がる。

紫「はああああああ！」

さきほどとは打って変わり果敢に打って出るローズ。その気迫とラッシュにキントレスキーは押されていた。

金「なんと・・・まだこれほどの力を・・・面白い！面白いぞ！」

がそれも一時のこと。キントレスキーが押し返そうとしたその時。

こまち「今よ、かれん！」

かれん「当たり前さい！」

その声にキントレスキーは2人の少女に目線を逸らす。見れば天井に向けて矢を言っているではないか。

金「恐怖に狙いをつけることもできなくなったか。なにっ！」

そう笑おうとしたキントレスキーの頭上からガラスの破片が降り注ぐ。

咄嗟に後ろへと跳躍しそれを避けた。

金「これが狙いか・・・だが甘いな！この程度避けられん私では・・・

」

着地したキントレスキーは前をみるがそこは真っ暗な廊下。少女達の姿を捉えることはできない。

金「これは・・・どこへいった！」

紫「馬鹿ね、あなたのその派手な体は丸見えよ！」

その隙をつき懷に潜り込んでいたローズはうるたえるキントレスキーの腕を持つと

紫「これで・・・終わりよ！！」

窓ガラスに向かって投げ飛ばした。

金「なんとおおおおおおおおおおお」

男らしい叫び声を残しながらキントレスキーは窓ガラスの破片とともに落下していった。

紫「なんとか・・・なったわね。」

かれん「こまちの作戦勝ちというところね。」

こまち「私達の目的は有里さんを助け出すことだもの。あの人を倒すことじゃないから。」

紫「お手柄よこまち。あなたのおかげだわ。」

こまち「2人がいたからこそよ……。行きましょう。有里さんが待ってるわ。」

3人の少女は小走りに進みだした。

。。。。。

。。。。。

場所は変わりここは有里が捕らわれていた部屋。

あれから10分ほど経っただろうか、部屋の壁は所々破壊され戦闘の荒々しさが見て取れた。

黒「ホワイト後ろ！」

白「任せて。」

ブラックがスコルプの正面に立ちパンチのラッシュをかける。しかし全てスコルプにいなされかわされるが後ろからホワイトが回し蹴りを仕掛ける。

だがそれも読まれていたのかホワイトは足を掴まれブラックへと投げつけられた。

不意をつかれたブラックもホワイトと一緒に飛ばされてしまう。
その瞬間スコルプにブルーム、イーグレットが空中から仕掛ける。

しかしその隙をついた攻撃も両腕で防がれてしまう。

花「くらえっ！」

精霊の力を込めた渾身のパンチを放つが腰を落とし両手を重ねたス
コルプに止められてしまう。

鳥「せやっ！」

ブルームのパンチに少し後ずさったスコルプの顔を狙ってイーグレ
ットも精霊の力を借りた蹴りを放つが腰をかがめ避けられてしまう。

黒「てりやあああああ！」

白「はああああああ！」

そこへブラックに投げとばれたホワイトがその勢いのままのとび蹴
りをスコルプへ叩き込んだ。

背中を思い切り蹴り飛ばされ吹き飛び壁へと突っ込む。崩れた壁の
瓦礫が降ってきてその体を覆い隠す。

黒「やった・・・っ」

白「手ごたえはあったけど・・・。」

スコルプ「伝説の戦士といえど所詮この程度か・・・いやジュエルの数で言えば当たり前か。」

少女達が見たのは大したダメージもないように立ち上がるスコルプの姿だった。

スコルプ「飽きてきたな。そろそろ終わらせるとしよう。」

そう言葉のみを残し男の姿が一瞬にして消えた。

なっ！？と辺りを見回す暇もなくブルームが壁に叩きつけられる。それに気付いた時はイーグレットが、ブラックとホワイトが構えようとしたときには2人とも地面へとたたきつけられていた。

それからは戦闘とは名ばかりの一方的な虐殺がはじまった。

動けない体を引きずりあげられお腹を殴られる。うずくまれば容赦ない蹴りが飛んでくる。

体は人形のように投げられ壁にたたきつけられる、肺の空気が吐き出され胃液が口から零れだす。

体中は擦り傷、打撲だらけになる。体のなかで痛くない場所なんかない。

痛い・・・怖い・・・嫌だ・・・助けて・・・。ブラックが地面に倒れながらそう思った。

涙が地面に広がっていく。その瞳でぼんやりと前をみた。そこには自分の大好きな人がいた。

黒（有里さんはもっと辛かったのかな・・・ごめんね・・・助けられなかったよ、有里さん・・・ごめんね。）

そう心で呟いた。気付けば痛む体を引きずって有里さんのほうへと向かっていた。

ホワイトも、ブルームも、イーグレットも有里さんへと向かっている。

スコルプ「なんと惨めな姿だ・・・こんな奴等に我々は苦しめられたというのか。いいだろう、まとめて消してくれる。」

スコルプは腰を落とし構えた。赤黒いエネルギーが奔流し両手へと集まっていく。以前見せたものとは比べ物に無いほどの力だった。

そうしている内に少女達は有里の下へと辿り着いた。既に変身は解けていている。

なぎさ「ごめんね・・・有里さん、ごめんね」

ほのか「助けられなかった・・・守って上げられなかった・・・」

咲「有里さんはいつでも助けてくれたのに・・・恩返しもできない・・・」

舞「ごめんなさい・・・有里さんっ。悔しい・・・悔しいよぉ・・・。」

言い終わるや否や少女達は意識を失う。その手に握り締めていたキユアジュエルが乾いた音を立てて地面に落ちた。

スコルプ「これで終わりだ、伝説の戦士よ。フリティラリアよ!」

突き出した手から凄まじい力が解き放たれる。部屋全体を揺らすほどのその赤黒い力は、彼等を飲み込み跡形もなく消し去るはずだった。

はずだった。

スコルプ「なん・・・だと・・・。」

部屋ごと消すぐらいの力を込めた。出せる全ての力だ、止められるはずがない。消されるはずがない。ましてやあれだけ拷問し痛めつけた奴が立っているはずがない。

スコルプ「どういうことだ、なぜ貴様が立っている。フリティラリアアアアアアアア！！！」

有里「お前が叫ぶなんてな・・・。なにをそんなに取り乱してんだよ。」

有里は不敵な笑みを浮かべながらゆつくりとスコルプへ近づいていた。

スコルプ「ふざけるな！私は・・・私にはジュエルの力があるんだ！貴様なんかに・・・！」

スコルプに最早先ほどの余裕は無い。

有里「お前がジュエルから得ていた力なんて・・・こう・・・なんていうか・・・表面的というか・・・断片的？・・・駄目だ、いいたとえが思いつかない。とりあえずお前は死ぬ。」

有里が断片的？といった辺りでスコルプは一瞬で跳躍し有里の後ろへ回り込んでいた。

そして有里はそのスコルプの顔に回し蹴りを叩き込んだのだ。思わぬ反撃を顔面にくらい顔を抑えながらひるむスコルプ。

有里「オレにした分は許してやるよ。でもあいつらにした分はしっかり仕返しさせてもらうからな。」

その言葉から10分間、スコルプにとっての地獄の時間が始まった。腹を殴られ、顔を蹴られ、壁に地面に叩き付けられ、指の骨を折られ、腕の骨を折られ、足の骨を折られ、歯は全て殴られ抜け落ちた。明らかに倍返しというかOver Killといった所だが何より怖いのがスコルプの体をいたぶっている間も有里が無表情だったことだろう。

有里「なんだよ・・・ほら命乞いしろよ。痛いなら痛いって言わなきゃわかんないんだけど・・・。黙ってるってことはもつとやってほし
いてことか？おい。」

顔を踏んでもスコルプから反応は返ってこない。顔を見れば白眼をむいて気絶していた。

有里「三下が調子に乗るからこんな目にあうんだよ。いい教訓になったな。」

スコルプの懷からキュアジュエルを回収すると首根っこを掴み廊下まで引きずっていくと窓からその体を投げ捨てた。

少しひどいようにも思えるがスコルプのしたことを考えると納得もいくだろう。

パンパンと手を払うと少女達のところへと駆け寄った。

第15話【脱出】

少女達の下へ駆け寄った。

様子を見るが皆浅く息をしている。傷は多く出血しているものや折れている箇所も見て取れる。

これは動かさないほうがいいな……。

右手に持っていたジュエルを1人1人に掴ませ、少女達の周りに円形になるようあまつた5個の石を置いた。

有里「気分は錬金術師だな……。」

オレは手を胸の前で拝むようにパンと合わせ（必要の無い動作）地面に手を付いた。

するとジュエルから光の筋が広がり5個の石から放たれるそれはつながり円を成した。

円になった光は徐々に強まりやがて淡い光を立ち昇らせた。

すると少女達の傷は少しずつではあるが癒されていくのが解かった。

有里「これで時期目を覚ますだろ……ってオレ裸じゃなか、これはさすがにまずいな。」

いくら鍛え抜かれた自慢肉を持っていようが中学生の女の子達の情操教育上あまりよろしくない。

かといってこの部屋にそんなものないしなあ。あの糞虫から剥いどけばよかったな。

とりあえず割れた窓からはいる風が気持ち良いので仁王立ちになつてみる。

ああ素晴らしい。やはり男は全裸だ。自らの肉を誇ることこそ男が漢たりえる証なのかもしれない。

しかし禪のあの引き締まる感覚も捨てがたいな。弱点をこうも露にぶらさげていては危険という考えも支持できる。

だがオレは自らの体に恥ずべき場所などないと自負している。

よしっ決めたぞ。これはからはいっぴかなる時もこのエクストリームスタイルを貫いていこう。

有里「全裸万歳！」

紫「なにが全裸万歳だあああああ！」

人生の境地に辿りついたオレを出迎えたのは健康的なスパッツに包まれた足が繰り出す跳び膝蹴りだった。

有里「なにすんだこんにやろう！オレの鍛え抜かれたこの美しい肉に嫉妬か！」

紫「なにが肉よこのバカ！人がせつかく助けにすればこんなところで肉だの全裸だのと……。」

助けに来てくれたのか。そういえばなぎさ達がここに居るのにも特に疑問に思わなかったがオレを助けに来てくれてたんだな。

とりあえず起き上がるとくるみの他にまだ2人いたことに気づいた。

こまち「なんで・・・有里さん服着てないですか・・・隠してください。」

かれん「婚前前の少女になんてもの見せるのよ。」

かれんは手で顔を覆っている、が指の間からチラチラと盗み見ていた。こまちは当然のようにガン見だ。

こいつら台詞が逆だろ・・・そう思いながらも両手で愛刀を隠した。

有里「ありがとな、お前らまで来てくれるとは思わなかった。本当に嬉しいよ、ありがとう。」

愛刀を隠しながら頭を下げた。はたから見ればなんとも情けない姿だろう。

紫「情けない姿ね・・・」

頬を赤く染めながら出来るだけ有里のほうを見ないようにしていたローズがそう呟いた。

はたから見なくても情けない姿だったらしいです。

有里「確かに一度は悟りを開いたオレだが少々恥ずかしくなってきたな・・・よし」

オレは指をくわえると犬を呼ぶように口笛を吹いた。

30秒ほどして廊下のほうからドタバタと走る音が聞こえてくる。

闇夢「および・・・でしょ・・・うか・・・お兄様・・・。」

満「満・・・お呼びにより・・・参上しました。」

薫「同じく・・・薫参上しました。」

明らかに全力疾走してきました。というかなのような3人が姿を現した。

有里「半分冗談みたいな感じだったんだが・・まさか本当に来るとは・・・オレの服を持ってきて欲し」「こちらに。」

言い終わる前に3人で持ち服を差し出してくる。なんだこのご奉仕スキルは・・・。

有里「さ・・さすがだな・・。ありがとう。」

若干引き気味ではあるが渡された服を着る。お礼を言つと3人とも頬を染めていた。

有里「よし、こまち、かれんちょっとこっち来てくれないか？」

呼ばれた2人が首をかしげながら近づいてくる。

2人の手を取りさつき取り返したキュアジュエルを1個ずつ握らせた。

こまち「これは？」

かれん「綺麗・・・宝石？」

紫「あんたそれキュアジュエルじゃない！返しなさいよ！」

くるみが何かぎゃあぎゃあ騒いでいるが特に気にせずに2人に向き直る。

有里「それじゃあ2人とも、プリキュアメタモルフォーゼと大きな声で叫ぶのだ」

こまち「メタモルフォーゼ？プリキュアって・・・」

かれん「どういうことなのこれ・・・？」

当然の反応だろう、2人は訳のわからないといった様子だ。

有里「かれんが言うこと聞いてくれたらオレなんでもしちゃうかもしれない。」

かれん「こまちっ！やるわよ！」

こまち「ちょっとかれん・・・なんでそんないきなりやる気なの・・・？」

かれん「理由なんて無いわ。私はそうしなくてはいけないからよ。」

こまち「わ・・・わかったわ・・・」

かれん「行くわよ！プリキュア！メタモルフォーゼ！」

こまち「はぁ・・・ぷりきゅあーめたもるふぉーぜ」

なんとも温度差のある掛け声だが2人の体が青と緑の光に包まれる。外側からは見えないが中では変身が行われているのだろう。来ている服が魔法の力で脱げたり、魔法の力で服が脱げたり、全裸になったりしているのだろう。

オレならちよつとぐらい覗けるんじゃないかしらーとか思ってた
ら紫色のあいづがすごい睨んできたので今回は諦めた。

一際光が強くなると2人の姿が見えるようになってくる。

青「知性の青き泉！キュアアクア！！」

緑「すごい変身しちゃったわー」

青「ちよつとこまち！真面目にやりなさい！」

緑「真面目ってそんな・・・ふざけてる訳じゃないのに・・・」

青「知性の青き泉！キュアアクア！」

緑「やすらぎのミントのかおりーキュアミント。」

「2人はプリキュア！」

緑色のほうからさつさと終わらせて帰りたいオーラがあふれ出して
いたが2人でとりあえずの決めポーズを決めていた。

青「これが・・・有里のくれた力・・・有里様の・・・えへへ・・・えへ
へへへ」

緑「ちよつとかれん興奮しすぎて地が漏れてるわ・・・隠して隠し
て。」

かれんが自分を抱きしめるようにしてくねくねしているのをこまち
が隠そうとしている。

よくは解からないが見ないで置いたほうが正解だろう、現実から軽くゲラウェイ（get away）しておいた。

有里「おおゝ可愛い可愛い。さすがオレの見立てに狂いは無いな！多分下に増援来ると思っしあいつらもうすぐ目が覚めるからよろしくね。じゃあ行ってくるわ。」

満「いつてらっしやいませ。」

薫「お早いお帰りを心待ちにしております。」

闇夢「後の事はメイにお任せください。」

お兄様は私達に命じられたのです！引っ込んでなさい根暗姉妹！と口喧嘩らしきものが聞こえてきたがすでに現実からラナウェイ（run away）していたオレにはそれを知覚することはなかった。

城の中を高校生の体育の時間よろしだらだと走っているとやがて目的の場所へついた。

オレがこの城の中でもっとも嫌いな場所、夜の闇だ。

日々の週間を重んじるオレはいつものようにヤクザキックで扉を蹴り飛ばした。

そしていつものように不遜な態度で部屋へと入る。

あいつもいつものように真っ暗な闇に覆われていた。

アクレアタム「何しに来た」

有里「今回はマジで取りに来たみたいだな。実際ギリギリの所まで追い詰められたよ。やるじゃねえか、だが大事な部分をあの屑にまかせたのが間違いだったな。」

アクレアタム「用件を言え。長く喋られるほど賢くは無いだろう」

有里「そうだな。オレも1個だけ言いに来ただけなんだ、そうでなけりゃこんなとこタイムセールがやってたって来やしねえよ」

悪態をつきオレはあいつを睨んだ。

有里「オレはお前を殺す。そしてオレはオレを取り戻す、記憶も名前も全てだ。そのツケとしてお前の全ても奪ってやる。」

あいつの反応は無い。別に何か答えるのを期待していたわけじゃない。オレは踵を返すと嫌な思い出しかないその部屋を振り返らずに後にした。

「よいのですか？今のあいつなら再び捕らえるのも不可能ではなかったでしょう。」

アクレアタム「良い。他の世界に侵攻していた者たちを呼びもどせ。全戦力を持って虹の郷を落とす。」

「はっ、全てはアクレアタム様のために。」

.....

.....

用事を済ませ階段でいちいち降りるのもめんどくさくなったオレは窓から飛び降りる。

気分はスパイ。ーマンだ、ス。パーマンでもいい。大した違いはない。

壁を蹴りつつ一気に下へと降りていや落ちていく。

有里「伸身の新月面が描く放物線は栄光への架け橋だ！」

案の定着地で失敗したオレはがつり頭から落下した。しかしテンションがHighだったのでダメージはなかったようだ。

めまいを我慢しつつ壁に手をつきながら立ち上がる。変に回転したせいで内臓が気持ち悪い。ダメージはなかったようだ。

しゃーおらー！オレおらー！おりやどりゃ！せいやあー！

と1人叫び気合を入れる。絶対に人には見られないな

金「プリキュアめ・私が落下ごときでやられるはずがあるまいに・
・むむっ！お前はどごおおっ！

決して絶対に人には見られたくないな。誰も通りかからなくて良かった。

目の前に転がっている金色の何かが邪魔なので近くにあった井戸へ捨てておく。いくらここが暗黒の世界だろうとも綺麗にしておくの

は間違いではないはずだ。それが通行の邪魔になっているとしたら
なおさらだ。

現実からのエスケープ（escape）に磨きをかけつつオレは門
へと向かって歩いていった。

・・・。

・・・。

閻夢「消える！」

満「死んでください」

薫「当たれ」

閻夢「また私ごと消そうとしたでしょ？暗いのよねやり方が。私に
お兄様が取られて悔しいならはつきりそういったら？」

満「兄様は誰のものでもないしあなたがたまたま邪魔なところに
ただけよ。」

薫「それにわたし達は兄様が欲しいのではなく兄様の物になりたい
の。あなたと一緒にしないで」

閻夢「やろうつての？」

満薫「相手にもなりません・・・遊んであげましょう。」

紫「なんであの子達喧嘩してるの・・・というかあの子達はあいつ

の何なの？」

緑「妹・・・らしいけど・・・気になるの？」

紫「べっ・・・別にあいつがどうのこうのって話しじゃ無いわよ！ただこんな敵に囲まれた状況で喧嘩なんかされたら嫌でも気になるでしょうが・・・。」

少女達は城の門を抜けたところにいた。

はじめに来た時に黒い影が湧き出た場所に、およそ倍ほどの影が蠢いていた。

なぎさ、ほのか、咲、舞は目は覚ましたものの変身するだけの力は無く、歩くだけでもやっとなんかといった様子だった。

そんな4人をアクア、ミントが横から挟み、ローズがその前に立ち護衛している陣形だった。

険悪3人娘は敵に突っ込み暴れまわっていた。

なぎさ「ごめん・・・私達のせいで遅くなっちゃって・・・」

ほのか「そのせいで敵がこんなに・・・。」

紫「あなた達はよくやったわ。一番悪いのはここに居ないあのバカよ。」

咲「確かに・・・どうしていないんだろう。」

舞「きつと大事な用事なんだよ・・・わたし達は言われたとおり泉の・・・とこまで行かなきゃ。」

歩いているだけで息切れしている少女達は喋るのも辛そうだ。

紫「ここは私が見てるからあんた達はあの暴れてる子達を手伝いに行つて。」

早めに休めなければまずい、そう思った3人はローズに護衛を任せアクア、ミントの2人で増え続けている影の軍団へと走っていった。

青「すごい・・・！体が軽いつ、それにこんなに力が湧いてくるなんて・・・」

緑「ちょっと叩かれたぐらいじゃさほど痛くないわ・・・ちよつと半信半疑だったけど・・・すごい。」

青「有里がくれた力なのよ！弱いはずがないわ・・・。ふふふ・・・有里に包まれてる・・・えへへ・・・。」

緑「ちよつとかれん・・・じゃなかったアクアッ、顔が脱力しきつてるわよ、しっかりしてっ」

またもくねくねしだしたアクアを揺すつて正気に戻すミント。

コントが行われ余裕があるように見えるが実際は倒す速さよりも沸いてくるほうが早くジリ貧になっていた。

ほのか「ごほっ・・・ん・・・ごほっ・・・」

なぎさ「ほのか・・・大丈夫っ？」

ほのか「ごめんね・・・ちよつとむせたただけだから・・・」

紫（明らかにさつきより顔色が悪くなっている・・・傷が熱を持ち始めた？早く寝かせたほうがいいけど・・・いちど城へ戻る？それは無理か。もつと敵がいるに決まっている・・・どうする・・・っ）

ミルキーローズが焦りを隠し切れなくなっていたその時、ヤツはきただっしやあああああっ！！

と轟音を立て黒い影たちが大きく吹き飛ばされた

有里「少女の悲鳴がオレを呼ぶ！こぼれる涙が道しるべ！この身が漢と生まれた以上！弱きを助けて強気を挫く！乱戦乱世にオレ参上！」

ミルキーローズは見た。一言ずつ叫びながら変なポーズを決めているあいつを。

「誰も悲鳴なんてあげてないし泣いてもいないわよ・・・」
とりあえずため息をついておいた。自分では気付かないだろうが、その顔は力が抜け安心しきったような表情だった。

キュピーンと決めポーズを決めた後はそこらじゅうを走り回るように暴れていた。

影たちが吹き飛ばされるのをただただ見ていた。
さつきまで喧嘩していた3人がいなくなってるのに気付いた。おかたあいつの所へいったんだろう。さつきから赤色のエネルギー弾みたいなものが時々飛んでいる。

私達がさつきまで手古摺っていた敵はバカの登場から5分もたたずに全滅していた。

有里「ふはははははっ、今のオレは誰にも止められないぜ！さっさと逃げるぞー」

つらそうなのかと舞を両脇に抱えると今もポカーンとしている私達を置いてずんずん歩き出してしまった。

3姉妹がそれに追従し歩き始めるのを見て慌てたように自分達もその後についていった。

泉へと辿りつく二人を抱えたまま有里は泉へと入る。
すると泉から眩い光があふれ出した。

有里「ほれ帰るぞー」

何事もなかったかのように泉の中へ姿を消した有里を追いかけるように、少女達も泉へと入っていくのだった。

・・・。

・・・。

泉から出てきた少女達はその場にしゃがみこんだ。

心身共に疲労の限界が来たのだろう。今ベットにはいればおやすみ3秒も目じゃないといった様子だ。

有里「ちゃんとお礼を言っただけでなかったな・・・。」

テンションも落ち着いていたのだろう、有里が全員の前に立ち神妙な顔で一人ひとりの顔を見渡した。

有里「お前達が来てくれなかったらオレはあのまま服従の呪いに染まってあいつらの奴隷になつてた……。そうなつていたらオレはお前達の敵に、もしかしたらお前達を殺す者になつてたかもしれない。」

なぎさ「有里さん……。」「

有里「だから……。ありがとう。これからはお前達と一緒に戦うよ。アクレアタムを倒すために……。オレを取り戻すために……。」

言い終わるや否やその場に倒れこんでしまった。

「「「「「有里さん!!」「「「「「」

座り込んでいた少女達も驚き有里に近づいた。

「「「「「ね……。寝てる?」「「「「「」

小さく寝息を立てる有里を見て少女達は安堵のような呆れたような声を揃えてあげた。

そして皆で顔を見合わせてあはは、と笑いあうと有里に寄り添うようにして皆で寝転がった。

全員が寝付いてしまうのに10秒も必要なかった……。。

紫「これ全員私達が運ぶの?」「

闇夢「お兄様から何の命令ももらってないから……。」

満「兄様が起きていたとしたら安全な場所に運ぶよう私達に命令するはずだわ。」

薫「そんなことも解からないなんて・・・兄様に必要なのが誰かはつきりしたということかしら。」

闇夢「その喧嘩買ったわ、潰してあげる。」

紫「喧嘩してる場合じゃないでしょ・・・はあ・・・。」

「こんなめんどくさいのも、楽しいものなんだなあ・・・そう彼女は思った―」

第15話【脱出】（後書き）

初めてアクセス解析というのを見たんですがPVってのがなんなのかよく解からない・・評価ってなんだ・・お気に入りってなんだ・・？

第16話 【戻る日常】

窓からさす日差しに目を覚ます。

この始まり方多いなとそんなことを思いながら体を起こそうとしたが起こせない。

腕も動かない。案の定満と薫がベットに潜り込みオレの両腕を抱きしめて寝ていた。

体の上には闇夢が乗っかって寝ている。逆に寝づらくないか？

有里「おい、起きろ。そしてそこからどけ。」

闇夢「ん・・・結婚しようってことですか？」

有里「どう聞き違えたら求婚に聞こえるんだよ。そっからどけって言ってんだ、重いのに。」

闇夢「つまりキスしてくれるってことですか？」

有里「助けてーみちるーかおるー犯されるー」

その言葉に横で寝ていた満と薫が跳ね起きその勢いのままに闇夢を跳ね飛ばした。

そろいも揃ってためき寝入りしやがって・・・。

いつものように口喧嘩を始めた3人を放って置いて着替えを済ませた。大分体が重たいな・・・
新聞紙を取ってきて開いてみるとどうやら3日間寝っぱなしだったらしい、道理で頭も冴えない訳だ。

時刻はすでに12時を回っている。そこでやっと気付いたがかなり空腹だ。

とりあえずは昼食だと思い立ちオレは4人分の昼食を作り始めた。

簡単な昼食ができあがりそれをテーブルに置く頃には3人は椅子に座って待っていた。

部屋のほうを見るとめちゃくちゃになっている。後で片付けをやらせなきゃな・・・そう思いながらオレは席につくのだった。

食事が終わると3人に部屋と食器の片づけを命じる。頼みごとだと無視されるので仕方なくだ。そう仕方なく。

頬を染めニヤニヤしながら片づけを始める3人に少し不安を覚えるがよく考えれば以前からこんなだったなという結論にいたり店の奥においてあるソファに座り込んだ。

今日はあんまり運動しないほうがよさそうだ。かといって昼寝をするほど眠くも無い。

ひさびさにDVDでもまとめ鑑賞するか、と思い立ち部屋にあるDVD BOXを持ってきてソファの前にある机に置いた。

それと同時に片付けが終わった3人が近寄ってくる。

闇夢「片付け終わりました。お兄様の迷惑も考えずに申し訳ありませんでした、このようなことが起こらないよう卑しい私にお仕置きをおね」

有里「そーいうのいいから。」

満「薰、洗い終わりました。卑しい私達にお仕置きをおねが」

有里「お仕置きされるの流行ってんの？オレが竹刀を持っている時にお前らが口にギャグ噛んで両手両足を縛られて被虐的な顔をしているてもオレは素振りの練習に行くわ。」

闇夢「つまり口にギャグボールを噛ませて両手両足を縛っていただいて竹刀でこのいやらしい体を叩いていただけということですね」

有里「違います」

満「首輪を付けられて地面に置かれた犬用のお皿に入れられたご飯をいやしく食べるってことですね」

有里「気が違います」

薰「服を全てはぎとら」有里「もういい黙れ。」

薰「私の話だけ聞いてもらえなかった・・・」

満「逆に考えるの薰、あなただけ特別だったということよ。」

薰「特別・・・ふふ・・・。」

闇夢「私も無視されたい・・・。」

有里「オレにどうしろと・・・DVD見よっぜ、どれがいい？今日はガンダムディだ」

闇夢「ザンボットがいいです。」

満「ブレンパワードです。」

薫「イデオンが見たい。」

有里「誰が自分の好きな富野作品を上げろといった。しかも渋いチヨイスだな・・・」

ちなみにオレは黒も白もどっちも好き派である。

有里「今日は劇場版にするか。」

「つまり ということですね」「F91を見直すべきです」「逆シヤアこそ至高、異論は無い。」

ガンダム議論が始まってしまったのでとりあえずはファーストから順番に見ていくとしよう。

ちなみにオレはガンダムで言うならVっ子である。バイク乗りの血が騒ぐからな！バイク持っていないけど！

いつものように騒がしい3人を尻目にオレはガンダム鑑賞会を始めたのだった。

・・・。

・・・。

「ココ・・・ナッツ。」

ココ「はっ」

ナッツ「こちらに」

場所は変わりここは妖精界の宮殿、その中でも最も神聖とされている精霊王の間だ。

部屋の奥には大きく、白く、美しい王座があった。

掃除が掃除が行き届いているのだろうそれは綺麗であったが不思議と人が座った形跡はなかった。

その王座の前に煌びやかな衣装に身を包んだ少女が立っている。そしてその少女に跪いている青年が2人。

青年はココとナッツであった。以前有里を追い掛け回したあの2人である。

「ジュエル奪還の任についたローズは戻りません。敵もやり手のようです。そこであなた方に命じます。」

ココ「はっ、何なりとご命令を」

ナッツ「この身この命、いついかなる時もクイーン様のために……」

クイーン「ジュエル奪還はこの世界の危機に関わる問題です。よって私自ら虹の郷へと赴きます。あなた達にはその護衛を頼みたいのです。」

ココ「クイーン様自ら……!?それは危険なのは……」

ナッツ「その危険からクイーン様を守るために我らが行くのだ。不

安か？」

ココ「何を言う、クイーン様にはやぶ蚊とて近づかせせぬと誓いましょう。」

クイーン「頼もしい言葉です。それでは行きましょう、虹の郷へと・・。」

少女は威風堂々といった様子でその部屋を後にした。それに続き青年2人も後ろについて歩くのだった。

―その人は人を動かす力を持っていた。それはゆっくり世界を変えていく―

第17話 【勧誘作戦と変態】

なぎさ「有里さん起きたって聞いたけど元気ー？」

ほのか「お見舞いに来ましたー。」

有里「そうやって自分本位に動いてしまっからっ、その弊害すら考えられないんだ！」

闇夢「誰かを思うことがそんなにいけないこと？」

有里「依存と恋愛をこっちゃんにしてるんだよ！お前は！」

満「寄る辺であるのを嫌ったあなたはそれを嫌がつて離れていったのね」

有里「利用されてしまえば答えなきゃいけなくなるのが人間だ。」

薫「あなたは賢すぎたのよ、そのうぬぼれが世界を救えるだなんて妄想を生んでしまったのよ」

有里「絶望することから思考を始めるインテリがオレに説教をたれるなんて！」

なぎさ「なに・・・これ？」

ほのか「多分何かの影響だと思うけど・・・。」

なぎさとほのかがHARMに入ると訳のわからないテンションで叫

んでいる4人がいた。

顔つきも心なしに映画チックになっている。

ほか「あの・有里さん？これは・・・。」

有里「聞けば答えてもらえると思うのは子どもの浅はかな妄想だよ！自分の頭を使えないというのならその」

なぎさ「それはもういいから。これは何？」

満「さきほどまで兄様とガンダムの劇場版を見ていたところ」

薫「ガンダムごっこしようぜ！っと兄様がおっしゃったので・・・。」

なるほどね。となぎさとはのかは呆れ果てたようにため息をついた。このようなことは決して珍しいことではないのだ。

以前もベル薔薇を読破したときなんかは一日中薔薇を片手に革命じやー！革命を！と叫んでいたこともあった。

新撰組のドラマを見たときなんか模造刀を片手に革命じやー！革命を！と叫んでいた。

そして今もジェダイのライトセーバーのようなものを持ち闇夢とチヤンバラをしながら革命を起こさなきゃ地球圏は何も変わらない！と叫んでいるのだった。

ほかかがハリセンで頭をはたくまでその茶番劇は続いていた。

・・・。

・・・。

ハリセンの軽快な音が鳴り響いてから1時間が経った。時刻は5時
を回ったところだろう。

喫茶HARMの裏にある開けた広場に少女達はいた。

黒、白、花、鳥、満、薫、闇夢、緑、青といったメンバーだ。

少女達が体育座りで座っているその前に有里が仁王立ちしている

有里「今日皆に集まってもらったのは他でもない。ってくるみは？」

満「今朝早くにちよつと出かけるといって出掛けていきました。」

有里「そーかよし、今日皆に集まってもらったのは他でもない。つ
てくるみは？」

薫「解かりません。」

有里「そーか仕方の無いやつだな。今日皆に集まってもらったのは
他でもない。」

咲「今のやり取り必要なのかな？」

舞「多分スルーしておくのが一番だと思うよ・・・。」

まだこのノリについて行けてない咲と舞は戸惑っているが他の人た
ちは我関せずといった様子でガン無視だった。

有里「ここにジュエルが3つある。」

闇夢「やっと婚約していただけるのですね!」

有里「座れ。」闇夢「座ります。」

咲「何今の！？早すぎて反応もできないよ。」

舞「ここは下手に手をだすと怪我するわ、様子を見ていませ咲。」

有里「知つての通りこれはプリキュアの力の元だ。これが3つあるということはすなわちプリキュアがあと3人いるということだ。」

なぎさ「なんでさっき同じ話2回言つたの！？」

ほのか「ちょ・・・ちょつとなぎさ突っ込みが遅すぎるわ！」

有里「よつてお前達には新しいプリキュアのスカウトをお願いしたい。それっぽい子がいたら多分ジュエルが光る、かもしれない。」

こまち「スルーした・・・。」

かれん「自分がスルーされると怒るくせに。」

有里「というかまあ1人候補がいるんだけど・・・2年の夢原希つて子なんだけどね。」

咲「あつ隣のクラスかも。」

舞「時々HARMに来てる子ですよね？」

有里「まずはその子の勧誘をお願いしたい。咲、舞、満、薫頼めるか？」

4人から良い返事が返ってくる。咲にジュエルを渡しておく。

有里「なぎさとほのかにも1個。こまちとかれんにも1個渡しておこな。落としたり取られたりするなよ」

そう言いほのかとかれんにジュエルを渡した。

解散を告げると皆してHARMの中へ入っていく。どうやら夕食はここで済ませるらしい。帰ってくるアテのないツケが増えていくばかりだが笑って許すしかないな。

オレもHARMに帰ろうとすると闇夢が1人まだ座っていたことに気付いた。

有里「何してんだ？」

闇夢「……………私にはなんの頼みごともなさらないんですね。使えないってことですか？」

有里「お前にはやることがあるからな。ハルム学院の編入試験だ。」

闇夢「えっ……………ってことは。」

有里「お前も花の女学生の仲間入りだ。」

闇夢「ああ……お兄様……愛しています！」

”虹の郷で普通の女の子のように暮らしてみたい”がかねてからの夢だった闇夢は感極まった様子でオレに抱きついてきた。

妹分のささやかな幸せくらいかなえてあげなきゃだもんな。

だから住む部屋は満と薫の同じ部屋になるってことは伏せておくのが兄貴分の優しさってものでしょうか？そうでしょうか？

・・・。

・・・。

私の名前は春日野うらら。ハルム学院1年生。学生をしながらアイドルをしています。歌なんかも出しちゃったりしています。同じクラスの子なんか可愛いだなんて言われるけど女優志望の私としては嬉しいけどなんか複雑です。

そんな私は今喫茶店HARMの窓に張り付いています。

世間一般的には覗きをしているように見られますがこれは”喫茶店を覗く人”役の演技練習です。

首にかけたカメラはよりリアルティを出すためであって決して有里さんの何気ない笑顔や仕草。料理中の凛々しいお顔。かがんだときにチラ見する胸板を激写するわけじゃありません。

ああ、かつこいいなあ……。やばっ見つかる！今日は撤退しましょう。帰って秘蔵の有里さん使用済みタオルの匂いでも嗅ぎましようかね。

うふふふふ。

ーオレの周りこんなのばっかー

18話 【色褪せない娯楽】

勧誘作戦から次の日。授業が終わりHARMでだらだらとした時間を過ごしていた。

小腹が減ったので戸棚を探すと食パンが出てきたので取り合えずオリーブに突っ込んだ。

焼き上がりを待つ間パンに塗るものを探し冷蔵庫を開けるが見事なほどに何にも無い。

そうこうしている内にパンが焼きあがってしまった。

これが朝食なら目玉焼きでも焼くのだが今はおやつの時間、糖分を等分に摂取しなくては当分やる気がなくなってしまう。

探していると窓のほうからコトンと音が聞こえる。不審に思い見てみるとそこには給食にでるようなこうプチッってやるやつが置いてあった。

おっこれはラッキーと深く考えずにそれをパンに塗って食べる。

小腹も膨れたのでソファに寝転がり漫画を読んでいると

なぎさ「ちわー」

ほのか「こんにちは」

扉が開かれなぎさとほのかが入ってくる。

漫画に夢中になっていたので「ういよー」と適当な挨拶をしていた。

しかしそのお座成りな態度が気に入らなかったのか少しむくれ顔をしたなぎさとほのかが近寄ってくる。

なぎさ「有里さんあたし達が来ても嬉しくないのー？」

ほのか「挨拶が適當ですよ？」

そう言いながらうつぶせに寝転がっているオレの上に乗っかってくる。

少女のまだ発展途上ながらもやわらかい太ももの感触におっおう！と内心反応してしまうがおくびにも出さず「重いぞー」とだけ言う2人が

なぎさ「何をあ、誰が重かった？」

ほのか「女の子に向かって重いだなんて失礼です」

少し頭にきたのか馬乗りになりながらなぎさは頭を、ほのかは腰の辺りをポコポコと叩き始めた。

痛いというよりはくすぐったいといった強さだが2人の様子からいちゃいちゃしたいんだろうなあというのが感じ取れたので漫画を読みながらも「やめろよー」と口だけの抵抗を試みせた。

2人も楽しくなってきたのかポコポコ叩いているのがいつの間にか肩や腰をもんだり叩いたりマツサージに変わっていた。

実際肩も腰も結構疲れが溜まっていたのできこちないながらも一生懸命なマツサージが心地よく感じる

有里「ああゝ気持ちいいかも・・・もちよい左。」

なぎさ「有里さん結構こってるね、うりうり〜」

ほか「もうちょっと強いほうがいいですか？」

2人のマッサージにも熱が入り始める。強くしたり弱くしたり、もんだり叩いたり押したりさすったり。

心地よい痛さに瞼が重みを増し時折かけられる声も遠く聞こえている。

漫画がトサツと音を立て落ちた。と同時にオレも眠りへと落ちていた。

時間にして10分ほど意識を失っていただろう。HARMの扉が開き取り付けられた鈴が小さく鳴り響くのを聞いて目を覚ました。若干重たい頭を動かし入り口のほうを向くとそこには4人の少女がいた。

咲、舞、そして連れてきたのであろう夢原希、そしてその友人である夏川りんだ。

咲「ちはー」

舞「こんにちはー」

希「あう・・あうあう。」

りん「なに緊張してんの希。」

希「いやだってHARMの中だよ！競争率激高のっ！」

なにやら玄関近くで話しているがいかんせん眠たかったので手をひらひら振るだけで挨拶とした。

途端に先ほどまで優しくかったマッサージが強さを増した。徐々に痛

みが増してくる。

有里「なんか痛いんですけどー……。」

当然返事はない。その代わりにより一層肩と腰にかかる圧力は強みを増していく。

筋肉にぎりぎりとプレッシャーがかけられていく。

有里「ごめんなさい。よく解からないけどごめんなさい。痛いです」

もうすでに眠気からは覚醒している。これだけのストレスを体にかけられて眠っていられるのならそれはもはや病気の類だろう。

客も来たことだし覚醒したものの未だに少し鈍る頭をかきながら起き上がる。

上に乗っていたなぎさとはのがうわーとかきやわーとか可愛らしい声をあげてひっくり返っていた。

有里「いらっしやいませー何にしますか」

それをさておいてお客様に挨拶をする。自分で言うのもなんだがかなりやる気のない挨拶だったろう。

咲「明らかに寝起きの声だね」

舞「明らかに寝起きだもんね」

希「そんな・・・有里さんのかつこよくてクールなイメージが・・・」

りん「確かにちょっとだらしない・・・けどまあこれはこれで・・・」

希「ちよつとりんちゃんっ、さっきまで有里さんはないなあとか言
ってじゃないかぁー！」

りん「別ににも言っていないでしょうが！」

何やら楽しそうだ。女の子の会話ってというのはどうしてこんなに楽し
そうなのか。

男が笑いながら話しているとあんなにバカっぽく見えるのに、女の子
が笑いながら話していると可愛らしく見えるのか。

4人が席に座ったのでオレもカウンターの中へと入る。なぎさとほ
のかはソファでごろごろしているようだ。

有里「今日は珍しい組み合わせですが何用で？」

舞「有里さんが希さんに用があるって言ったんじゃないですか。」

有里「あー？そだっけー？」

咲「久々の萎え有里さんだ。」

希「萎え有里さんて？」

咲「時々なるんだけどいちお仕事はするけど随時眠たそーというか
半分寝てる状態の有里さんを萎え有里さんって読んでるの。」

希「有里さんのキリッとした笑顔のイメージがあああああ」

りん「へえー・・・そうなんだ。」

希「りんちゃんちょっとニヤついてるぞー！」

りん「ち・・・ちがつ・・・！バカ言わないの希い！」

咲「ほら有里さんこれ・・・。」

希とりんがいちゃいちゃしだしたのを横目に咲がポケットからジュエルを取り出しカウンターに置いた。

オレはそれを今もいちゃいちゃ口喧嘩している希の前にコトンと置いた。

ジュエルは徐々に染まり赤色の光を小さく放ちだした。

希「？・・・なにこれ？」

りん「綺麗な宝石・・・。」

わいわい喋っていた2人も興味を示したのかジュエルを覗き込むようにしている。

有里「希ちゃんは巻き込まれやすそうな顔してるね、これを大事に持つてな。きつといいことあるよ」

希「まき・・・？よくわかんないけど持つとくー。」

りん「よく解かんないで受け取らないの。」

咲「有里さんケーキ！」

舞「じゃあ私モンブランがいいです。」

有里「太るから駄目です。」

咲「ぎあー女の子に太るとか言わないで〜」

有里「そんなもんよりレトロゲーやろうぜ!」

舞「ちよつと目が覚めてきました?」

喋っているうちに頭も冴えてきた。これだけの人がいるならやることは決まっている。

カウンターから出るとなぎさとほのかが転がっているソファ近くに置いてあるテレビ棚からゲーム機を引っ張り出す。

何事?といったようになぎさとほのかが覗き込んできた。

オレはそのゲーム機を高々く掲げこう言い放つ

有里「ボン。ーマン5やろうぜ!」

・・・。

・・・。

咲「ちよつと有里さんそれあたしのハンドオー!」

有里「アイテムに名前書いておかない方が悪いです」

舞「ちよつとほのかさんおかしくないっ?ルーイに乗ってる有里さんを狙うべきじゃ・・・。」

ほのか「勝負はいつも非情なのよっ!ってちよつとなぎさあ〜」

なぎさ「へっへっん後ろがから空きよ！」

ソファは広げるとベットになるようなタイプのものだったので、広げてその上に5人で横になっている。

いくら神ゲーといえども一度にプレイできるのは5人までなので2人あふれてしまう。りんは皆が楽しんでいるのを見ているといってコーヒーを飲みながら少し離れた所で椅子に座っている。希は早く交代交代！といった様子でソファの横に座り食い入るように画面を見ていた。

有里「勝利！オレの鉄仮面ボンバーに死角はないのだった。」

なぎさ「有里さん人のアイテムハンドで奪いすぎい」

舞「パンチもキックも盗られちゃった・・・。」

有里「スピード3個とハンドがあればオレに敵は無い。溜めボムしてないだけ優しいと思えよー」

希「わ・・・わわ・・・わたしもやりたい！」

有里「じゃあオレと交代ね、ここおいで。」

少し遠慮がちに手を上げた希を自分のいた場所へと呼ぶ。

若干焦ったように近寄ってくる希を自分が寝転がっていたところへ寝かせる。

寝かせた希の腰あたりにまたがりそのまま馬乗りに座った。もちろん足に力を入れほとんど腰を浮かせているようなもので重くはない・・・はず。

有里「行けい希よ！お前に鉄仮面を使う権利をやるう！」

希「ちょ・・・有里さ・・・あうあう。」

なぎさ「どうやらこれは負けられない戦いだね、ほのか」

ほのか「そうね、私のボ。バーワンが狂犬へと変わるときが来たかしら、なぎさ。」

咲「海賊。ンバーの隠された力こそ最強だよね！舞！」

舞「そうだね、私は普通のボンバー。ンだけど・・・。」

仲良きことは美しきかな。どんな人でも。ンバーマンをすれば仲良くなるのさ。

さつきから下で希がモジモジしているのが少し気になるが楽しそうだったので安心した。

最後はりんもちよつとやってみようかなと言い出しみんな一緒になつて遊ぶことができた。

次は64でゴー。デンアイでもやろうかななんて思いながら少女達の笑顔を眺めていた。

・・・。

・・・。

どうもつらです。

今日も有里さんを観察していました。

お腹がすいてるみたいですね。今日の有里さんのおやつは食パンですか、メモメモ。

あつても塗るものが無いみたいです。これはなんと偶然なっ今日の給食で出たよくわかんないけどプチッってやるとジャムとマーガリン的なものがでるやつを持っていたのでした！これも運命ということでしょうか。

窓を開けてジャムを置き窓をコンツと1度叩いてからすぐに距離をとります。有里さんに見つかっては観察日記になりませんかね。どうやらお腹も満たされたようです。おっと誰か来たみたいですね。今日はここまでにしめしょうか。

――開始早々にみそぼんになるもの立派な戦略――

第19話 【鬼畜純愛ルート】（前書き）

もっこれ発禁だよ・・・性癖が止まらない。

第19話 【鬼畜純愛ルート】

さらに次の日。ボ。バーマンで賑わっていたHARMは本来の静けさを取り戻していた

くるみ「いい加減髪の毛触るのやめなさいよ!!」

訳ではなかった・・・。

有里「いいじゃ〜ん・・・くるみは口悪いけど髪の毛はいいな。」

くるみ「やめ・・・ちよつと髪留め取らないでよ」

場所はいつもどおり喫茶HARM。店内の椅子にくるみが座り、その後ろに立っている有里がくるみの髪の毛をわしゃわしゃと触っている。

時刻は2時30分頃、学院ではまだ授業が行われている時間帯だ。なので店に客の姿はなく二人は暇な時間を持て余していた。

その結果有里の興味は目の前でフラフラ揺れていたくるみの髪の毛に移ったのだった。

くるみ「っていつかあんた学院は？行きなさいよ」

有里「サボりに決まってるんだろ！解かりきったこと聞くな！」

基本的にこの子は朝起きた時のテンションで登校を決める。

なので5日通うこともあれば2週間サボり倒す時もある。今日はサボり3日目だ。

くるみ「暇だからってなんで私の髪の毛触ってるのよ……。」

有里「最近お前さん朝早くに出かけちゃうからスキンシップ取れてなかったでしょ。」

最近くるみは朝になると必ずどこかへ出掛けている。有里は1度不思議に思い訪ねてみたが返答に困っていた様子だったのでそれ以上は聞いていない。

それ以外にも配達や買出しを自分から率先してやろうとする。そのあからさまなおかしい様子が、有里は気になっていた。

しかし今日は珍しくくるみも出掛けなかったので一日中一緒だった。

一緒に朝ごはんを食べ、一緒に働き、一緒に昼ごはんを食べ、一緒に千。女優のDVDを見て、一緒におやつを食べ、髪の毛をいじくっている。

以前はすぐに蹴ったり殴ったり無視したりしたくるみも、暗黒界から帰ってきてからは妙におとなしいというか優しいというか暴力を振られることは無くなった。

有里「いいな。たまには違う髪形にしたりしないの？」

そう言いながら有里は手ぐしでくるみの髪を梳いている。

くるみ「髪の毛なんて邪魔にならなければなんだっていいじゃない。」

口調はつんけんとしているが有里が髪を触っているのを止めるつもりはないらしく、むしろ気持ちよさそうな顔をしている。

時折「ん……。」「となんと色っぽい声を出したり、肩がピクンツと動いたりしている。

はたから見たらいちやいちゃしているバカップルのような桃色空間を展開していたところへ、例のごとく来客が訪れた。

こまち「こんにちは」

かれん「ちよつと有里、またサボってるでしょ。」

くるみの数少ない友人であるこまちとかれんの2人だ。

授業が終わった時間なのだろう、外も若干先ほどよりも下校する生徒達の声で賑わっている。

かれん「それで・・・有里は授業をサボってなにをしてるのかしら？」

不機嫌を隠そうともせずにかれんは有里へと詰め寄った。

すぐ前まで来るとかれんは真っ直ぐ上を向き、有里の目を睨み付けた。

睨み合う・・・見る・・・見詰め合う・・・。

気付けばかれんは有里に抱きついていていた。

なんだこれ？と思いながらも有里もかれんを抱きしめ返す。

こまち「なにこれ・・・。」

その一部始終を見ていたこまちから言葉とともにため息がこぼれた。後輩から絶大な人気を誇る優等生美少女生徒会長かれん様も、慕う人の前だとおかしくなってしまうものらしい。

ひとしきり抱きしめかれんがやつと満足し、体を離す。
そこで機嫌が悪くなったのがくるみである。

くるみ（さつきまで私の髪の毛触ってたくせに！）

背を向けてはいるが後姿からでもむくれているのが解かる。
自分がなぜイライラするかも解からない。それが余計にくるみを苛
立たせていた。

そんなくるみの頭に手が置かれる。

くるみ「？」

くるみが振り返るとそこには兄のように、父のように優しく笑う有
里がいた。

ああ、しまった。くるみは思う。

悔しい。次の感情が駆け足で心を巡った。

見とれてしまった。カッコいいと思ってしまった。頭に置かれた温
もりに心が安心してしまった。
悔しい。

このお店で住むようになってからいつも思っていた。

この人は何か変だ。確かに言動や行動が突拍子もなかったり一貫し
ていないというもある。

ただ時折、ほんのかすかに、闇の力が滲み出していた。

今だからそう解かるのであって、そうと知らなかった私はあいつの
顔を見るたびにイラついていた。

でも・・・こまちとかれんに付いていった暗黒界で見たあいつは、ほんのちよっぴり、一般的な意味で、かっこよかった。

呪いの力に抗っていたと知った時は、あいつにイラついていた自分を少し反省した。

思えばあの時からかもしれない。

だから今日、あいつが学院を休んだのが嬉しかった。一緒にご飯を食べて、一緒に同じ映画を見て、髪をすいてもらって。

だからさっき、あいつがかれんと抱き合ってるのを見てむかついた。

思えばその時からかもしれない。

でも私は、何か負けた気がするので、この気持ちはもう少しだけ気付かないまま今の時間を続けていこうと思った。

有里によつてすっかり機嫌をよくした2人はカウンター席に隣同士に座ってコーヒーを飲んでいた。その横ではこまちが座り特別メニューの緑茶をすすっている。

有里「そうだ、オレちよつとタコカフェ行ってくるわ。」

思い出したかのようにそう言った有里が3人の返答を聞かずしてHARMの玄関から出て行く。

「3人で店番頼むな」と閉じていく扉の隙間から投げかけられる

言葉を、3人はまたか。といった様子で聞いていた。

.....

.....

途中コンビにで買ったペットボトルのお茶をブラブラさせながら、ふらふらと道を歩いている。

学院からタコカフェまでは歩いて40分、走って20分、車で10分、ハイハイで1時間20分かかる。なぜハイハイでの移動時間が分かるのかは瑣末な問題だ。

時々タコカフェのたこ焼きが食べなくなるので月1で通っている。

「いらっしゃーい、久しぶりだねえー！」

タコカフェが見えてくると大きな声が聞こえてきた。

この大きな声の出所は、タコカフェ店主であるあかねさん（年齢不詳、教えてくれない、聞いてない）だ。

学院の卒業生でありなさ、ほのかと仲が良い。

知り合ったのもそのツテからだ。

有里「遠くから呼ばないでくださいよ、まだいらっしゃってないよ。久しぶりですね。」

あかね「それでねーお手伝いの子がはいったんだー！」

時々話を聞かない、突発的な話の展開をするので会話が難しかったりする。

有里「1人のほうが気が楽とか言ってますでしたっけ？」

あかね「ま〜ね〜色々あって雇うことにしたんだよ。ひかり〜ひかり〜！」

ひかり「お客様ですか？・・・っ!？」

店の中から女の子が出てくる。金髪が目にもぶしい可愛い女の子だ。年のころはおおまかに見て小6〜中1ぐらいといった所だろうか。

その女の子はオレの顔を見るや否や驚いた顔をし、あかねさんにはれない程度に睨み付けてきている。

有里「どうも・・・あかねさんとは仲良くしてもらっている有里と申します・・・。」

何故初対面なのにこんなにも好感度がマイナスしてしまっているのか解からないので恐る恐るながら握手のため右手を差し出す。

ひかり「九条ひかりです・・・よろしくお願いします。」

嫌そうな顔をしながらしぶしぶと握手を交わす。なんだこれ？

嫌われている理由は解からないが触らぬ神に祟り無しというのでさっさとたこ焼きを買って帰ろうとした時

ひかり「あかねさん、ちょっと有里さんとお話があるのですが、いいですか？」

とさらに訳のわからない展開になってしまっている。なんで？オレ

のこと嫌いじゃないの？

あかね「あらまーさすが有里はモテモテね。いいよっ今はお客さんも少ない時間だしね。」

ありがとうございます。と小さくお礼を言ったひかりにオレは手を掴まれ引つ張られるようにタコカフェを後にした・・・たこ焼きは？

なすがまま引つ張られタコカフェのすぐ近くにある林の中へと連れてこられた。

大きな木があり少し開けた場所まで来るとやっとひかりは手を離しオレと距離を取った。その顔には嫌悪が滲み出ている。

ひかり「私を覚えていますか？」

そうひかりは言った。

一週間前の朝食は忘れても女の子との出会いは忘れないようにしているオレだ。必死で脳内メモリに検索をかけるが全くひっかからない。

オレが頭を捻っている様子をみてさらに不機嫌になったひかりを、真っ白な光が包み込んだ。

「これで解かりますか？」

ひかりがはじけるように霧散し髪型も、洋装も変わったひかりが姿を現した

有里「なにそれ・・・プリキュア？」

光「似て非なるものと考えていただいて構いません。シャイニールミナスと申します。」

髪の毛がボリウムを増し二つ結いになっている。服も白とピンクを基調としたデザインになりなんか口・・・子ども・・・可愛いデザインだ。

ん・・・？黄色い髪の二つ結い？

有里「もしかして・・・精霊界にいたクイーン・・・？」

光「ようやく思い出したようですね、あなたが奪ったジュエルを返していただきます。」

なるほどそうか・・・髪型も雰囲気も違うから解からなかった・・・。前あったときより聖なる力？というか何と言うか大分弱まっているみたいだな。

この世界に来たせいかな・・・ジュエルが無くなったせいかな・・・。

なんか今日は解からないことだらけだ。なんかイライラしてきたぞ！定期的かつ突発的に入るスイッチが入った。これが入ると鬼畜純愛ルートまっしぐらになってしまふ。なってしまふのさ。どうにでもなってしまえ！

オレはゆっくりとルミナスに近づいていく。自分で言うのもなんだが結構妖しい雰囲気を肩に背負っている気がする。

光「ち・・・近づかないでください！」

その雰囲気気付いたのかルミナスがオレが近づいたのと同じぐらい後ずさる。

ルミナスは背中にぶつかる感触を感じ驚いたように後ろを確認した。気付かぬ内に大木の所まで後ずさりしていたのだ。

その隙をつき一瞬で間合いを詰める。

寸刻遅くそれに気付いたルミナスが手を振り上げようとするがその手を掴み関節を極め、足の間に自分の足を入れ込み動きを完全に封じた。

光「くっ・・・」

一瞬で拘束されてしまったルミナスも必死で抵抗するが変身しているとはいえ女の子、極められた関節では力も出ず無駄な抵抗に終わっていた。

やがて諦めたのかこちらを睨み付けてくる。その様子がひどくオレのS心を刺激した。

オレはキスするかというくらい顔を近づける。ルミナスは当然嫌そうに顔を背けた。

駄菓子歌詞、だがしかしルミナスの両腕を片手で拘束しオレは右手を自由にするとルミナスの顎を掴み無理矢理こちらを向けさせた。

ルミナスの大きな瞳にオレの瞳が映っている。その目には嫌悪と恐怖が混じっている。

オレは自分の瞳に力を込め、ルミナスの瞳を覗き込む。

すると嫌悪と恐怖の中に若干の安堵の色が滲みはじめ。徐々にそれは広がりやがてその瞳を完全に濁った色にした。すでに体からは力が抜けていて抵抗はしていない。

オレは唐突に、半開きになっていたルミナスの口へ一指し指を突っ

込んだ。

光「うむっ・・・！ひゃ・・・ひゃにお・・・」

瞳が少し色合いを取り戻した。抵抗の色が見え始める。

有里「味わってごらん。」

耳に口を近づけそう囁く。しかし当然のようにルミナスは舌で指を追いつきそうとしていた。

オレはそれに反し舌の奥のほうを少し触れる。

光「んっ・・・えあっ・・・くう・・・。」

ルミナスが苦しそうにえづく。

有里「少し指をひねるだけでお前を殺せる。」

そう短く伝える。舌での抵抗がやんだ。

有里「味わって」

またそう伝えるとおずおずと舌で指を転がし始めた。

光「ふんっ・・・ちゅ・・・はむ・・・。」

初めは舌で撫でているだけだったのが、少しずつ熱が入り始め舌をからめてきている。

本人は気付いていないだろうがルミナスの表情は頬が上気し瞳は潤みきっている。

有里「ご主人様って呼んでごらん、脅されて仕方なく言われるだけだ。君の意思じゃないから君の尊厳は傷つかない。」

光「ん・・・あむ・・・ごひゅひんさま・・・。」

脅されて仕方なく、というのが効いたのか対した抵抗も見せず言われたとおりご主人様と呼んだ。

有里「おいしい？」

光「おいひ・・・いひえす・・・。」

すでにルミナスの腕は開放されている。が、力なくだらりとだれ下がっている。

足にも力が入っていないのかオレの足に座るような形になってしまっている。この辺でいいかな。

オレは勢いよくルミナスの口から指を引き抜いた。

光「ん・・・あう・・・。」

と小さくルミナスは声をあげた。恐らく無意識であろう唾液で光っているオレの指を目で追っている。

オレはその指を芝居じみたようにゆっくりと口に含んだ。

そしてポケットからハンカチを取り出し指をぬぐうとそれをルミナスの目の前に捨てた。

ルミナスは声も上げずうつろな様子のままハンカチをじっと見つめている。

オレはそれを見て嬉しくなりながらその場所を後にした。

たこ焼きは買って帰ったが、帰りが遅い！と怒った3人に奪われ全て食べられてしまった。

―なにこれR15？R18？性癖の隠し方が解からない―

第20話 【調子にのった変態】（前書き）

もうR15です。言い訳できませぬ

私このたび頂いた感想に返信という形でお返事を書けることをやつと理解しました。

決して読んでいないわけではなくむしろ執筆の原動力とさせていただいております。

これからも感想、ご要望のシチュエーション、誤字脱字報告などよろしく願いたいします。

P・S お察しのとおり作者は変態です

第20話 【調子にのった変態】

鬼畜純愛ルートに入ってから2日後。今になって反省しています。ちよつとイライラしてしまっただけで女の子の口に指を突っ込むなんて！最低！

一昨日に続いて昨日も同じ事をしてしまいました。てへへ。

2回目ともなると警戒も大したものでしたが2回目ともなると1度流されてしまうとすぐに蕩けていました。てへへ。

今日は反省するために自主自宅謹慎をすることにしました。学院には行かず反省していることにします。

と、くるみの髪の毛をいじりサイドポニーにしてほのぼのしながら考えていた。

くるみは最早惚けた顔を隠そうともししていない。むしろ頭を撫でる有里の手に頭を擦りつけようとすらしている。

その姿は飼い主に甘える犬のようだった。

客がいるときやあいつらがいるときは相変わらずツンツンとかぶつきらばうな態度になりがちだが、2人きりでお店に居るときは甘え気味になる。

かれんが愛玩犬型甘えん坊ならくるみは番犬型甘えん坊といったところだろうか。

時刻は9時を回ったあたりだ。謹慎中なので暇を持て余している。それゆえにくるみの髪で遊んでいたのだが、

くるみ「あ、私ちよつと出掛ける用事があつたんだ。」

と、いきなり思い立ったように立ち上がるくるみ。あまりにいきなりだったので少しびっくりしてたたらを踏んでしまう。

立ち上がったくるみはその勢いのまま扉をあけて出て行ってしまった。1人取り残された店内にベルの音が物悲しく響き渡った。

これが普段ならばまあいいかと部屋のDVDBOX棚から自分の気分にあった作品を選んでいるだろうが今日は違った。

それに名前をつけるならば”気まぐれ”というのが一番ぴったり合うだろう。

こまちから借りたミステリー物の小説を読んでしまったのも要因のひとつだろう。

有里「尾行するぞ！」

FL。Lを見ればベスパに乗りたがったりスター。オーズを見ればジエダイの修行をしようとしたりするほど影響されやすい有里だ。

問題は思い立ったらすぐに行動に移してしまうその行動力だと気付かせてくれる人がいないことだった。

.....

.....

ひかり「それで、様子は？」

場所は変わりここはタコカフェがある公園。子ども達の笑い声とは少し離れている林の中。

そこにはルミナスこと九条ひかりとミルキーローズこと美々野くるみがいた。

ひかりは正座を、くるみは跪いている。

くるみ「ジュエルはプリキュアである少女達に預けたままです。ひとつはその素養があるという少女が持っています。」

ひかり「あの男自体にはジュエルを使って何かをしようということは無さそうということですか？」

くるみが跪いたまま俯き報告をする。それを聞いたひかりは何かを思い出したのか顔をしかめていた。

その様子にくるみは気付くが口を挟むことはやめた。と、同時に頭に有里の顔が浮かぶ。

くるみ「私が思うに、あの男は悪意があってジュエルを奪ったわけではないと思います。」

ひかり「他の理由があると・・・？」

くるみ「むしろ何も考えていないというか・・・少なくとも悪い者ではありません。」

ひかり「あんなことする人がいい人はずっ！・・・やけに肩を持つんですねくるみ。」

ひかりが徐々に落ち着きをなくしていく。声を荒げ、表情も怒りが確認できる。

この2日間でひかりがされたことが解かるならその怒りももつともだと言えるのだが、そんなことなど露も知らないくるみには到底解かりえるはずもない。

くるみ「いえその・・・。」

ひかり「ごめんなさい、くるみには引き続きあの人の監視をお願いします。というかお店から出さないでください。」

くるみ「へ？・・・解かりました。」

話が終わったことを知らせるようにひかりが立ち上がるとそれに続きくるみもゆっくりと立ち上がるうとする。

その時、ガサツ！という音が2人から右手の方で小さく聞こえる。

ひかり「！？」

くるみ「っ・・・私が見てきます！」

咄嗟にひかりが身構え、くるみが先手必勝と言わんばかりに音がした方向へと向かっていった。

誰かに聞かれていた・・・？ということとは私がこちらに来ていることが敵にばれている・・・？

とそこまで思考したひかりの体が、いきなり後ろから羽交い絞めにされる。

まずいつ！くるみをつ！と思うが口を手で塞がれうめき声しか上げられない。

後ろにいるのは一体誰なんだ、とひかりが頭で考えようとした時、鼻腔を知っている香りが通り抜けていく。

一瞬にして頭の中に霞がかかる。

「口に入れてごらん」

耳元でそう囁かれる。言われるがまま口に当てられていた手の人差し指を口に含む。

懐かしい味がする。耳が熱くなり沸騰した血が体中を駆け巡るのがわかった。

体の力が抜ける。支えられながら地面へとへたれ込んだ。その間も口がいやしく、指が離れるのを拒んでいた。

くるみ「なに・・・これ・・・どういうこと!？」

戻ってきたのであろうくるみが声を荒げていた。

・・・。

・・・。

とりあえず店にあったダンボールに入りくるみの後をつける。

無線も上司もいないので1人寂しい尾行作戦だがなんか楽しくなってきたので続けている。

向かっている方向からタコカフェが目的地だと解かる。ダンボールは邪魔臭いしさつき水たまりに突っ込んでしまつてぐしゃぐしゃになつてしまったので捨ててしまった。

いまは普通に歩いている。案外堂々と歩いていれば見つからないもんだ。

タコカフェのある公園につくとオレが思っていた方向とは違つほうへくるみは歩き始める。

林のほうへ向かっているのを見て先回りを試みる。

木の上を飛び移り忍者気分を味わいながら移動すると突っ立ってい

るひかりを見つけた。

おや？と思い監視しているとくるみがやってきた。
それでやつと得心がいく。

くるみがよく出掛けるのはひかりへの提示連絡のためだったのか。
だろうな～と思っていたがくるみはオレの監視役か。

自分が暗黒界にいたことは事実であるし人様に顔向けできるかできないか微妙なこともしたことがある。

ジュエルを奪ったのも間違いないが、監視されていたというのはいい気持ちはしない。

いやまあ100？逆恨みなんだけど・・・スイッチはいりました
！。

ちょうど話が終わったのだろう、2人とも立ち上がり解散ムードだ。
オレは咄嗟に横にある木の枝を折り2人から少し離れた草むらへと
投げた。

その音に反応しくるみがいなくなる。と同時に木の上から跳びおり
音もなくひかりに近づき体を羽交い絞めにした。

・・・Now C y o k y o i n g ・・・

・・・

音のした場所を探したが結果として誰もいなかった。そこには草む
らに刺さった不自然な木の枝があっただけだった。

妙な胸騒ぎを覚えルミナス様のところへと戻ると、信じられない状
況へと一変していた。

ルミナス様が有里に後ろから抱きしめられながら口に指を入れられている光景だった。

頭の中を真っ白な光がはじけたような感覚に襲われる。

それから一步遅れて思考が追い着いて来る。なぜここにあいつが？なぜルミナス様がこんなことに？なぜ嬉しそうな顔をしているの？あいつはやっぱり敵だったの？

追いついてきた思考は濁流となって頭の中をかき乱した。

くるみは目の前に広がっている非現実的な現実を前に感情は昂ぶろうとしているのが解かる。それを声に乗せて吐き出してやろうとした。

有里「くるみ、こつちへおいで。」

だがそれは有里によって挫かれることになる。

そう、あの目だ。数日前魅入られたあの時と同じ目をしながら有里は言葉を発した。

その言葉に頭は反応した。ふざけるな、ルミナス様を離しなさい！と・・・。

しかしそれが声として発せられることはなかった。

くるみの足がゆっくりと前に進みだす。だが自分が前に進んでいることをくるみは知覚できていなかった。

1歩歩くごとに頭が重くなる。1歩歩くごとに心が騒ぐ。1歩歩くごとに頬が上気する。1歩歩くごとに思考が停止する。

気付けばくるみは、あぐらをかいている有里の左足の上に座り有里

に抱きしめられていた。

くるみ「ん・・・あふう・・・。」

抱きしめられたくるみは熱いと息を零す。その表情は普段のように強気なものではなく陶酔し発情しきったような顔になっている。

有里はそれに満足すると今度はひかりを見る。くるみを見ていた間もずっと指を舐めていたようだ。口の端から唾液が零れている。ひかりも同じように目は潤みきっており両腕で有里の手を掴み一心不乱に指を味わっている。

有里「お前のご主人様の名前を言ってごらん。」

そうひかりにささやきかけた。言葉に反応したのか肩がピクンッと跳ねるように動く。

ひかり「あ・・・ごひゅじんひやまは・・・ゆいひやまです・・・。」

指をくわえたまま喋ったのでうまく言えていないが上目遣いで有里の目を見ながら言ったのが気に入ったのだろう、有里は満足気な顔だ。

有里「お前の主だ誰だ？」

同じようにくるみにも問いかける。胸に顔を擦り付けていたくるみも、話しかけられ有里の方を向く。困ったように顔を俯けたり有里の服を嚙んで引っ張ったりと忙しい。

やがて小さく遠慮がちに「クイーン様です。」と答えた。

くるみは怒られると思い体を丸め縮こまる。有里はその頭にポンと手を置いた。

有里自身に別に怒りは無い、そう言うであろうと思つての質問だったのだ。

有里はこう続ける。

有里「お前の主のご主人様はオレだ。つまりお前のご主人様もオレつてことだろ。」

その言葉にくるみは弾かれたように顔をあげる。

そこには有里の顔があつた。優しい笑顔を浮かべた有里の顔が。

くるみ「ああ・・・ご主人様！」

それが決定打となつたのか、感極まつたようにくるみは有里の体に抱きついた。

というよりしがみ付いている様な感じだった。

ピンク色の空気がその場を包み込んでいた。

が、

「貴様！クイーン様から離れろ！」

林を駆け抜けて現れた青年がそう叫ぶ。ピンク色の空気が一瞬で取り払われピンと張り詰められたものに変わる。

青年は有里と目が合った瞬間表情に強い怒りを表し、襲い掛かって

きた。

有里も楽しそうに、はっと笑うと膝の上に乗せていた2人を降ろしひかりの口から指を引っこ抜いた。

恍惚とした顔でひかりは自分から離れていく指を見つめていた。

そしてくるみも、離れていく有里を愛用のぬいぐるみを取られた少女のような顔で見ている。

「お前はっ、ジュエルを奪った奴と同じヤツだな！」

有里「さあどうかな、自分の記憶に聞いてみな！」

青年が巧みなフットワークから右フックを繰り出す。が余裕があるのか微笑を浮かべたままの有里に払われ逆にその腕を掴まれ背負い投げの要領で投げ飛ばされてしまう。

空中で器用に回転し体勢を整え足から着地するがすでに有里が間合いを詰めている。

しまった！と思う間もなく渾身の一撃をみぞおちに貰い、意識を失ったままさらに吹き飛ばされ木々を何本がへし折った所でやっと地面に落ちた。

何故か青年を殴り飛ばしたらすっきりしたので、今も惚けている2人を一瞥した後晴れ晴れとした笑顔でその場を後にしたのだった。

・・・。

・・・。

反省中・・・。

あれからタコカフェでたこ焼きを買いそれを食べながら帰ってきた。

HARMにつくころにはたこ焼きも空になっている。

空になった容器を捨てソファに体を落ち着ける。
それと一緒に頭も落ち着いてきた。

そこでやつと気付く。

またやってしまった・・・そりゃ昨日もしたけど・・・。

女性の口に指を突っ込むなんて最低だよな！

ソファに座りコーヒーを飲みながらこまちが置いていった豆大福を
頬張りテレビを見つつ反省しているとガタンツ！と大きな音を立て
て扉が開かれる。

普段はチリンと耳に心地良い音を奏でる鈴がガチャガチャと荒々し
い音をたてる。

嫌な予感が背筋を走る。恐る恐るそちらを向いたが、視界に入っ
ていたのはくるみの履いている靴の裏だった・・・。

・・・。

・・・。

くるみ「このバカ！変態！屑！恥さらし！死ね！くたばれ！」

私、自分のお店である喫茶HARM店内にて正座させられておりま
す。体中マウントをとったくるみにボコボコにされて痛いんです。
鼻血が止まらなかったのでティッシュを丸めて突っ込んであるので
マヌケ度アップです。

くるみ「あんたのせいでクイーン様がおかしくなっちゃったじゃない！」

そついきり立っているくるみの後ろではひかりがまだ恍惚とした表情でボーッと立っている。

有里と目が合った際にニヘラと顔をゆがませるのが可愛らしいような薄気味悪いような・・・。

試しに手を振って見ると花の咲いた笑顔で答えてくれた。満足だ。

くるみの魂をこめたグーパンチを顔面に貰ったのでそこから先の記憶は無い。

―度が過ぎた変態行為には、報いが訪れる―

第21話 【赤色の宝石】

担任教師が教室を出て行き、私のクラスは放課後を迎えた。部活へ行く人、帰宅する人、談笑に花を咲かせている人、色んな人がいる。

かくいう私も今日は部活が無いので舞とくだらない話をして笑っていた。

教室に残っている生徒の姿がまだらになってきた頃、

希「あ、良かったまだいたー！咲！舞！」

放課後だというのに元気がありあまっているという様子で教室に入ってくる女子生徒、夢原希だ。

例の一件以来仲良くなったのでよく一緒にHARMに行ったり学校帰りにブラブラしたりしている。

りん「あんたはなんでそうすぐにあたしを置いてくわけ？」

少し遅れてりんが教室に歩きながら入ってくる。

元気な希とは違いこちらは疲れている様子だ。それだけで希のお守りをしているのだとわかる。

2人は席に座っている咲、舞のところまでやってくると

希「HARMいこっ！」

教室にいる生徒全員に言っているのではないかという大声を上げる。

咲と舞は相変わらず元気だなくと2人目を合わせ、特に用事もないし行こうかとアイコンタクトを交わし立ち上がる。満面の笑みを浮かべているその後ろので肩をすくめ苦笑しているりんを見つけて2人もくすりと苦笑するのだった。

・・・。

・・・。

掴みなれたドアノブを軽く持ち少し重たい扉をいつものように開ける。

始めてきた時はここを開けるだけでも緊張して30分はうろうろしていたのに、今じゃ毎日のように来てるなんて・・・。

なんて考えていたら舞に「どしたの？」って言われちゃった。なんでもないよって焦りながら言ってちよっぴり赤くなった頬を隠すためHARMの中へと入る。

・・・。

気だるげなようにいらっしゃいと出迎えてくれるはずの店主は、ボロ切れのようになった姿でソファの上に横たわっていた。

咲「ゆ・・・ゆゆ有里さん!？」

舞「ちよつと咲どうし・・・なにっ!？」

希「どしたの・・・ほげー!」

りん「中学生がほげーって・・・。」

咲の驚いた声に他の3人もHARMへと入ってきて目の当たりにする惨状に各々声をあげる。

咲、舞、希がすぐさま有里に近寄ってその体を抱き起こすと、

有里「調子にのりました・・・すみませんもうしません・・・殴らないで・・・マジ死ぬ・・・。」

と虚ろな目をしてぶつぶつと呟いている。

3人は有里の明らかに異常な状態に戦々恐々しながらも傷口を手当したり塗らしたタオルを額にいたりと介抱をはじめた。

遠くからそれを眺めていたりんも、ため息ひとつつき3人の元へと歩み寄っていった。

・・・。

・・・。

額の冷たい感触に目を覚ます。

小さく目を開けるとするどい光が視界を刺す。眩しさにまばたきを数回こなしつつ目を凝らす。

するとちょうどこちらを見ていた舞を目が合った。

舞「起きました？」

鈴の鳴るような可愛らしい声でそう聞かれる。鈍痛の残る体を起こすと舞がすぐに近寄ってきて背中 hands を添えてくれる。こっという優しさに男は弱い。

チラと時計を見やるとオレがくるみの回し蹴りを首に貰ってから4

0分が経っている。最後の記憶はひかりの手を掴みHARMから出て行くくみの背中だった。

ってかオレこういうシチュ多いな。どれだけ気絶してるんだ。

ボーンとする頭を少し揺さぶり覚醒させる。

オレが起きたのに気付いたのだろっ咲が近づいてきてコーヒーを差し出してきた。

咲「勝手にいれちゃいました・・・ごめんなさい。」

うむ、ポイント高し。女子中学生が恥じらいながら渡してくれる飲み物なら、泥水でも石鹸水でも読み干す所存であります。

少し熱いコーヒークール冷ましつつ飲むと、喉が潤い体があったまっていくなが解かる。

コーヒーを飲み干したので立ち上がりお礼の意を込めて咲と舞の頭を撫でる。

顔を見たわけではないが照れているのがわかった。

2人の頭をぼんぼんと叩きカウンターへと移動しカップを洗面台に置く。

そこで初めて客がもう2人いたことに気付いた。

希「大丈夫ですかー？」

りん「何したらそんなにボコボコにされるの・・・。」

心配そうにこちらを覗き込む希の横でりんが呆れ返したようにコーヒーをすすっている。

それを見た咲と舞も席に座った。

咲「それでどうしたの？青あざとかいっぱいあったけど・・・。」

4人が同じように思っていた疑問を代表する形で咲が口にする。

オレはどう答えたものかと頭をかいた。くるみに殴られたことを話せばなぜ殴られたかを話さなくてはならなくなるのは当然だ。

かと言って「調教しちゃいました」とは口が裂けても言えない・・・。

どうしよう・・・。

有里「えーっと・・・オレを殴ったのはくるみただけどくるみは色々あつて居なくて、タコカフェに泊まるってあかねさんからメールがあつたから多分そうで・・・。」

自分でもこんなにしどろもどろが似合うとは思わなかった。

希はなるほど。と言った顔をしているが他の3人はうそこけと言ったような表情だ。

りんなんか欠片も信じてないといった感じだ。

舞「・・・どうしてくるみさんが有里さんを殴ったんですか？」

ちくせう、言い訳が思いつかない・・・。どうしましょう。

・・・っ！この感じ、泉から誰か来たか？知っている・・・金ぴかか！？

これは、チャンスかもしれぬな！

有里「まあまあそんなことよりちよつと買い物頼みたいんだけどいいかな？」

咲（誤魔化した）

舞（誤魔化した）

りん（誤魔化した）

希「あついいですよー。りんちゃん、咲ちゃん、舞ちゃん行こう！」

咲（誤魔化された）

舞（誤魔化された）

りん（希・・・あんたいつか騙されるよ・・・）

3人は納得がいかないような顔をしていたが、既に出掛ける気満々で全員の鞆を持って足踏みしている希を見てしまつと腰を持ち上げるしかなかった。

オレは砂糖やら何やら急に必要では無い者のあつて困るものではないものを適当に見繕つてメモに書いておいて渡した。

4人が出て行くのを見てやつと一息をいれた。

とはいえやることも出来たので身支度を整えらるとお店の戸締りを確認する。裏口が開いていたのが気になったが閉め忘れることはよくあることなので深く考えるのをやめた。

戸締りを終えると閉店の看板を下げ、オレは4人を追いかけるため小走りで駆け出した。

・・・。

・・・。

咲「絶対有里さん何か隠してるよね。」

舞「そんな感じだったね、でも様子がおかしくなるのは時々あるから……。」

希「有里さんなんか変だったのー？気付かなかったよ。」

りん「あんたはもうちょっと疑うというか考えることをしなさい。」

希「ちよっりんちゃんひどーい。私だって色々考えてるもん。」

りん「へえーたとえば？」

希「……夕飯のこととか……。」

そんな会話と笑い声を響かせながら4人の少女は歩いていった。

出会ってまだ数週間だというのに4人はすっかり仲が良くなっていった。最近では一緒に昼をとることだってある。

咲の実家がパン屋と知ってから希がりんを連れて放課後よく遊びにいくのも仲良くなるのに手伝っていた。

4人は商店街への近道のため、公園へと入った。

希「ついでにタコカフェ寄ってこよう。」

りん「あんたお小遣いすつからかんで言ってたでしょ？言っとくけど奢らないよ。」

希「りんちゃんいけずう……。」

舞「お使いのお礼に有里さんに作ってもらうのは？」

咲「それいいよ舞！私ケーキにしよう。」

希「じゃあ私チョコパフェにしよう……。」

筋「それでは私はプロテインを頂こうかな……。」

少女達の前方から歩み寄ってくる男がそう言い放った。

まだ風が涼しい6月だというのに男は金色の上半身を露にしたまま歩いていた。その言動の異質さ、そうキントレスキーだ。

状況の異質さを感じ取った舞がいち早く動く。

舞「希さんりんさんは下がってどこかに隠れていてください。咲っ変身！」

咲「うん！行くよ舞！」

「デュアルスピリチュアルパワー！」

1歩前に出た2人が構えそう唱えると2色の光に包まれた。

状況に全くついていけない希はその光景をポカンと見ている。

りん「希！こっち！」

そんな希をりんが引つ張り下からせる。りんもまた状況を把握している訳じゃないが舞の様子からこの場を離れなければならないということだけは理解した。

いきなり引つ張られたたらを踏む希の手をなお引きつつ先ほどまで

歩いてきた道を引き返していた。

花「てやあー！」

筋「ふっ、ぬるい攻撃だな。」

変身を遂げたキュアブルームが一足飛びに駆け出しキントレスキーに仕掛ける。

勢いのままに繰り出した蹴りも片腕で止められてしまった。

花「くっ・・・まだ！」

スピードを活かしパンチとキックの連続攻撃を仕掛けているがキントレスキーは余裕の表情を浮かべながらそれを受け止めている。

鳥「はああああ！」

筋「甘いな。」

空中へと高くジャンプしたあと急降下と共にキントレスキーへと鋭いキックを放つイーグレット。
しかし読まれていたのか逆にその足を掴まれてしまう。

花「っ！・・・あっ！？」

その一瞬をつかれたブルームも足払いを掛けられ倒れこむ。

筋「ふんっ！！」

そして倒れているブルームの体へ掴んでいたイーグレットを思い切

り叩きつけた。

筋「吹き飛べっ！！！！」

一塊になった2人を、体を捻りバネのように力を溜めそれを一気に解き放ち蹴り飛ばした。

「きゃあああああっ！！！！」

防ぎようが無く容赦ない蹴りを受け、砂塵をあたりに撒き散らしながら2人の体は7mほど吹き飛ばされたのだった。

確かに精霊の力で強化されているとはいってもやはり女子中学生、拳の振り方も知らないのであればバトルジャンキーのキントレスキ―に敵うはずもなかった。

花「イーグレット・・・大丈夫？」

鳥「大丈夫よ・・・でも私たちの攻撃じゃあの人を倒せない・・・」

花「必殺技を使えば！」

鳥「きつと避けられちゃうわ・・・」

それに必殺技を放つためには精霊の力を高める必要があるしそれを相手が待ってくれるはずがない。

かといってこのまま肉弾戦でいけばジリ貧になりそのまま押し切られてしまう。

花「取りあえず攻めは最大の防御ナリ！」

そう言いブルームは男へとまた駆け出していった。表情に焦りの色を濃くしていたイーグレットもそれに続き走り出したのだった。

。。。。。

。。。。。

希「すごい音・・・咄嗟に走ってきちゃったけど2人大丈夫かな・・・」

りん「解かんないけどあそこに居たってあたし達じゃ邪魔になるだけでしょ。」

さつきまで自分達がいた場所からの大きな音に希は足を止める。それに習い並走していたりんも立ち止まっていた。

希「ねえねえ、じゃあ有里さん呼んでみたらいいんじゃないかな？」

りん「・・・あんた電話番号知ってんの？」

希「あう・・・知らない。りんちゃんは？」

りん「あたしが知ってるわけないでしょ・・・。何行ってるの。」

希「え？だってりんちゃんもお財布に有里さんの写真入ってるじゃん。」

りん「ちよつ・・・ちよつと！なんであんたがそれ知ってるの！」

りんは実はなかなかの有里ファンだったのだが自分でも上手に隠し

ているつもりでいた。

寝る前に財布に隠してある有里の生写真を眺めることをもっぱらの日課にしている。ちなみにこの生写真、毎月不定期で開かれるHARM写真販売会で購入したものだ。

この販売会というものは学院内の空き教室で度々行われる者で主催者が誰か知るものはいないが有里の生写真が購入できるということに隠れた人気を博していた。

そんな隠れた趣味をまさか親友にばれていたとは思わず一瞬で耳まで真っ赤に染め上げる。

希「この前PANPAKAPANで奢ってもらった時財布に入ってるのチラッて見ちゃったんだ。りんちゃんも有里さんファンだったんだね。」

りん「ちがつ・・・バカ！あれは・・・その・・・頼まれただけで・・・」

希「なにになにりんちゃん隠さなくったっていいじゃん！顔真っ赤だよー！」

りん「のぞきみー！人の財布を勝手に覗くんじゃない！待て！」

希「そんな照れた顔して怒ったって怖くないもんね」

さっきまでの緊張した空気はどこへやら、じゃれあうように追いかけてこを始めた2人。

楽しくなってきたので、近づいてくる足音に気付くことができなかった。

鳥「なんでまだこんな所にいるの!？」

後方から聞こえたその叫び声に2人は驚いたように振り返る。その目に映っていたのは衣服が所々汚れ擦り傷が目立っている咲と舞もといブルームとイーグレットだった。

2人がかりで攻めるが受け流され防がれ、隙をつき攻撃がはいったとしても有効的なダメージを認められないでいた。

防戦一方になるのに時間はあまり必要なく距離を取りつつ戦っていたら先に逃げていた2人に追いついてしまったのだった。

りん「遊んでる場合じゃなかった!希っ逃げるよ!」

すぐに頭を切り替えるがキントレスキーはすぐそこまで迫っていた。

筋「所詮女子相手では魂の震える戦いはできないな。この辺りで終わらせてもらう。我が奥義!マッスルインパクト!!」

キントレスキーが腰溜めに構え拳に力をため始める。

全身から放たれるオーラの強さにブルームとイーグレットが反応した。

鳥「ブルーム!」

花「わかってる!」

逃げようとしていた希、りんの場所まで即座に近寄り一瞬2人で目を見合わせた後両手を前に突き出し精霊の力でバリアをはった。

筋「くらえ!!」

力を集束させた拳を思い切り地面へと振り下ろす。大きな衝撃波が地面を破壊しながら4人へと襲い掛かり、

「「「「きゃあああああ「「「「

衝撃波はタイルを砕き石を撒き散らし砂塵を巻き上げ4人の体を飲み込んでいった。

筋「まだ体に痛みが残っているな・・・ここは雑兵にまかせるとしよう。行けウザイナー。」

懐から真つ黒いテニスボールほどの玉を3つ取り出し放り投げた。地面に落ちると黒い霧のようなものが弾けて人の形を作っていく。頭部分にアルファベットのUの字が浮かび上がるところ叫んだ

U「ウザイナー!!!」

3mほどの生き物が出現し元気よく手を振り回している。それを見たキントレスキーは興味を失ったのか言葉もなく立ち去っていった。

咲「みんな・・・大丈夫？」

舞「変身は解けちゃったけど・・・希さん、りんさんは・・・？」

希「体中痛いけどね・・・りんちゃん？」

りん「大丈夫だよ、ちょっと頭がくらくらするけど・・・変身って？」

ウザイナーが胸を叩いたり等ゴリラ的パフォーマンスにいそしんで

いる時に4人は痛む体を引きずるように体を起こし始めた。
りんは自分達が逃げ出す時に咲と舞が光に包まれ姿が変わっていた
ことを思い出しそう尋ねる。

咲「えっとその、プリキュアって言って・・・ああいうのと戦ってる
の。」

舞「でも私達まだ新米だから・・・」

りん「いまいちよく解からないけどわかった・・・」

希「あつもしかして有里さんがくれたこの宝石って!!」

思い出した希はポケットから宝石を取り出し天高く掲げた。
名案ひらめいた!といった表情でキラキラした笑顔をしている。

希「みんな!私輝いて来る!」

その笑顔を3人に向けゆつくりと立ち上がり徐々に大人しくなっ
ているウザイナー三体の前まで躍り出た。

そして顔の前でクロスさせた手を思い上に突き上げて

希「変身!プリキュアスペシャルエクセレントフューチャー!」

溢れ出す自信を言葉に込めてそう叫んだ!!!

・・・。。

静寂がその場を支配する。風の音さえ無い。ただ先ほど舞い上げら
れた砂埃たちがその身をまた地面に返してただけだった。

その時一体のウザイナーの右手をぬらりと動いた。

全ての視線が右手に注がれる。ゆっくりと折り曲げられた薬指から放たれたデコピンが、希の体を吹き飛ばした。

希「ほげー！いたゝい！変身できなかったようりんちゃん・・・」

りん「変身うんぬんよりエクセレントフューチャーはないと思うんだけど。」

ずっしやああと大きな音をたてて3人の所まで吹き飛ばされたわりには元気な様子の希。とはいえ赤っ恥をかき少々涙目だ。

吹き飛ばされた拍子に手から零れ落ちた宝石がコロコロと転がりりんの靴にコツンと当たった。

するとさっきまで透明だった宝石が色鮮やかな赤に染まり発光し始めたのだ。

それを見たウザイナー達が反応しりんへと走り出した。

いきなり訪れた危機にりんは焦る。

りん「えっ・・・ちょ！来ないでええええ！！」

りんは咄嗟に足元に転がっていた宝石を両手で握り締めそれを目の前まで近づいてきていたウザイナーたちへと突きつけた。

その瞬間に宝石を彩っていた光が大きく膨れ上がりウザイナーたちの体を刎ね飛ばしたのだ。

咲も、舞も、希のその光に見とれてしまっている。とても暖かく優しい色の光だ。

りんの頭の中に言葉がひとつ浮かんた。少し恥ずかしい気持ちもある、だがここで自分がやらなければ親友を、そして新しい友達を守る、

ることが出来ない。

歯を食いしばり立ち上がる、同じく吹き飛ばされたところで立ち上がろうとしているウザイナー達を力強くにらみ

りん「プリキュア！メタモルフォーゼ！」

言葉に勇気を乗せそう叫んだ。

赤い光は炎に変わりりんの体を包み込む。すぐ間近にいた3人は少し身をすくめるが決して熱くは無くむしろ心地がよかった。ぬくもりにあてられ痛みが和らいでいく、体の節々には再び力が宿っていく。

広がっていた炎が集束されるように徐々に縮まっていき、やがて大きく爆発を起こす。

衝撃の中心地に立ち赤を纏う可憐な姿は、新しい戦士の誕生を意味していた。

赤「情熱の赤い炎！キュアルージュー！」

希「りんちゃんかくいー！」

赤「変身しちゃった・・・これがプリキュアっていうんだ、ちょっと恥ずかしい。」

決めポーズをぱっちり決めたルージュだったが希の言葉に自分の着ている服をたしかめながら少し恥ずかしそうにしている。それを見ていた咲と舞は自分達の力が回復したのがわかると

「デュアルスピリチュアルパワー！！」

再び変身を遂げルージュの横に並び立った。

傾きはじめて太陽が3人の戦士の戦いの始まりを厳かに照らしていた。

——赤を纏った情熱の戦士、初陣——

第22話 【撃退】

HARMの戸締りを確認し玄関扉の鍵を閉める。鍵をポケットにしまいつつ看板をひっくり返し閉店に変えたと有里は小走りに走り出した。

その表情はいつになく険しく焦りが見て取れた。

思えばおかしかったんだ、キントレスキーは確かに強いが暗黒の力は大きくは無い。むしろ小さいくらいだ。

だがその力を全て肉体強化へと回しまた自ら肉体を極限まで鍛えることであの強さを作り出している。

そんなキントレスキーが泉をわたったとしてもオレは気付けないだろう、なぜオレは気付くことができたのか。

その違和感の出所を探りオレは4人が出て行った方とは逆方向を見る。

そこには学院の裏山がある。以前オレがブラック・ホワイトと戦った場所だ。

気配を探る必要はない、呼んでいる・・・誰かは解からないがとても強大な力がオレを誘っている。

あいつらとキントレスキーを戦わせて経験値を上げさせようとし、危なくなったら助けるつもりだったが・・・。

自らの失策に齒がゆさを感じるが今さらどうすることも出来ず、4人のことを信じつつオレは裏山へと駆け出したのだった。

・・・。

・・・。

裏山に近づくにつれ空気が濁る。嫌な感覚が強いほうへとひたすらに走るとひらけた場所に出た、そこはくしくも以前ブラック・ホワイトと戦った場所と同じ広場だった。

眼前に人影を捕らえた。そいつこそがオレをここへと呼び寄せた張本人だ。

真っ黒いスーツのようなものを体に纏い鍛え抜かれた体のラインを露にしている。肌は青白くお世辞にも健康とは言えそうにない。

「よく私の存在に気付いたな。」

背を抜けていた男がそう呟きながら振り返る。

有里「死ねっ！！！」

ちよっという霏圀氣で振り替えた男の顔にドロップキックがぶち込まれる。

声を発する間もなく男は吹き飛ばされる。

有里は着地すると同時に手のひらに赤黒いエネルギー弾を浮かべ男のほうへと投げつける。

さらにそれを放つとほぼ同時に駆け出した。

着弾したエネルギー弾が衝撃とともに爆音を上げる。

それから一歩遅れて有里が突っ込む。

走る勢いのままジャンプし体を回転させ遠心力を利用した重い蹴りを男の腹へ突き刺した。

ドゴオツつと交通事故のような音を立て大気が震える。

「ガハツ・・・」

男は苦しそうに声をあげる
完全に瞳が鬼畜モードになっている有里は今も倒れている男の腹へ
かかと落としを決める。

「っ・・・！」

先ほどとび蹴りをくらった場所へ寸々たがわず打たれたかかと落としに声をあげることすらできない。

有里は男の首を持つと空中へと放り投げる。
それを追うかのように有里もジャンプした。

空中で死に体になっている男の腹へさらに打撃を加えその両足を持つ
つと思いい切り振りかぶり地面へと投げつけた。
地面にひびを入れるほどの衝撃で叩きつけられる、そんな男に空中
から槍のように落下してきた有里の足が突き刺さった。

有里は男の体から飛びのくと少女達の所へ行くためその場を後にし
ようとする。

「ま・・・待て・・・。」

しかし良くて瀕死、悪くて即死だった男の方から声をかけられる。
振り向いてみるとそこには口から血を吐きつつ登場時よりもさらに
青白くなった男が地面に大きく出来上がったクレーターから這い上
がっていた。

有里「正直殺すつもりでやったんだけど・・・さすがといつかなんと
いうか頑丈だな。」

公園のトイレの個室の壁に張り付いた鼻くそを見るような目で有里は男を見ている。

否、視界に入れているだけというだけで見ているとは語弊が混じるだろう。

すでに有里の興味は男には無い。あえて言うならばこの場に来た時点でそれは無くなっていた。

この男、名をジュナといい暗黒軍の幹部である。

パートナー的存在であるレギーネと共に他の世界を攻めているはずの2人だ。

幹部の中でもトップクラスの实力を持ち、2人のコンビネーションに敵う者はいないと言われている。

有里はこの2人が嫌いだ。

なぜならばジュナは男色でありレギーネはショタコンだったからだ。それに付け加え2人はドが付くほどのSでありまたMだった。

そしてその愛を一心に受けているのがフリテュリアこと有里である。

寝ている間に縛ろうとしたり麻酔をうとうとしたり誘拐しようとしてたり有里がされたことを記述するには大学ノート1冊では足りないほどだろう。

襲われるたびに有里は3姉妹の力を借りたりなどして撃退してきた。そんなこんなで今では顔を確認した時点で先手必勝よろしく攻撃することになっているのだ。

パチンと有里が指を鳴らすとどこにいたのか3姉妹が跪いた状態で

有里の目の前に姿をあらわした。

有里「ジュレ様がお帰りのようなので丁重にお見送りしてあげなさい。」

そう一言言い残し有里は踵を返しその場を立ち去ろうと歩き始める。その背中にはジュレの痛々しい叫び声と3姉妹の罵声が聞こえていた。。。。

。。。。

。。。。

赤「はっ、てあっ！。。。ってあぶなっ。」

一方その頃公園ではプリキュア対ウザイナーの3on3が行われていた。

変身したてのルージュだったが持ち前の運動神経の良さと運動量でウザイナーとも対等に戦っていた。

花「くっ。。。はあっ！！あぶなっ！？」

鳥「はあ。。。はあ。。。せやっ！！」

それに比べてブルーム、イーグレットの2人はまだダメージが残っているのか攻めあぐねていた。

決定的な一打を貰うわけではないが回避と防御に徹しているので攻撃に転じることが出来ないでいる。

鳥「このままじゃジリ貧になっていずれやられてしまう。。。」

花「こうなったら・・・！イーグレット！」

鳥「ブルームッ！」

「必殺技よ！！キュアルージュがつ！！！！」

赤「ってあたし！？必殺技ってなに！？」

ブルームとイーグレットがウザイナーに足払いをかけ転ばせる。

2体のウザイナーに持たれかけられ真ん中でルージュと戦っていたウザイナー諸共倒れこんだ。

「はあっ！！」

すかさずブルームとイーグレットが精霊の力で結界をはりウザイナーを閉じ込めた。

花「今よ！」

鳥「そんなに長くはもたないわ！」

赤「必殺技といわれても・・・えっつと、えっつと・・・」

いきなり必殺技をうてと言われ焦り始めるルージュ。

その間にもウザイナーたちは2人の作り出した結界を暴れるように殴りはじめ、徐々に亀裂が広がっていた。

希「りんちゃん！」

その時後ろに非難していた希から自信を込めるだけ込めた雄雄しい声かけられる。

若干希の存在を忘れていたりんは驚きと共に振り返る。

とそこには

【エレメンタルファイヤーインパクト】

と書かれたノートを両手で掲げてもち満面の笑みを浮かべている親友の姿があつた。

一瞬あっけに取られ、その後で呆れがやってくる。
そのおかげで少し頭が冷静になった、今やるべきことは1つしかないそしてそれができるのはあたしだけ。

赤「よしっ！エレメンタルファイヤー・・・」

気合をいれ呪文を叫ぶとルージュの体の周りから炎が噴出しやがて足元で集束しだしサッカーボール状のエネルギーになる。
そしてルージュは腰をひねり右足を大きく振り上げ

赤「インパクトッ！！！」

その炎の玉を蹴りだした。

爆発のような衝撃派と熱波をはじかせウザイナーへと一直線に進む。

それを見たブルームとイーグレットは顔を見合わせると同時に結界をとりて後ろへ大きく飛びのいた。

それから一歩遅れ炎の玉がウザイナーへとぶち当たり

どごおおおっ！！と轟音を上げてウザイナーたちを飲み込んだ。飛び散った火の粉がちりちりと音をたて消えていく。周囲の温度を上げるように熱波が立ち上る。

プリキュアである3人は誰からともなくふうと息をついた。

先ほどの攻撃に手ごたえを感じたのだろう皆白煙に背を向け非難していた希へと歩み寄ろうとする、

しかし安堵の笑顔を浮かべているはずの希の様子がおかしい。

その表情は笑みとは程遠く呆けているようでその実絶望も孕んでいた。

ズンツツと重々しい音がなり地面が小さく振動する。

3人の頭を嫌な予感がめぐった。後ろから聞こえる咆哮からおそらくそれが間違いないであろう事を教えてくれている。

その予感を振り払うように振り替えるとそこには焦げたような痕はあるが依然として健常な姿のウザイナー達がいた。

体にドツと倦怠感が押し寄せる。ブルームとイーグレットは構えはするがその拳にもはや力が入っていない。

ルージュは呆然と立ち尽くし希は座り込んでしまった。

戦い続けられずれ他のプリキュアが、有里さんが応援にきてくれるはず。それまでは絶対に諦めない。

とそれだけを支えにブルームとイーグレットはあらためて四肢に力を込める。

先ほどの攻撃が頭に來たのか、怒り心頭といった様子でウザイナー

が暴れるようにこちらへと向かってきた。

ルージューは戦意を喪失しているし希は普通の子学生だ、既に体は限界に近いがそれでも私達が頑張るしかないとブルームとイーグレットが心に決めたとき、

「ルミナス・ハーティエル・アंकション！」

それは来た。

ウザイナー達の上空より声が聞こえたと思うと虹色の光が降り注ぐ。それをもろにくらったウザイナー達であつたが見た目にダメージをくらったようには思えない。

しかし猛スピードで走っていたウザイナーの動きがまるでスローモーションのようにゆっくりになっている。

「あんた達さつきからうるさいのよね。」

青いバラの花びらを散りばめながら動けないでいるウザイナーの前に少女が空中より着地する、ミルキーローズだ。

紫「消えなさい！ミルキーローズ・メタル・ブリザード！！」

右手に握られたミルキーミラーを振りかぶりバラの力を解き放つ。煌びやかな花びら達がウザイナー達をとき囲みやがてひとつの大きなバラの花になり、

内包した力を解放するように光を放ち、ウザイナーの姿をかき消していった。

.....

・・・。

舞「どうしてくるみさんがここに？」

ウザイナーを無事撃退した少女達は心身ともに疲弊していたのでタ
コカフェへと移動し休憩していた。

やっと落ち着くことができたので舞は疑問を口にした。

くるみ「え〜つと・・・話せば長くも無いんだけど・・・かといって声
高に話せることでもないし・・・。」

話題を振られたくるみは明らかに言いくそうに言葉を濁している。
自分の上司が有里に調教されたので怒ってボロボロにしたあとプチ
家出しました、と真実をことさらに告げられるほどくるみは常識が
ないわけでも羞恥心がないわけでもなかった。

咲「じゃあじゃああの人は？」

咲はあかねさんの隣で少女達に運ぶジュースをお盆に載せているひ
かりを指差しくるみに訪ねる。

くるみ「いやえつとあの・・・知り合いは知り合いなんだけど・・・
」。

ひかり「くるみさんとは従姉妹なんです。」

またもしどろもどろになっているくるみへジュースを運んできたひ
かりが助け舟を出す。

咲「そうなんだ〜あかねさんと一緒に住んでるの？」

ひかり「そうですね、色々あってあかねさんと同居させてもらっています。」

舞「ちょっと咲、あんまりそういうことズバズバ聞くものじゃないわ。。。」

希「ひかりさんもプリキュアってやつなのー？」

ひかりの持ってきたオレンジジュースを飲みながら希が発言する。
言ったそばから質問を浴びせる希に少し呆れたように肩をすくめた。

ひかり「厳密には違いますが同じようなものだと思ってもらって結構ですよ。」

有里「ちーっす」

ひかりが律儀に質問に答えているとぶすつとした表情でポケットに手をつ込みながらだらだらと有里が登場した。

咲「あつ有里さ〜んちょっと聞いてよ、さっき大変だったんだからね。」

ひかり「あ・・・ご主人様・・・。」

希「そうそういきなり訳解からないのに襲われてりんちゃんの変身しちゃってってご主人様!？」

ひかり「え？何がですか？」

舞「今有里さんのことご主人様って・・・」

ひかり「言ってますんよ？」

くるみ「そうよ、何言ってるのよ、疲れてるんじゃない？」

咲「確かに疲れてるかも、もうへとへとだもんね。」

すっかり調教済みのひかりは有里をご主人様と呼んでしまうもそしらぬ顔で嘯きくるみのフォローもあつてなんとかトラブルを回避した。

ひかりは平然とし変わらぬ様子だがくるみの方はもう汗だくといった感じだった。

そんな会話を黙ってみていた有里の下へ満と薫が帰ってきた。

満「ただいま戻りました。」

薫「ジュレ様は手足を縛り目隠しをしたあと泉へ放り投げておきました。」

有里「ありがとな、闇夢は？」

満「・・・。」

薫「闇夢は・・・少し用事で出ています。」

有里「そっか、お前らもなんか飲む？」

そつ言い有里がメニューを広げた時、ガタンツと大きな音が鳴り響

いた。

驚きそちらを見ると、敵意をむき出しにしたひかりが立ち上がった。勢いよく立ち上がったのか椅子が大きく後ろへと跳んでいた。その行動に少女達も無論有里もあっけに取られたが、そんなことを露も気にしないかのようにひかりはツカツカと満・薫の前へと歩み出た。

ひかり「あなた達はなんですか？」

発せられた言葉には明確な敵意が込められていた。一言で空気が重みを増す。

満「私達は兄様の妹であり」

薫「忠実な僕です。」

その空気と込められた敵意を察知したのかひかりを睨み返しながらそう答える。

呆然とそのやりとりを見ていた咲・舞・希には両者の間に飛び散る火花が見えていた。

くるみ「ちょ・・ちよつとひかりさ・・・ひかりさん？」

初めて見る主人の怒りにくるみはぶちパニックを起こしていた、何をしていいか解からないがとりあえずひかりの元へと近寄る。

ひかり「あなた達のような”者”がどうしてご主人様の僕、ましてや妹なんてやっているの？」

咲（ご主人様っていった）

舞（ご主人様っていった）

このジュースおいしいなあ

希

満「それをあなたに許可する必要は」

薫「ないと思うわ」

ひかり「くるみ！変身しましょう。今私の目の前に敵がいます。」

くるみ「あの・・・落ち着いてください・・・」

有里「あつはつは、なんか面白いことになってきたな！もっとやれ！」

くるみ「原因のあんたが何笑ってんのよ！」

くるみの腰の入った回し蹴りが馬鹿笑いしている有里の顔にクリテ
イカルヒットし椅子もろとも吹き飛ばす

ひかり「くるみっ！ご主人様になんてことをするんですか！」

咲（また言った）

舞（また言った）

希（たこ焼き食べよ〜っと、でも太っちゃうからやめとこっかな）

満「すぐに暴力をふるなんて・・・」

薫「それで兄様の僕を名乗ろうなんてちゃんちゃらおかしいわね。」

くるみ「誰が誰の僕ですって!？」

ひかり「ご主人様の奴隷に相応しいのは私ですっ」

咲（奴隷って・・・）

舞（有里さんまたなにかやらかしたんだわ・・・）

希（お財布みたら68円しか入ってなかった!）

目の前で繰り広げられているケンカがヒートアップしていくのを見ながら、有里は一言もつつこみをいれず一言も喋らずにただじっと座っていたりんのほうを見て仕方ないなというように肩をすくめため息を1つついた。

第23話 【なぐさめ】

あかねさんが用事があると、タコカフェを閉めることになった。オレ達は店じまいを手伝うと何となくHARMへと移動した。その間も満・薫とひかり・くるみの小競り合いが続いている。

そりゃ満と薫は半分は暗黒界の力でできてる訳だしクイーンであるひかりがそれに噛み付くのも仕方がないと思う。

でもオレをだしにしてケンカをするのはごめんこうむりたい。案の定先頭を歩くオレの背中には、何とかしるとビシバシ痛い視線が当たっている。

その視線の出所である咲・舞は、納まる様子のないケンカを傍観しその原因と思われるオレをずっと座ったような目で見ていた。

わいわいがやがや賑わいながらもHARMへ到着する。

咲・舞・希・りん・オレは店内へ入ったが後の4人は店の外ですでに取っ組み合いの喧嘩にまで発展し、ひかりはルミナスへと変身し強制的に頭数に入れられたくるみもローズとなり一糸乱れぬ攻防を繰り広げていた。

触らぬ神に祟り無しの方でまとまった傍観組みはHARMに入るや否や店奥のソファに寝っ転がる。

咲「有里さんあたしオレンジジュース」

希「わたしコーラー」

舞「それじゃあ私も・・・いいですか？」

1人暮らしの友達の家遊びに来たような気安さで飲み物を注文する少女達。ここは飲食店だぞこの野朗と言ってやりたいがアットホームな雰囲気売りなのでまあよしとするか。ツケの代金はちゃんと記入してるからなっ。

有里「あいよ、舞は紅茶でいい？」

舞「あ・・・ありがとうございます／＼」

そう照れながら答える舞。かわいい、舞かわいい。容姿で言えばまあみんな可愛らしいのだがこういった恥じらいが高ポイントになるわけですよこれが。

飲み物を用意しオボンにのせもって行くと、いつの間に引つ張りだしたのか咲と希がスーパーフアミコンで遊んでいた。ぐっす。およよて・・・今時の中学生は知らないだろ・・・

ソファの前の机にそれぞれ飲み物を置く。こいつらゲームに夢中で気付きやしねえ・・・っとオレがちょっとむっとした顔をしていると

舞「あの・・・2人にはあとで私から言っておきますから・・・ごめんなさい・・・。」

と泣きそうな瞳で舞がこちらを見ているではないか。思わずSスイツチを入れてオレ専用の中学生奴隷にしてやるぜえ！なんてちよっと思ったりなんかしちゃったけど

有里「いいのいいの別に怒ってないんだから、舞も疲れたんなら寝転がってな。時間になったら起こすしなんなら夕飯も出すからさ。」

舞「いいんですか・・・？その・・・ありがとうございます／＼」

かわいい、舞かわいい。かわいい舞。10ポイント！

紅茶を置きカウンターに戻りコーヒーを入れる。

1人席に座っているりんの前にそれを置くと静かに横に座った。

有里「どうしたの？」

出来る限り優しい声でそう話しかける、タコカフェにいたときからりんは思いつめた顔をしていた。

何となく理由はわかる、ついさっきまでただの女子中学生だったんだ。悩みなんて無いほうがおかしい。

りん「有里さんは知ってたの・・・プリキュアのこと。」

震えた声でりんがそう呟いた。

有里「ああ・・・知ってたよ。」

りん「あいつらは何なの？・・・プリキュアって・・・あいつらと戦わなきゃなの？」

はじけるたように顔をあげこちらを見つめながらそう言う。

有里「暗黒界という世界がある、この世界とは違う世界だ。その世界の王であるアクレアタムというものがこの世界を滅ぼそうとしている。あいつらはその手先だ、プリキュアはそれと戦わなくてはいけない。世界を守るために。」

りんの表情が恐怖と混乱で埋まる。押しつぶされた感情が涙となっ

て一筋流れた。

りん「あんな・・・あんな怖いのと戦えない！でも・・・世界が無くなっちゃうなら戦うしか・・・怖いよ・・・」

当然なんだ。本当なら学校で友達と話して部活して帰り道にお店によったり遊んだり、それが当たり前なんだ。

いくら変身して強い力を手に入れても、心までは強くはなれない。

”自分が失敗すれば世界が滅びる”

友達が、家族が、好きな人が、自分のせいで死んでしまう。消えてしまう。

そのプレッシャーは幼い少女の心を容易く押しつぶすだろう。

有里「りんはどうしてプリキュアに変身しようとしたんだ？」

りん「え？」

有里「親友を、新しくできた友達を守るために変身して戦おうとしたんだろ？」

りん「あの時はそうするしかなかったから・・・」

有里「その時に失敗したらどうしようとか、怖いから逃げようって考えた？」

りん「・・・、みんなを守らなきゃってそれだけだった・・・」

有里「それでいいじゃんか、友達を守るためだけに戦えば。世界な

んて救わなくなっただけいいんだよ。」

りん「でもそれじゃあ・・・」

有里「もしこの世界が滅びそうになったらオレが助けてやる、だからりんは自分のやりたいようにやればいいんだよ。」

りん「有里・・・さん。」

有里「真面目な感じはここまでにして取りあえずそのコーヒー飲んじゃってよ、あとのバカなんとかして。」

りん「うん・・・恥ずかしいな、泣いちゃった。でもちよつと楽になったかも。」

有里「そりゃよかった、じゃあオレちよつと外見てくるから。」

りん「いつてらっしゃい。・・・ちよつと希あんた何勝手にゲーム機だしてるの!」

希「違うよりんちゃんゲーム機が勝手に出てきたんだよ。」

りん「うるさいバカ希!それじゃ2人しか出来ないでしょ、他のゲームにしないさい。」

希「あつじゃあロツク。ンXやるー?」

りん「それ一人用じゃないあんた・・・ねえ希?」

希「じゃあスーパーパツ。マンとか・・・なにりんちゃん?」

りん「有里さんって・・・かつこいいかもね」

希「やっと気付くなんて、遅いねりんちゃん！」

咲「そうだよ！有里さんは・・・かつこいいんだよ！」

舞「なんで溜めて言うの・・・あとジュース温くなっちゃうよ？」

・・・。

・・・。

扉を開けたら、そこは地獄絵図でした。

光「あたれ！ルミナス！ハーティエル・アクション！」

満「そんな攻撃とんぼにだって避けられるわ。」

紫「ああもう私は関係ないのに！」

薫「あなたは兄様を主人をみるような目で見ているわ、それも発情したメスの目よ。」

紫「だから私は別にあんなヤツの事・・・うるっさいわー！！」

木々は倒され地面は砕かれそこらじゅうに石が散らばっている。その中心ともいえる場所では4人の少女がロゲンカと同時進行で人外の争いを繰り広げていた。

っていうかなんで満・薫は挑発してるんだよ・・・。

有里「あの……そろそろ暗くなるのでお止めになってはいかがでしょうか……。」

光「ご主人様の椅子役はわたしのものです！」

満「昨日今日奴隷になった人が兄様の椅子になろうなんておこがましいにもほどがあるわ。」

紫「だからあいつはただの同居人だっていつてるでしょうが！」

薫「その割りには抱きしめて欲しい頭を撫でてほしい膝枕をして欲しい一緒に寝たいと目が言ってるわ」

紫「言っていないわあああ！」

まあ解かってたけど私の言葉は届いていないようです。むしろ余計にヒートアップしてますね。

っていうかオレは人を椅子にしたりしねえよ。鬼畜スイッチが入らなきゃ……。

ひかりが結界を張っているようで近隣の方々への騒音問題は無いようだけれどだからってこのままにしてはおけない、ってかHARMは結界内だからうるさい。

考えよう……人とは思考する生き物だ。だからこそ人たり得ているといえる。

ただ力を誇示にその脅威をもってこの場を治めることも可能だ、だがそれでは動物のやり方であり今まで築いてきた文明への冒瀆にもなる。

人として生まれて来たこそ知恵をもって事を成す。成長を止めた時人は動物に成り下がるのだ。

考える、ケンカを止める方法をこの場を鎮める上策を！見える！オレにも見えた！

有里「あゝあ、誰かオレの世話してくれる人いないかな・・・。」

その言葉が結界内に響くや否や、今まで血で血を拭う争いをしていた少女達が一瞬でオレの目の前まで来て正座していた。

光「それでは早速着替えを手伝います」

満「ついでにお風呂にはいりましょう」

そう告げるといきなり4人が襲い掛かってきて地面へと引きずり倒される。

有里「やめっ！ちょ・・・触るなっつか脱がすな！・・・おいズボン返せ！うひやははは！誰だ足舐めてんの！ちょ・・・シャツ返して・・・！！！」

今なら量産機に襲われる式号機の気持ち解かる気がする。可愛い女の子に逆レ。プされたい！と言っちゃってるヤツがいたら代わってやるよ！

若干のプチ切れと童貞喪失の危機を感じたので手当たり次第頭にゲンコツを振り下ろしていく。

有里「正座！」

と一声かけると半べその少女達は再び横並びになり地面に正座で座る。

有里「取りあえず服を返せ。ってかなんで着てるんだよ、そしていつ着たんだよ。」

いつの間にか奪われた服を少女達はそれぞれ身に付けていた。

何のことでしょう？といった顔をするのでひと睨みしてやるとしぶしぶといったように服を脱ぎ綺麗に畳みオレの前に重ねていった。

オレはそれをすぐさま身に付ける。この短時間でパンツ一丁にされるとは思っても見なかったぜ。

有里「あれ、靴下がないぞ。誰だ隠してるのは」

しかし少女達を見回してみても私じゃないですよ？口をそろえて言うだけだ。その様子に隠したり嘘を付いているようなものは認められない。

まあドタバタしてるうちにどっかいったんだろ、靴下の一足くらいべつにいいか。

有里「お前ら自分達で壊したものを直してきなさい。ついでに公園もよろしく。終わったご褒美が待ってるからな」

ごほう、あたりで既に少女達の姿は消えていた。今頃競い合いながら公園まで急いでいるんだろう。

最近多くなってきたため息のため息をつきながら夕食の準備をするべくHARMの中へと戻っていった。

．．．．。

．．．。

どうもこんばんはみんなのアイドル春日野つららです。

すー．．．はあー．．．。

先日はHARMの店内を観察していたら有里さんが気絶していたので思い切ってお店に入って至近距離で写真取ったり抱きついたりしちゃいました。

まさか来客が来るとは思わなくて裏口から逃げちゃったけどばれなかったかな。

すー．．．はあー．．．。

そして今日は有里さんの靴下ゲット。でも最近有里さんの周りに女の子が増えてるからちよつと嫉妬です。

すー．．．はあー．．．

．．．。

すー．．．はあー．．．。

第24話 【ご褒美】

次の日。

相変わらず学園からサバタージュ&エスケープをしているオレは情性と怠惰の空気がただよう喫茶HARMの店内にて暇を持て余していた。

今頃学園では1現目が行われている頃だろう。先ほどまで学生達の活気ある声が聞こえていたが今では静けさを取り戻している。

雑誌を読む、というよりはただ捲って眺めているだけのオレの膝には、それを枕にして小さく寝息を立てている満・薫がいた。

そしていつもならこの状況に突っ込みをいれローリンググソバットを決めてくるはずのくるみがいない。

時間は昨日の夜へとさかのぼる

・・・。

・・・。

すっかり元気を取り戻したりんがしづる希を連れて帰路についた。それを幾に咲と舞も荷物をまとめ帰っていった。

2人を見送り振舞ってあげた夕食の片付けをしていると、

光「ご主人様、修復終わりました」

くるみ「疲れた〜・・・。」

満「公園の修復完了しました。」

薫「植物や石を復元完了です。」

有里「お疲れ様々夕飯作ったらから食べてきな」

それからすぐ入れ替わりのように若干疲れ気味の4人が帰ってきた。飛び出してからまだ1時間も経っていない。普通に精霊の力で修復したなら2時間や3時間はかかっていただろう。

罵りあいながら我先にと公園や街道を修復していく様が容易に想像できた。

お腹が減ってるだろうと思いがつつり系のカツカレーを作っであげると4人はペロリと完食してしまった。

空腹も満たされ疲れがピークに近づいてきた光はタコカフェへと帰っていった。

それと同時に満・薫も帰宅する。

そうしてようやく落ち着きを取り戻した店内をくるみと一緒に掃除をし、看板をCLOSEに代え戸締りを確認する。

店内に戻ると掃除を終えシャワーを浴びていたくるみがパジャマ姿で髪を拭いていた。

青紫で要所要所にフリルのついた可愛らしいデザインだ。なんでもこまち、かれんチョイスで買ってきたらしい。

くるみ「先にお風呂貰ったから。」

と髪にドライヤーを当てながらそう言うくるみ。

風呂上りのせいか紅潮している頬と濡れた髪のせいで色っぽい……

色っぽい。

ここでふゝ。こちゃゝん！と襲い掛かるのは簡単だが肋骨の5、6本は覚悟しなくてはならないので割に合わない。

有里「んじゃオレも入ろゝ」

今日は少々動き回ったこともあり早めに寝たかったのでシャワーで適当に汗を流し体を洗う。

からすが2回行水するくらいで浴室から出た。元々長湯をするタイプじゃないしシャワーならなおさらだ。

アイスコーヒーを入れ、HARMの椅子に座り髪を拭く。

くるみの姿はすでに無くおそらく自室に戻ったのだらう。今日は色々頑張ったらしいからもう寝たのかもしれない。

時刻はまだ20時をまわったばかり、寝るにはまだ少し早いだろうがかといってやることも無い。

洋風菓子もとい夜更かしは肌にも健康にも悪いし今日は早めに寝るか。

適当にシャツと短パンを着込み手洗いうがい歯磨き済ませ、戸締りを再確認したあと電気を消し自室へと戻った。

さつき寝るには早いなんて言っておきながらベットに寝転がってみるといい具合に眠気がやってくる。

6月も下旬となると室温は眉をひそめたくなるくらいになっており快適とは言えない環境だ。

エアコンは付いているが今から頼っていては7、8月の猛暑に耐えられなくなってしまう。

扇風機を弱で首を降らせタイマーをぎりぎり回し2時間に設定しておく。これだけで快適愉快になるから我ながら安い人間だ。

タオルケットを羽織りいい感じで睡魔が頭を支配し始めると、コンコンツと扉がノックされた。

有里「開いてるよー」

という以前に鍵が付いていない。一応くるみの部屋は鍵が付いてます、付けました。

ゆっくり扉が開かれ、そこから遠慮がちにくるみが顔だけ覗きこむように見せていた。

目が合うと隠れ逸らすと現れる。意味も訳もわからないので、障らぬ神に祟り無しを重んじるオレとしては気にせず布団にくるまった。しばらくして後ろでみじろぐ音が聞こえ布団の中へくるみが入ってきた。

さすがにここまでされて無視はできないしどうかと思う。

有里「これは一体どういうことでしょうか」

背中越しに訪ねてみる。しかし返答は返ってこない、なんのこつちや！と振り返ってみると

くるみ「こつち見ないでよ」

と聞きようによってときめき台詞を吐きながらオレの眼球を人差し指と中指が突き刺さる。

燃えるような眼球の痛みに目を押さえるが涙が止まらない。

何すんだ！と声を荒げようとしたがくるみに抱きつかれ思考が一瞬止まってしまう。

有里「な・・・何事でしょうか・・・？」

くるみ「ご褒美」

一応会話が成り立っている・・・のか？

これは数少ないヒントからくるみ様が何を考えているか察するミッシヨンだな！

ご褒美・・・そうか、確か片付けしたらご褒美をあげるとか言った気がする・・・いや言ったな。

だがそれとオレの眼球の痛みは何の関係があるんだ・・・なんだこれ・・・心理ゲームか？なぞなぞか？

あ、頭使ってたら眠たくなってきた・・・あう・・・ふが・・・ぐう。

くるみ「ご褒美・・・くれるって言ったでしょ、だからその・・・添い寝をしてあげようかなって、あんたが1人寝じゃ寂しいだろうと思っ
ってね。」

くるみ「って寝てるし・・・でも逆に都合がいいわね、軽口叩いたりからかったりして来なかったらかつこいいのに・・・それに男のく
せにいい匂い。あ、なんか心地よく・・・ぐう。」

・・・。

・・・。

すずめの可愛らしい鳴き声が朝日が昇ったことを教えてくれる。
その和やかさに呼応して鳴り響くはずの目覚まし時計はその仕事を
遂行することはなかった。

有里「ごふっ！！」

どぼっ！という鈍い打撃音と共にお腹に重い衝撃を感じ思わずうめき声をあげてしまう。

一瞬で頭が覚醒し、目を開いてみるとそこにはゲー。キューブを振り下ろしている満がいた。

有里「あの……。ームキューブの取っ手は人を殴るためについてるんじゃないのですよ……。」

腹部の痛みにうずくまると満はススツツとベットから遠ざかった。そこで気付いたがどうやら薫も来ていたみたいだ。

くるみ「ん……。なに？大きな声出して。」

その騒がしさに布団に顔を潜り込ませ寝ていたくるみがのそのそと起きたした。

満「やつと起きたかこの売女は……。」

薫「兄様と同じ布団で見る夢はさぞ幸せだったでしょうね。」

しまったミスったまズった困った。

なんでこの2人がいるの……。そしてなんでこんなに怒ってるの。あとなんで凶器がゲーム。キューブ？

くるみ「ちよっ……。なんであんだ達がここに！？」

くるみも同じことを考えたらしい、そりゃそうだ朝起きて目の前に

人がいれば誰だってびびる。

その人から明確な敵意を向けられていたとしたら尚更だ。

満「あなたがここにいる理由はわかるわ」

薫「ご褒美と銘打って潜り込んだのでしょうか」

満「兄様の布団の香りはどうだった？」

薫「兄様のシャツが湿っているわね・・・もしかしてあなた浅ましくよだれなんて垂らしていたのかしら」

満「そこまで言うては可哀想よ薫、それだけ幸せだったということなのだから」

薫「そうね、きつと体を擦り付けたり匂いを嗅いだり舐めたり吸ったりしたでしょうからね」

くるみ「あ・・・あんたらと一緒にすんなー！！！」

2人に怒涛の勢いで攻めたてられ顔を真っ赤にしたくるみは、なぜかオレの顔に渾身のパンチをくれた後部屋を飛び出した。

扉の向こう側でドタバタと走り回る音が聞こえ、やがてバタンツとHARMの玄関が大きな音を立て閉められた。おそらく店を出てかれん達かひかりのところへ行ったんだろう。

オレは痛むお腹と頬をさすりつつ顔を洗い歯を磨いた。

店内へ行くと満と薫が席に座り机にはすでにご飯に味噌汁、さかなに漬物と和風の朝食が用意されていた。

こいつらいつの間に準備したんだ・・・と思いながらも椅子に座る。食べ始めると2人が無言でご飯や味噌汁をオレの口元へと持つてくる。

それを黙々と口に入れていった。3歳児にでも戻った気分です。

朝食が終わると2人がいそいそと片付けを始める。

手伝おうと名乗り出るも反応は返ってこない。手持ち無沙汰になったので近くに置いてあった雑誌を読み始めた。

すると食器の片付けが終わった2人がトコトコつと近寄ってきてソファに横たわり膝に頭を乗せてくる。

チラつと目が合うと2人して満面の笑顔を返してくれた。そして小さく身じろぎをしているうちに寝息が二つ聞こえてくるようになる。

そして冒頭へと戻るわけですね。

闇夢「お兄様！！！！！！」

当然こんなほのぼのした時間が長続きするわけは無く、怒り心頭といった様子で玄関を勢いよく開けた義妹という名の現実を、直視できないでいた。

第24話 【ご褒美】（後書き）

くるみヒロイン力強すぎ

第25話 【来客】

近寄り難いオーラを糸引かせ勢いよく開かれた扉からツカツカと闇夢がご来店なさる。

両膝に頭を乗せられているので動くことが出来ず易々と悪鬼の接近を許してしまった。

闇夢「起きなさい。」

聞きようによつては生徒会長系幼馴染が単身赴任についていった母の頼みで仕方なく&しぶしぶかつまんざらでもないのを心中で隠しつつ起こしてくれているようにも取れるが現実はいくも無常である。

しかし満と薫とて朝のバトルで勝ち取った地位である。そう簡単に譲ったりはしないだろう。

2人はさもうつとしいというように寝返りをうつた。

やばい！本能的にそう思った。闇夢の口元からはギリギリと歯軋りの音が聞こえてくる。怒り、悔しさ、嫉妬、様々な感情を堪えているのがこちらにも伝わってきた。

店内に居心地の悪い空気が展開される。今思えば闇夢が店に入ってきたときから空気が重くなっていた気がする。

今すぐ逃げ出したい旅に出たい眠りたい衝動にかられるが両足を固定され眼前に悪鬼羅漢を配置されてしまった以上この場から居なくなるという選択肢は消されてしまった。

嫌な沈黙がその場を支配した・・・。

そしてその沈黙をやぶったのは

満・薫「チッ。」

小さな舌打ちだった・・・しかしそれは店内に鳴り響き呼応する。まるでエコーが効いているかのように何度も何度も耳に染み込んで行く。

そこでやっと気付いた、そうか・・・これが走馬灯ってやつなのか。

闇夢が両手を天に掲げ構成した大きなエネルギー弾を振り下ろし、狸寝入りしていた2人が身を翻しオレを盾にした時、オレは現実の悲しさを受け入れた。

有里「ぐぶふっ！！」

我ながら情けない声を出したもんだなと吹き飛びながら心で呟く。それからすぐオレの体はHARMの机をなぎ倒しつつ地面へと落ちた。

足も痺れてるし打った頭も痛いので倒された机や椅子に埋まりながら目を閉じてみた。

ひとつ欠けた五感を補うように鋭敏になった聴覚は義妹達の罵りあいを律儀に拾っている。

ああこんなことなら真面目に学校行っておけばよかったな・・・

・・・。

有里「お前ら学校は？」

起き上がりそう告げた途端に罵りあいと取っ組み合いは嘘のように
ぴたりと納まった。

闇夢「……………」

満「……………」

薫「……………」

有里「おい待て、帰ろうとすんな。」

オレの声で動きを止めた3人は何事もなかったかのように出口へと
向かおうとするがそうはさせない。

有里「闇夢はこのまえ入学手続きしてやったる、んで今日から登校
のはずだろ。」

いつの間にかオレの目の前に来て正座している闇夢の方がピクンッ
と反応した。

闇夢「いや…………あの……………」

俯き、指を絡ませ遊ばせながら落ち着かない様子でそう呟いた。

スツと視線を満と薫に動かすと、同じように下を向いたままピクッ
と肩でだけ反応を示した。

何かを隠しているのは明白だ、ならそれは何か…………こいつらの行
動パターンと…………朝の行動…………

…………

有里「ま、いつか。そういえばお前らの家最近行ってなかったな、久しぶりに行ってみるか」

闇夢「！？・・だだ・・っただだダメです！」

満「そうです、ダメです」

薫「恥ずかしながら大変汚れていますので兄様を部屋に入れるには忍びなく・・・」

かまをかけたつもりがこうも簡単にボ口を出してくれるとは・・・。

有里「さしずめ姉妹ゲンカ部屋半壊ってとこかな・・・。」

3人「ビクッ！！」

有里「解かりやすい反応ありがとうございます。んでそれと登校できなかったのはどう繋がるんだ？」

満「昨日兄様の所から帰ったあと」

薫「またその喧嘩になりました」

闇夢「結界をはったから外には聞こえてないけど部屋はめちゃめちゃになっちゃって・・・」

満「そういうときの修復担当はジャンケンで決めることになっていて」

薫「でも夜は遅いしで修復は明日にしようということになり」

闇夢「朝起きたらこいつらは居ないし部屋はめちゃくちゃだしお兄様といちゃいちゃしてるし……。」

こいつらの仲の悪さは筋金いりだからなあ……ちよつとも仲良くなれるようにと同じ部屋で生活させたんだが……ここまで裏目にとるとは。

有里「よしつ、お前ら3人今から部屋もどつて直してこい。」

裁判長気分で判決を下す。というか自分達で壊したなら自分達で直すのが道理だ。これを機に仲良くなってくればなんてそれはちよつと甘いかな

えゝつとしぶる声を無視して扉のほうを指差すと諦めたようにとぼとぼと3人は出て行った。

今頃は「お前のせいだ!」「あんたが悪い!」と罵り合ってるだろう……もう構いきれるか!

やつとこれで安らかなヒューマンライフが送れるというものだ。幸いまだ昼頃だし今日はお店も定休日なので(不定期休業)のんびりできそうだ。

ずだだだだだだだ……ガチャツ!!

ひかり「抱いてください!」

有里「うるせえ!抱くか!帰れ!……!」

こいつらグルだと愚痴りたくなるような絶妙タイミングで店内へと飛び込み開口一番性交渉をとる少女に頭が痛くなる。

ひかり「くるみと一緒にのベツトで寝たのに私には何も無しですか・・・？」

有里「それならまず中1程度の体をなんとかしてから来てください。」

ひかり「私の体が目当てなんですか!？」

有里「抱いてつつたのはお前だろうが!」

ひかり「抱いてくれるんですか?」

有里「言ってねーよ! 帰れよ!」

闇夢たちもそうだがどうしてこう押しが強いんだ・・・あとなんで人の話を聞かないんだ・・・。

実年齢は解からんがひかりはどう見ても12〜13歳の女の子に見える。生憎オレには特殊な性癖はないのでどうやっても体が反応しない。

というかクイーンであるヤツが軽すぎなんじゃないだろうか・・・。

有里「昼ときはタコカフェも忙しいだろー・・あかねさんが1人で大変だぞー。」

ひかり「確かに・・・一旦戻ります、でもこの話は終わりじゃないですよ。」

興奮が冷めたのか落ち着きを取り戻し玄関の扉を開け外へと出るひかり、しかし扉が閉まる寸前までこちらを見つめていた瞳が嫌に印象深かった・・・こわい！

その後はCLOSEの看板を下げ窓や扉の鍵を全て閉め完全密室にし穏やかなドリームライフを満喫しましたとさ。

あれ？タオルが一枚足りねーな・・・ま、いつか！

第26話 【アイドルとハンカチ】

なぎさ「もおゝまたHARM閉まつてるよぉ・・・有里さんもう3日連続でサボってる！」

ほのか「有里さん気分屋だから・・・。」

6月の下旬、晴れ晴れとした日光は眩しい土曜日の昼時に少女2人はCLOSEの看板が寂しい喫茶HARMの店前に居た。

なぎさ「せっかくお昼は有里さんのオムライス食べようと思ったのになぁ・・・。」

ほのか「開いてないなら仕方ないわ、タコカフェに行きましょう。」

なぎさ「食べたい食べたい食べたいよ・・・ってあれ？あそこのベンチ誰がいる。」

地団駄を踏んで悔しがるなぎさ。ふと顔を上げた視線の先に少女が座っていたことに気付いた。

休日の昼下がりの学院にまさか自分達以外の生徒がいるとは思わず、少し恥ずかしくなる。

ほのか「あの子・・・確か1年生でアイドルの子じゃなかったかしら？」

なぎさ「あつ聞いたことあるかも。ハルウララちゃんだっけ？」

ほのか「春日野うららちゃんでしょ・・・なんで競走馬なの。」

なぎさ「むしろハルウララが解かるほのかにびっくりだよ。」

ほのか「もう・・・くだらないこと言っでないで早く行きましょ」

なぎさ「はい、お腹も減ったしね。今日はたこ焼き2人前は食べるぞー!」

意気揚々と元気に手を振り回し歩き始めるなぎさを追いかけるようにして、ニコニコ笑顔のほのかも歩き出した。

・・・。

・・・。

うすら「はぁ・・・。」

ベンチに座り青いタオルに顔をうずめながらため息をつく。

ファンの人が見ればフラッシュが焚かれ記者会見のようになったらう、そのくらい少女の悩む姿は絵になった。

うすら「有里さんの下着欲しいなあ・・・」

この眩きがなければ。

先日手に入れたタオルを枕に巻いたり腕に巻いたり制服の下でお腹に巻きながら登校したりと色々楽しんだが、それも3日過ぎれば物足りなくなってしまう。

うすら「はぁ・・・話しかけてみたいなあ・・・」

ハルム学院のアイドルこと春日野うららと、気分屋バカ野朗兼兄と有里の出会いはまだ桜が目美しい春のことだった。

・・・・。

・・・。

うらら「はぁ・・・。」

桜の花びらが舞散る校庭の隅に置かれたベンチの上で少女はため息をついていた。

入学してすぐに路上でスカウトされあれよあれよという間にアイドルになってしまい、それは耳聡い年頃の少女達にはすぐに広まった仕事では大人たちの世界で1人ぼっち、学院に行けば有名人と仲良くなりたいといったミーハーな人たちしか近寄ってこない。

そんな現状に疲れてしまったうららは雑誌の撮影の仕事も放り出し家に帰ることも出来ず学院が終わったあともベンチに何もせず座っていた。

うらら（勝手に仕事休んじやって怒られちゃいます・・・でももう限界です・・・。）

携帯電話はマナーモードにしてあったが震えだすのが怖くて電源を切った。

だからといって何時までもこうして逃げていられるわけがない。明日にはマナージャーさんや雑誌関係の人に怒られることになるだろう。

もしかしたら大目に見てもらえるかもしれない・・・その方がもっとつらい・・・。

仕事もつらい、学院もつらい。部屋ではいつも枕を抱きしめて悩んで泣いて苦しんで。

こんなことならアイドルになんてなら無ければよかった・・・知らないうちに頬を涙が流れていった。

それに気付いてしまえば、防波堤が崩れたように涙は洪水となって地面へと落ちていった。

「あらま、こんな所で何してんだいお嬢さん。」

意識の外から掛けられた声にはじかれたように顔をあげてしまう。

そこには買い物袋をさげた少し年上の青年が気だるそうに、でも優しそうな笑顔を浮かべていた。

青年と目が合った、と同時に恥ずかしさがこみ上げる

うらら（泣いてる所も泣き顔も見られちゃった・・・。）

恥ずかしさが情けなさを追い立てて感情が押しとどめられなくなる。涙は勢いを増し小さな水たまりを足元に作っていた。

するとガサツと音がして青年が持っている買い物袋が地面に置かれた。

身じろぎの音で青年が座り込んだのがわかる。本音を言うなら見なかったことにして立ち去ってほしかった。

居心地の悪さを感じていると青年が話しかけてくる。

「涙が地面に落ちるのは、そこに青空を映して自分を励ますためのさ・・・ってごめんなんか上手いこと言えなかったわ。いま夕方

だしね」

勝手に話して勝手に落ち込んで勝手に悩んでいる。

そんな青年に興味がわいて顔をおおっている手から右目だけ出してチラと見てみた。

青年は眉間にしわを寄せそこへ人差し指をあてながらあーでもないこーでもないとうねっている。

頼んでもいないのに励まそうとして、でも上手にできなくて悩んで変な人です・・・と内心クスリと笑ってしまった。

やがてめんどくさくなったのが、青年はポケットから白いハンカチを取り出し私のほうへと差し出してくる。

「とりあえず涙拭きなよ、きっと青空の色になるよ。ってこれもなんか違うな・・・。」

されるがままハンカチを受け取り頬と目じりの涙を拭う。

いつの間にか涙は止まっていて残っていたのは地面に落ちそびれたものだけだった。

ハンカチ洗って返さなきゃと前を抜いたときには、青年はもう買い物袋を持って歩き始めてしまっている。

うらら「あの・・・お名前を聞いてもいいですか？」

男性に話しかけるなんて初めての事だった、こんなに大きな声が出せたのかと自分でも驚く。

青年は振り返り、

有里「有里っていうんだ、学院の隅っこで喫茶店やってるからハン

カチ返すのはその時でいいよ。」

とだけ言い残し歩き去っていった。

その顔は夕日の逆行で見えなかったが、きつと優しい笑顔だったのだろう。

うらら「有里・・・さん。」

両手で握り締めたハンカチは、少し涙を含んで色が濃くなりまるで青空のような色をしていた。

そして足元に小さく作られた水たまりと、うららの頬は夕日に照らされて真っ赤に染まっていたのだった・・・。

・・・。

・・・。

第27話 【思惑、動く】

かれん「ふう。」

月に1回の部長会議が終わりやっと一息をつく。

スムーズに行けば昼前に終わるはずだったが、バスケット部の体育館の利用スペースの件で言い合いになってしまい大分長引いてしまった。

荷物をまとめ廊下へ出ると壁にもたれかかり本を読んでいる親友の姿が目に入った。

かれん「こまち、待っててくれたの？」

こまち「少し前にお昼と一緒にと思って来たんだけどまだ会議していたようだから。」

かれん「ごめんね、ちょっと長引いちゃって。」

こまち「ううんいいの、ちょうど新しい本を読み始めたところだったから。それじゃ行きましょ。」

こまちは読んでいた本を畳み抱へといれるとかれんの横へとススツと近寄ってきた。

かれんはそんな親友の姿が微笑ましかったのかさっきまでの疲れが吹き飛んだかの用につられて微笑んだ。

・・・。

かれん たつの希望でお昼はHARMで取ることにした。

校門を出て歩くこと3分

お目当てのHARMが見えてきた。それと同時に店の前でうついている少女の姿に気付く。

かれん「誰かしら・・・。」

若干不穏な雰囲気を書き交す声色でそうかれんが呟いた。

こまち「見たことあるわ・・・1年生でアイドルやっている子じゃないかしら？」

かれん「そう言われれば見たことあるかも・・・何してるのかしら。」

うららの存在は中等部では有名なので、流行ものにうといかれんも知っていたのだ。

とは言え話したことなどあるはずもなく有名というだけで何で有名なのかまでは知らなかった。

そうこうしているうちに2人はHARMの前までやってきた。

こまち「どうしたの？」

こまちが少女に話しかけた。

少女はまさか他の人が来るとは思っていなかったのだろう声をかけたほうが気の毒になるくらいに驚いた。

必死に鞆で顔を隠そうとする少女を尻目にかれんはHARMの扉を

叩いた。

かれん「ゆりー！どうせ寝てるんでしょう。開けなさい。」

ドンドンと握りこぶしで扉を叩く。しかし店内からの反応は帰ってこない。

出不精でめんどくさがりやの有里だがいくらCLOSEの看板が下げてあっても来客がくれば顔くらい出すだろう。

うらら「あのう・・・。」

もじもじしていた少女がここでやっと声を出した。

こまち「どうしたの？」

うららのすぐ隣でかれんを見ていたこまちがそれに反応した。

うらら「3日前から有里さんは帰ってきてません・・・ここに鍵があるんですけど、入ってみますか？」

と、うらははポケットから何のキーホルダーも付いていない無骨な鍵を1本取り出した。

かれん「そうね、取りあえず入ってみましょう。」

何故その鍵がうらののポケットから出てくるのかをこまちが疑問に思う前に、かれんは鍵穴へと鍵を差し込んだ。

刹那、3人に戦慄走る。

背筋をなにか生暖かいものが這いずったような感覚に襲われうらは身をすくませる。

かれんとこまちは同じ方向を見つめていた。その視線の先には以前暗黒界へ入るために使った泉がある。

2人は顔を見合わせるとHARMの裏手、泉のある方へと歩き始めた。

こまちとかれんの背中が木々に囲まれて見えなくなると、1つ息を飲み覚悟を決めたうららもその華奢な足を林の奥へと向け歩み始めていった。

。。。。。

大木が円状に生え揃った小さく拓けた場所の真ん中に泉が湧き出ている。

以前見たときは底すら見えるほど透き通っていたのが今は墨のようにどす黒い色をして渦を巻いている。

かれん「なに．．これ．．。」

こまち「かれん、何か嫌な感じがするわ．．。」

2人が先ほど感じた嫌な感覚の手どころはおそらくこの泉だろう。以前キトレスキーと相對した時よりももっと嫌な空気があたりを支配していた。

まだ昼すぎのはずなのにまるでこの場所だけが世界から切り離されてしまったかのように暗かった。

こまち「かれん見てっ！」

とこまちが泉の中心部を指差す。

指の示す先ではゴボゴボツツと音を立て真っ黒な水が泡を吐き出していた。

やがてそれにつられるように水が大きく膨れ上がっていく。

黒い水が、いや黒い色だけが中心部へと集まっていき水はさらに膨らみ3mほどの大きな水柱となっていた。

ドグンツと心臓のような音を2人は聞いた。と同時に目の前の水柱がすごい勢いで圧縮されていき、やがて人のような姿になった。

かれん「なんなの・・・これは・・・。」

そう口に出したとき、かれんは気付いた。自らが恐怖しているということに。

全身が強張り熱くもないのに頬を汗が伝っている。離れようにも進もうにも足が動かない。

これが足がすくむ、ということなのだろう。と横目で親友の姿をチラと見る。

その顔は顔面蒼白。自分よりも恐怖に支配されてしまっているのがすぐに解かった。そんな親友の様子を見てかれんの瞳に火が灯る。

かれん「こまちっ！変身よ！」

こまち「え・・・あっ・・・わかったわ！」

かれんの言葉で我に返ったのだらう、こまちの瞳も力を取り戻していた。

「プリキュア、メタモルフォーゼー!!」

青と緑の光に包まれて2人はプリキュアへと変身した。
光がはじけたと同時にキュアアクアが駆け出す。

青「はあっ！」

6mはあるだろう距離を一速跳びに相手に近づきパンチを繰り出すも避けられてしまい体が中に浮いた状態で無防備になってしまう。

青「はい！？」

すかさず黒い男がキュアアクアへと蹴りを放つ。

緑「くっ・・・！」

そこをいつの間にか詰めていたミントが両手を盾のように胸のまでクロスさせ防ぐ。

そしてその蹴りを右へ受け流し、その勢いを利用し体を回転させながら男の足を蹴り払う。

青「せやっ！」

ミントの肩へ手を突き体勢を崩した男をアクアが蹴り飛ばす。

会心の手ごたえを感じ、水面を水しぶきをあげて男が吹き飛ばが3度体が跳ねたところでバシッと大きな黒い水柱を上げて消えてしまった。

緑「消えた！？」

と驚くのもつかの間、一瞬で2人の背後に男が姿を現し、

青・緑「きゃああああ!!」

彼女達の体を吹き飛ばし大木へと叩きつけた。

男はすぐさま2人にとどめを刺そうと体を低くし飛び掛ろうとしたが

有里「おんどりやああああ!!」

木々を伝って軽やかにジャンプしてきた有里の突き刺さるような蹴りで止められてしまう。

着地した有里は一旦下がろうとする男へと距離を詰める。

有里「なんででめーがこんなところにいるんだよ!」

殴る、殴る、蹴る、掴む、払う、避ける、蹴る、殴ると相手に隙を与えないよう一気呵成に攻め立てる。

一瞬の隙をつき男の足を右足で踏み動きを止め懐へと入り込む。それを迎撃しようと繰り出された手を掴み捻るように水面へと体を投げつけた。

有里「消えろっ!バカ野郎が!」

有里は拳を振り上げ男の顔へ打ち下ろそうとした、その時

「ふふふ……。」

そう不気味な笑い声をあげながら男は有里ではなく首を傾けあらぬ方向を向いていた。

男へと意識を飛ばしながらも有里もそちらを横目で見る。

視界には大木に隠れきれず見えてしまっている金髪のツインテールの片方が見えていた。

「それが貴様の弱さだ。」

男が言うや否や真っ黒な腕を少女が隠れている大木へとするどい勢いで伸ばす。

しかし有里はそれよりも早く少女の下へとジャンプしており途中で2本に分裂し向かってくる腕を蹴りと拳で打ち落とした。

「バカめ、腕は2本あるのだよ。」

防がれるのも折込ずみというように男は余っている腕を今もぐつたりと倒れているアクア・ミントへと伸ばした。

有里「させるかつ！」

叫び有里は手のひらの上にサッカーボールほどのエネルギー弾を作り少女達を襲おうとする腕に向かって投げつける。どつつと重々しい音をたて腕は霧散していった。

有里は内心でふうと一息ついた。

と同時に腹部に強烈な痛みと衝撃を感じ取る。

有里「くそつたれが・・・」

「足も2本あるのだ。だから愚かだと言うのだよ。」

水面に倒れている男の足が伸び腹部に突き刺さり貫通していた。服には血が滲み出し足の力が抜けていくのがまるで他人事のように有里は感じていた。

有里「今日は・・・調子悪いってのに・・・。」

膝がその役割を放棄し地面へと体を引きずり倒す。しかし倒れるわけには行かないと左手で地面を掴むようにして体を支えた。右手は刺さっている部分を押さえている。

引き抜かなくてはと右手に力を入れ腹に刺さっている男の足を掴んだ時、

有里「っ・・・！」

どくんっと心臓が大きく揺れた。そして体中から力が抜けていき、左手は本当に体と繋がっているのかと疑いたくなるほどに力が入れられず支えがなくなった体はあっけなく地面へと倒れてしまった。

「あっけないものだな」

男は片足で立ち上がる。今も右足はどくんどくと痙攣を続けていてそのたびに有里の体もびくと反応していた。

うらら「いやっ・・・こんなの・・・有里さん！有里さん！！」

そこへ隠れていた金髪の少女、うららが駆け出してきて叫び声のように有里の名前を呼びながらその体へと縋り付く。

腹部に突き刺さるそれを必死で抜こうとするも少女の非力な力ではどうすることもできなかった。

「醜い生き物だ・・・お前もすぐ後を追わせてや・・・」

青「プリキュア！サファイアアロー！」

緑「プリキュア！エメラルドソーサー！」

言葉をさえぎるように男の顔へ水で作られた弓が飛来する。

それを咄嗟に首を傾けて避けるが1歩遅れて放たれた円盤状のエネルギー弾がぴんと伸びていた足を切り裂いた。

男「まだ息があつたか」

キュアアクアとキュアミントが息も絶え絶えといった様相でふらふらと立ち上がっていた。

しかしその形相は怒りに満ち満ちていて首だけになっても殺してやる。というのが見てとれた。

青「よくも・・・よくも有里を・・・」

緑「あなただけは、許さない。」

一刻も早く有里に手当てを、そして病院に連れて行かなくては。

そしてこいつに、この訳のわからないこの世で一番大事なものを傷つけられたこの痛みを思い知らせなくては。

2人の心が静かに、そして冷たく憎しみに染まりかけた。

『怒りを静めるのです』

そんな2人の頭の中に声が響き渡った。

綺麗なそして透き通った女性の声だ。

『怒りに囚われたままの心ではプリキュアの力を奮うことは出来ません』

『もし怒りを静めることが出来るなら、あなた達に一足早く力を差挿げましょう。』

『そしてどうか、あのお方の力になってください……。伝説の戦士プリキュア達よ……。』

それきり女性の言葉は聞こえなくなった。

そして先ほどまでの憎しみに沸く怒りはなくただ静かに心が奮えていた。

その心に反応するように2人の手元が大きく光やがてその光の中から二つのフルーレが姿を現した。

2人は顔を見合わせ無言のまま小さく頷くと男を睨みそしてゆっくりと近づいていった。

。。。。。

うちらは徐々に気を失っていく有里の体を抱きしめながら泣いていた。

私が邪魔をしたから、私がこんなところに来さえしなければ有里さんがこんな目にあうことはなかった。

私がくじけそうになった時有里さんが励ましてくれたのに。私は邪魔をすることしか出来ない。

私の今があるのは有里さんのおかげなのに、まだ何の恩返しも出来てない。

先ほど知り合った先輩らしき少女達が立てる剣劇の音を聞きながら私は自らの無力さと非力さを嘆いていた。

『諦めてはなりません。』

このまま有里さんにもしものがあつたらこの場で後を追おう。そう考えていたうららの頭の中に言葉が響いた。

『石を使うのです、そしてどうかそのお方の力となってください。そのお方は……。』

そついい残し言葉は聞こえなくなった。
無意識のままポケットに手をつ突つ込むとそこに小石ほどの感触があった。

以前HARMに張り込んでいたとき、有里の周りにいた4人の女性の喧嘩のときに目の前に転がってきたものだった。
黄色く光るその宝石を知らず知らずのうちにうらはは拾い持ち帰ってしまった。

返さなくてはと思う反面手放してはいけないという自分でもよく解からない感情が相反し、つねに身に付けていたのだ。

そして今、手のひらにあるその宝石は目を開けているもはばかれるほどの光を発していた。

既に少女の中に恐れは無い。湧き上がる勇気と共に宝石を強く握り

締め立ち上がった。
拳を胸にあて少女は叫ぶ

うらら「プリキュア！メタモルフォーゼ！」

唱えると宝石から黄色い光がはじけ少女の姿を隠す。

一瞬で衣服も髪型も変わった少女は光が消えるのを待たずして駆け出していた。

2人のプリキュアの攻撃を難なくさばいていた男のわき腹へ思い切りとび蹴りをかます。

男「なにっ・・・貴様もっ」

黄「私は、キュアレモネード！有里さんのために、そして私自身のためにあなたを倒します！」

レモネードは両手に力をため始める。黄色い光が拳に集束していく。

黄「

男「ちっ」

隙だらけの腹を蹴られ吹き飛びながらも
レモネードから放たれた光の鎖を避けようとジャンプする。

青「はっ！」

緑「せいっ！」

それを上からアクアとミントが叩き落す。

落とされた男の体へレモネードの鎖が巻きつき動きを封じる。

青・緑「これで終わりよ！」

身動きの取れなくなった男をフルーレで真つ二つに切り裂いた。

男「目的は果たした・・・今日は消えるでしょう。」

腰から二つに切断された男の体が霧のように霧散していった。後には男の言葉だけが嫌に耳に残っていただけだった。

青「有里！」

緑「有里さん！」

黄「有里さんっ！有里さんっ！」

勝利の余韻に浸る間もなく少女達は有里へと駆け寄った。アクアとミント、2人がかりで有里の体を抱き上げる。

青「有里っ・・・有里！！」

緑「有里さん・・・やだ・・・。」

2人の少女は青白くなっている有里の顔と、自分達の足元にある生暖かい水たまりを見たことは
最愛の人の死を想像するのに難くなかった。

第28話 【無視されながらの治療】（前書き）

短め

第28話 【無視されながらの治癒】

こぼこぼと血を流し続ける傷口を両手で圧迫し止血しようとする。
が、次から次へとあふれ出る血液を止めることはできない。

アクアとミント2人、必死で有里に声を掛けるも反応は返ってくることは無く浅く短い呼吸をするだけだった。

レモネードことうらはは無表情のまま涙を流し有里の手を握っている。

有里「・・・ん」

すると薄っすらと目をあけた有里が小さくうめき声を零した。

すかさず2人で叫ぶように声をかけるも、再び気を失ってしまったらしい。

もう駄目なの・・・？と思った少女達の頭に先ほどと同じ女性の声が響き渡った。

『石を掲げてください。高く、空へ届くように・・・。』

もはや疑問にもつ暇も惜しいというように2人は変身を解き宝石を天へと掲げた。

無表情のまま固まっていたレモネードに瞳にも希望の灯が灯り同じように変身を解き宝石を掲げた。

手にした宝石から各々の色の光が天へと伸びる。

空をみると町中のいたるところから色んな色の光が上がっているら

しい、それらが混ざり合って空には丸い虹が出来ていた。

一通りぐるぐると回転した虹は一筋の光になって有里たちの居る泉へと吸い込まれるように降りていった。

光が差し込んだ泉は空の虹が移りこんだように同じ虹色になっていた。

『そのお方を泉の中へ・・・』

言われるがまま、少女達是有里の体をいたわるよう優しく持ち泉の中へとゆつくりと沈めていく。

膝ほどまでしかないはずの泉へ有里はゆつくり、ゆつくりとその身を隠していった。

・・・。

『ようやくお会いできました。』

有里「傷が無くなってる・・・お前さんが助けてくれたのか、ってどうかお前さん誰さん？」

刺された場所をさすっても血が出ていないどころかかさぶたすら残っておらず衣服に血が付いていただけだった。

『変わらぬご様子で嬉しい限りです。』

有里「誰なのかって聞いているんだけど・・・。」

『暗黒界の力は今、ますます強大になってきています。このままではこの世界が、そして妖精界までもが危機にさらされているのです。』

」

有里「おっ無視ですか。そうですか。」

『どうかジュエルを、そしてプリキュア達を守ってあげてください。そしてどうか世界を・・・救ってください。』

有里「おっ最後まで無視ですかそうですかー。っていうかお前さん誰よ。なんか見たことあるというか覚えがあるというか・・・。」

まだ喋っている有里を無視して女性が手をあげると有里の体もふわふわと浮いていった。

・・・。

有里「ぶはっ！」

かれん「有里！」

こまち「有里さん！」

うらら「有里さんっ」

水面から顔を上げるとすぐに少女達が名前を呼びながら駆け寄ってきた。

すでに変身は解けていて見慣れた学院の制服に戻っていた。

気だるさが残る体をひきずるようにして泉から上がろうとするが腕に力が入らず登ることができない。

それを見たかれんとかま치가有里の両手を持ち引っ張り上げた。

かれん「傷は？大丈夫なの？」

そしてすぐ、地面へと倒れこんだ有里の服をめくりかれんが傷口を確かめる。

こまち「治ってる・・・」

有里「なんか色々あって治してもらった。もう大丈夫だとさ。」

そう有里が言くと少女達3人は安堵のため息を口々に零した。

有里自身もそれを見て安心したのか、急に眠気に襲われた。

有里「なんか・・・急に眠たくなってきちゃったわ・・・悪いけど・・・店まで・・・運ん・・・で・・・くり・・・」

こまち「え？ちょ、ちょつと有里さん？」

うすら「運んでって言ったってどうやって・・・」

かれん「ちょつと有里？有里？」

まぶたはすでに睡魔の猛攻に陥落し眼球を覆い隠している。

活動を休止しはじめた頭で「店の扉に刺さってた合鍵を作ったのは誰か聞いたださなきゃ・・・。」とくだらないことを考えていた。

第29話 【勉強会】

腹を刺されてから二日。トイレと軽い食事以外ベットの从上から動かない生活のおかげですっかり体の具合はよくなった。

多少まだ気だるさは残るがきつと寝すぎのせいで体がなまっているんだろう。

手元の携帯を開くと少女達から容態を心配するメールがいくつも入っていた。

そのメール1つ1つを読んでいく。毛色は違えど皆オレの体を心配してくれているのがよく伝わってきた。

そういえばこれで全員のプリキュアが揃ったのか。1度全員集まったほうがいいのかな。

思いついたオレは少女達全員に同じ内容のメールを送った。

・・・。

・・・。

有里「・・・・・・・・。」

咲「まーいいー！ここわかんない。」

舞「それさつきも教えた問題でしょ。」

咲「さつきから解かんなかったの！」

舞「さつきから私の話聞いてないからでしょう。」

希「あははー咲ちゃん怒られてる。」

りん「あんたもさっきから1ページも進んでないでしょうが。」

希「違うよりんちゃんっ！これはね！進めてないんだよ！」

りん「いいからやりなさい。」

うらら「あの・・・私のシャーペン知りません？」

なぎさ「あ、もしかしてこれ？机の下に落ちてたよ。」

ほのか「あ、それ有里さんと同じシャーペンね。」

うらら「え、あっ・・・はい、そうですね。」

なぎさ「なんでほのかそんなこと知ってるの・・・？」

ほのか「ちよつとなぎさその問題は因数分解って言ったでしょ！」

なぎさ「あう、ごめんなさい（流された・・・。）」「

閻夢「お兄様、コーヒーはこれでいいですか？」

満「なんであなたが勝手にお兄様の台所へ入ってるんですか？」

閻夢「私のほうが妹として優れているということよ。」

薫「いいからあなたはそこから出なさい。」

希「さつきから気になってたけどその私とそっくりな子は誰なの？」

かれん「さつきから有里とべたべたしすぎじゃないかしら？私とは関係ないけど。」

こまち「かれん私のえんぴつを折らないで……。あとそんなにイライラしないで……。」

かれん「イライラなんてしてないわっ！」

こまち「大きな声も出さないで……。。」

ひかり「有里様の奴隷は私だけです。」

くるみ「どさくさまぎれで変なこと言わないでください……。」

有里「お前らうるさいよ……。」

時間は少し過ぎ昼前の喫茶HARM。

お話があると皆に召集をかけお昼を奢るなら・コーヒーをご馳走してくれるするなど色々と理由をつけられたが皆集まってくれた。

が、7月の上旬の学生達といえば前期試験への勉強で真っ最中。しかし学院にろくに行かず学院長ともコネがあるオレにはそんなことは関係なかったのだが、

プリキュアと言えど普段は中学生。例に漏れず少女達もHARMの机を貸しきって試験勉強に勤しむことになった。

三人寄れば姦しいのなら14人寄れば何といえいいのだろう。やかましい？ 妬ましい？

少なくとも憤ましいではないはずだ。

なぎさ「もう！ 全然わかんないよーぶっちゃけありえない！」

希「ねーねーその子なんていう子なのー？」

咲「やっぱりアイドルって他の芸能人の人とかにも会えたりするの？」

うらら「私はまだデビューしたばかりなので、でも見かけたりはしますよ。」

有里「ああもうお前らは……。」

主に勉強したくない組みが率先して口を動かしている。

勉強組みは時折有益な情報交換を行う以外はずっとペンを動かしていた。

本当はプリキュアが全員そろったということ自我介绍などを改めてしながら今後の事を話し合ったりしたほうがいいんじゃないかな」というオレの考えだったのだが、

少女達からすれば、世界の危機よりも眼前に迫った期末テストのほうがよくばど危機的状況だったらしい。

もうなんかどうでもよくなったので、オレは一度上がった溜飲を下げカウンター席へと腰を落ち着けた。

希「だからーこの子は誰なのー？」

有里「ああそうだった、はいはいご説明いたしますよー。メイこっちおいで。」

闇夢「お呼びですか？お兄様。」

オレの付近に布巾で手を拭きながらメイがとことつと近づいてきた。

その体を抱きかかえ膝の上に乗せる。「ふひゃー！」と可愛い悲鳴が聞こえたがなんかもうめんどくさくなりつつあるオレには関係のない話だった。

有里「この子は闇夢つつてまあなんていうか希に解かり易く言うと・・・不思議な力から生まれた女の子って感じかな。その生まれるまでの話はまあまた別に色々あるんだけどそこはまた後日。なんで希と闇夢の容姿が似てるかっていうと希をモデルにしたからだ。なぜ希をモデルにしたかっていうとこれまた色々あるんだけど簡単に言えば思いついた時に店の前を通ったからだ。」

希「へーよくわかんないけど解かった。」

有里「まあ双子の妹みたいなもんだと思ってくれればいいよ。」

闇夢「それは聞き捨てなりません。」

希「これからよろしくね！妹よ！」

闇夢「だから私が姉だと・・・待ちなさい！」

オレの前で立ちながら話を聞いていた希が納得した様子で自分の席

へと戻っていった。

が、妹扱いされた闇夢は納得できなかったらしく希に詰め寄ってあーだこーだと言いつき合っている。

険悪な感じになるかもしれないなんて考えていたが、思っていたより仲良くなれているみたいなのでほっと胸をなでおろす。

かれん「今日はなんでみんなを集めたの？」

カウンターの中でコップを拭いていた所にかれんが話しかけてきた。さすがの秀才組みというべきかこまちやほのか・舞などは自分の勉強は終え、できない組の勉強をみてやっている。

有里「んゝほんとは今後のこととかこの前の男のこととか話そうと思ったんだけどなあ・・・テストがあるんじゃないかな。」

かれん「体はもう大丈夫なの？」

有里「もう元気元気。ごめんな心配かけて、ありがと。」

かれん「べ、別にかまわないわ。1つ借りよ。」

有里「大きな貸しになりそうですねー。」

咲「やったー！終わった！」

なぎさ「これでもう数学は完璧！英語は知らない！」

希「これからはお姉ちゃんと呼んでもいいんだよ？」

闇夢「誰が呼ぶか！私のほうが姉だといつになったら解かるの！」

多少言い争いも聞こえるがテスト勉強のほうが終わったらしい。

教えていた側も、教えられていた側も背筋を伸ばしたりノートや教科書を片付けている。

有里「じゃあ飯にしますかー」

時刻は12時30分。昼食の準備を始めるには少々遅い時間だがそこは腐つても店主、みんなが勉強している間にすでに鯖の味噌に定食を人数分こしらえておりあとはご飯をよそうだけで完成の状態だ。

と思っただけで満・薫がご飯をよそってみんなに配っていた。仕事速すぎ。

いただきまーす。と全員で手を合わせてから食べ始める。簡単なことだけれどこういう挨拶をきちんとできるのって大事だと思います。ほんとに。

オレはカウンターの中から少女達の食事風景を眺める。

ただ昼食をとっているだけなのに少女達は楽しそうだった。話して食べて笑って、そんな中学生として当たり前の日々を過ごしている。

でも

彼女達はプリキュアだ。

世界を救うという使命を持たされてしまった。

敵は強大であり屈強だ。いくら精霊の力があっても負けることがあ

るかもしれない。

そうなった場合、彼女達の命はないだろう。死ぬくらいならまだいい。

洗脳され、実験され、嬲られ、人としての尊厳を全て奪われるだろう。

オレは彼女達のまぶしい笑顔を眺めながら、そう遠くない未来に起こりうる絶望を夢想していた。

.....

ごちそうさまでしたー。という声で、みんなの昼食が終わったことに気づいた。

結構な時間ぼーっとしていたらしい。手元のコーヒーは既に冷め切ってしまったている。

少女達はそんなオレの様子を察したのか自分達で片づけをはじめた。きやいきやい騒ぎながら台所に並んで自分の使った食器を洗っている。

冷え切ったコーヒーで唇を湿らせながら建設的かつ健康的かつ感動的なことを思いついた。

有里「よし、お前ら午後から特訓な。」

オレが思いついた妙案は容易く店内に静寂をつくり、水道から溢れる水の音をよりいっそう際立てることとなった。

第30話 【特訓】

片付けもそこにオレは外に出た。

未だに納得出来ていない様子の少女達も渋々といった様子でぞろぞろと店内から出てくる。

もしオレがいきなり「特訓しようぜ特訓！」と言われたら「こいつばっかじゃねーの」と無視を決め込むだろう。

そう考えるとなんじゃこりゃ？といった様子ながらも着いてきてくれる少女達の優しさに涙が出るね。

全員が外に出たのを確認してから戸締りをする。

皆で戸締りがきちんと成されていたことを確認するとぞろぞろと歩き始めた。

が、

そこへやつらが現れた。

「そこまでだ！」

「貴様の悪行」

「僕達が許さない！！！！」

「2人あわせて、近衛戦隊！ココ・ナッツ！！」

正義の味方のテンプレみたいなことを言いながらオレを指差す男2人。

背景の爆発やきらびやかなBGMなどがないのも相まって残念さがより際立っている。

それにしてもこいつら、どこかで見たことあるような無いような・
・思い出せない・・・・。

希「あつ、小々田先生だ」

りん「ほんとだ。」

有里「え？なに、知り合い？」

りん「うちの担任の先生。最近来たんだけど・・・。」

有里「え？先生なの？」

高等部でしかもほとんど学院に行かないオレが中等部に最近やってきた先生のことなんて知っているはずが無い。

ってというか野朗のことなんかどうでもいい。むしろみんな。ねばいい。男なんて皆。ねばいい、ホモを中心に絶滅すればいい。

ひかり「どうしたんですか？」

くるみ「立ち止まらないでよ。なんなの？」

後ろのほうにいたひかりとくるみが何事かと前に出てきた。

ココ「なっ！？クイーン様？何故そのようなところに！？」

ナッツ「早くその男から離れてください。」

ひかりの姿を見た途端に焦り、うろたえ始めた。
あと意味が解からないがすごいオレ睨まれてる。解せぬ。

くるみ「あんたらなんでこんなところに？っていうか何でいまさら？」

ひかり「私の心も体も全てご主人様のものです。私の居るべき場所はご主人様の近くだけなのです。」

くるみ「ほらあんたらがちゃんと護衛してなかったからルミナス様がこんなバカ野郎に洗脳されちゃったじゃない！！」

ヒートアップしてきたのかくるみが叫びながらオレの腰を何度も蹴ってくる。

洗脳なんかしてませんよ、博愛を訴えただけですよ。と言ったら蹴りが強くなった。最近はタコカフエで手伝いをしてひかりと一緒に寝泊りしているらしい。元気な様子でわたくし一安心です。腰いてえ。

ココ「いやその・・・教師って思ったより大変な仕事で・・・慣れるまで時間がかかってたから・・・。」

痛いところを突かれたのかココと言つらしい男はしどろもどろになっている。

こまち「あら、司書さん？」

そこへ先ほどまで傍観を決め込んでいたこまちがもう1人の男へそういった。

有里「え？何今度はこまちが知り合い？」

こまち「最近学院の図書館へ来た司書さんなんだけど……。なにか揉め事かしら？」

有里「さっぱりわからないんだけど……。」

くるみ「護衛の仕事をさぼってのん気に本読んでたっていうの!？」

ナッツ「いや……。その……。虹の郷には面白い本が沢山あって、全部を読むには時間が足りないくらいだったんだ。」

くるみ「なんでちよつと開き直ってるのよ!」

有里「あのちよつとくるみさん？そろそろ腰が砕けてしまうんですけど……。」

イライラがピークに差し掛かりかけているくるみ様はそのいらつきをオレの腰を殴ることで発散させている。

右足を踏まれ逃げることにすら許されないオレは黙ってそれを受け入れていたが、

ひかり「くるみ、それ以上のご主人様への狼藉、私が許しませんよ。」

いつの間にかオレの横まで来ていたひかりがくるみの腕を掴み重く、ただひたすらに重たく感じる言葉を告げた。

その圧力にくるみは怯えて半泣きだ。

ココ「貴様！クイーン様に近づくな!」

有里「近づいてねえよ！」

ナッツ「やはり貴様はここで消しておかなくては。」

よく解からない連中だがこいつらがめんどくせー奴らだってことは解かる。

有里「めんどくせーからお前らも着いて来いや。はい、皆運動場へ移動するぞー。」

いつまでも店の前でくっちゃべっていたって仕方ないので、かねての予定通り特訓を行うためオレ達は運動場へと移動した。

・・・。

有里「よしっじゃあまずはプリキュアに変身してください。」

場所は移りここは学院の運動場。

今日は部活動は午前までなのでいつもは賑わっている生徒達の姿はなく、少女達＋男2人が運動場の真ん中に並びそこから少しはなれた場所にオレと闇夢・満・薫が並んでいるというか仕切り状態だった。

さて先ほどのオレの言葉に全く反応が返ってこない。見れば少女達はみんなポカンとしている。

状況がころころと変わっているので着いていけないといった感じだろうか。

仕方が無い、とオレは1つため息をつき腕を組んだ。

有里「先日オレがやられた男の名前はアクレアタム。敵の総大将、親玉だ。体調が悪かったせいにはしたくないがヤツの強さはオレと同等かそれ以上。奴らの狙いは妖精界の支配だ。それに必要なのがキュアジエル。今この場に10個のキュアジエル全てが揃っている。奴らの攻撃はより一層強まって来るだろう。」

いつにないオレの真面目な雰囲気、少女達の目つきも真剣なものに変わる。

有里「もし敵に負けてジュエルを奪われてしまった場合、死ぬぐらいいならまだマシだろう。手足を高速され、頭の中を機械や呪術で掻き回され、実験され、解体され、改造され、洗脳される。お前達が負ければこの世界までも支配されるどころかお前らの親しい人をお前達自身が殺すことにだってなりかねない。」

そんなやり方をオレはいくつだって見てきた。

有里「そんな風にならないためにも、オレはお前達に強くなって欲しいんだ。」

少女達の瞳に火が灯る。

そしてオレはとどめの言葉を放った。

有里「オレに勝てたら何でも1つ言うことを聞いてやろう。」

「デュアルオーロラウェーブ！」

「デュアルスピリチュアルパワー！」

「プリキュア、メタモルフォーゼ！」

「ミルキーローズ、トランスレート！」

「ルミナス、シャイニングストリーム！」

そんなに叫んだら咽壊しますよ？と言いたくなるほどの大声が大地を響かせる。

少女達から放たれた光は交わり虹色になって雲を突き刺すほどに天へと昇っていく。

光の中から現れた少女達の目は若干血走っているようにも見える。足を怪我した野うさぎにあったライオンなんかがこんな目をするんだろう。つまりは獲物を目の前にした獣の目だ。

有里「1対全員でいいよ、降参させたら勝ちつてことで。さあ・・・かかってこい。」

ちなみに闇夢・満・薫は外野席で応援です。さすがにこの3人が入ってくると厳しいので。

ココ「まずは僕達が相手をしよう。」

ナッツ「貴様を倒しクイーン様を正常な姿へ戻す。」

なよなよしたオーラを体から沸き立たせながら二人が進み出る。

ココ「降参させたら勝ちといったが、」

ナッツ「1つ聞きたい。」

ココ・ナッツ「倒してしまっても構わんのだろう?。」

とこれ以上ないほどカッコいい決め台詞を言い放つ。その背中は男らしさと主人公らしさで満ち満ちていた。

が、言い終わったとき、2人はすでに30mほど吹き飛ばされ運動場隅のフェンスへとぶつかり地面へとその体を伏していた。

有里「ごちゃごちゃうるせーんだよ、あと男がオレの半径5m以内に入ってくんな。」

ドヤ顔をしていたココナッツが非常にむかついたので思い切りその整った顔面をぶん殴ってさしあげました。あいつらなんかホモくさいんだよ……。

有里「さあ、前座は終わり。誰から来るのかな?。」

青「行くわよ、ミント」

緑「ええ、任せてアクア。」

黄「お供します。」

まずアクア・ミント・レモネードの三人が駆け出してきた。

アクアが肉薄し軽い身のこなしでキックの応酬をかけてくる。それを難なくかわしていると後ろに周っていたミントが足払いを仕掛けてくる。それと同時にアクアのハイキックが顔面を狙っている。

しかし後ろから仕掛けてくるのは解かっていたのでハイキックを腕で、足払いを右足で受け止める。

さらに間髪いれずアクアの足を掴みミントのほうへと引き倒す。ま

さかアクアが自分のほうへと向かってくるとは思っていなかったのか2人一緒になって地面へと倒れた。

そこをポケットに忍ばせていたロープで2人の足をパパッと縛ると、それが済み次第後ろへ回し蹴りを放ち飛び掛ってきていたレモネードを大きく吹き飛ばした。

青「ちよつとつ解きなさいよ有里！」

緑「アクア・・・引つ張らないでっ。」

2人はじたばた動いているが両足を結ばれているので解くに解けずにいる。それを横目で確認しながらその場から飛びのく。

一寸遅く元いた場所にサッカーボール大の火の玉が通過していった。

オレは着地したあととままることなく走り続ける。その少し後ろを火の玉がボカンドカンと音を立てて着弾していた。

赤「くっ・・・当たらない!？」

ルージユが焦りの声をあげる。その一瞬の動揺についてフェイントを混ぜつつ一気にルージユへと近づく。

赤「早い!!」

夢「させない!!」

待っていたかのようにドリームが空中から蹴りを仕掛ける。

加速の力と重力の力を使い地面に突き刺さるように向かってくるドリームのキックを、片手でいとも容易く受け止める。

夢「あれ・・・うきゃっ!!」

すぐさまドリームを盾にするように体の前に突き出す。そしてオレに向かつてきていた火の玉がドリームへと被弾した。

赤「ドリーム!! ってちよつと嘘でしょおおおおお!!」

自分が撃ったファイヤーストライク（りんが自分で考えた技名）が当たり煙を上げて地面を転がる親友の姿に気を取られてしまい、接近を許してしまう。

完全に隙だらけになったルージュを場外ホームランのように空へと高く投げ上げた。

一息つく暇もなく後ろ上空へと手のひらの上で作り上げたエネルギー弾を投げつける。

放たれたそれは目の前までできていた黄色と青色の精霊の力へとぶつかり合って霧散した。

そしてオレは放たれた力の根源のほうへと跳躍する。

さきほどのエネルギーがぶつかり合った衝撃であたりには土煙が立ち込めていた。

その土煙の上までジャンプすると少し下のほうでキョロキョロしているブルームとイーグレットの姿を見つける。

オレは気配を消しながら2人を上から地面へと叩き付けた。

花・鳥「きゃああああ!!」

意識の外から攻撃された2人はガードすることも出来ず土煙を吹き飛ばす勢いで地面へと突き落とされていた。

黒「てやああああ！」

白「はあああああ！」

上空から着地したオレへブラックとホワイトが2人がかりで攻撃をしかけてくる。

2人が両手両足を自在に使い素早い攻撃を繰り返すので否応もなく防戦一方になる。

勢いに押されるがままじりじりと後退させられていく。

ある程度下がった所でオレはブラックの大降りの蹴りをしゃがんで交わす。

しかしそこをホワイトの追撃のキックが放たれる、が地面に倒れているドリームを抱き上げ盾にした。

白「っ！？」

気絶している仲間を蹴るわけにもいかず放たれた蹴りはドリームの眼前ですん止めされる。

その隙にオレはホワイトの後ろへと周り込み右腕をとると背中へと捻り上げる。

白「あうっ」

少し強めに捻ったせいかホワイトが痛々しい声をあげた。

黒「ホワイト！！ってわわっ！」

その声に動揺したブラックへホワイトを押し付けるように投げる。

ブラックはオレの思惑通りホワイトの体を真正面から抱きかかえてしまった。

そしてその失態のツケを払うようにオレの力を込めたパンチを2人共々受けてルージュのようにフェンスを越えて吹き飛んでいった。

有里「ふうー・・・。」

ここでやつとオレは大きく息を吐いた。
辺りを見渡してみるが立っているものはいない。

有里「オレが敵だったらお前ら今頃殺されてるぞー。」

と挑発するオレの眼前を水の矢が通り過ぎる。

青「まだ・・・よ!」

振り向けばフルーレを持ったアクア・ミント・レモネードが立ち上がっていた。おそらくフルーレを出して紐を切ったのだろう。

有里「そうこなくっちゃ。よっしゃ第2ラウンドだ!!」

・・・。

闇夢「あんた達は行かないの?」

光「ご主人様に手を上げるなんて考えられませんから。」

くるみ「私は別に・・・あいつにしてほしいことなんてないもの。」

満「一緒に仕事をして布団に潜り込んだりしていれば他にしていことなんてそりやないでしょう」

薫「これだからビッチはいやだわ。」

くるみ「聞き捨てならないわね、殴りたいなら相手になるわよ？」

満「ドン亀がうさぎにどうしたら噛み付けるのかしら」

薫「ビッチは腰振ることだけ考えていればいいのよ」

くるみ「その喧嘩買ったわ!!」

闇夢「あなたは行かないの？」

光「ご主人様の命令が無い限りご主人様を見ているのが私の仕事ですので。」

闇夢「なかなか変わり者ね」

光「ゴスロリをして妹面しているのもなかなか変わり者だと思えますよ？」

闇夢「・・・」

光「・・・」

太陽が傾きかけ空が赤く染まるまで争いと口汚い罵詈雑言が絶えることはなかった。

第31話 【特訓後】

場所は変わって喫茶HARM。

窓を覗けば真つ暗ななかポツンと立っている電灯の明かりだけが
見取れる。

木々が風にさえずる音だけが聞こえる学院内でHARMだけが賑や
かさを見せていた。

咲「舞い、絆創膏貸して。」

舞「私のはもう全部使っちゃったわ。」

こまち「それなら私のを使って？」

そういつて カバンから救急箱を取り出す。箱を開けると色んな大
きさの絆創膏や傷薬などあらゆるものが揃っていた。

希「うわああ！すつごーい！お医者さんみたい！」

りん「ほんとすごい品揃え。」

それを後ろから覗いていた希とりんもこまちの取り出した救急箱に
興味深々だ。

こまち「よく怪我をする友達がいるから、ね？」

かれん「ちよつとこまち？それって私のことかしら？」

こまちの言葉に優雅に紅茶を飲んでいたかれんが反応する。

かれんは、乗馬部・剣術部などをこなしさらには自宅にてバイオリン・合気道などを嗜んでいる。

その鍛錬も過酷なものなので当然負傷もする。しかしかれんの肌は白く透き通り石膏のように美しい。

それは傷を作る度こまちが持参の救急箱で治療をし傷を残さないようにしているためだった。友情のなせるわざである。

うらら「あ、私も絆創膏ひとついただけですか？」

ほのか「私はシップを2枚いただけるかしら？」

くるみ「ほら、ルミナス様も足の引っかけ傷に薬塗りますよ。」

ひかり「私にはご主人様を手伝うという指名が・・・」

くるみ「そのご主人様ってのやめてください、あの人はただの変態ですよ？ほら足出してください。」

少女達は特訓で受けた傷をみんなで手当てしていた。

傷といっても小さい擦り傷やあざ程度のもので大したものじゃない。3日もすれば後も消えるだろう。

みんなでワイワイしている中、ただ1人離れてカウンター席に座りすねているものがある。

有里「だからごめんって言ってんだろー。それに特訓だったんだし、ちょっと危ない目に合うくらい仕方ないだろう？」

なぎさ「車に轢かれそうになることがちょっと危ないことって訳？」

そう、なぎさである。何でも、オレに学院外まで投げ飛ばされ背中から地面に打ち付けられた所にトラックが迫ってきたらしい。咄嗟に横へ跳んで避けたいらしいがその恐怖たるや凄まじいものだっただろう。

さつきからずっとこの調子で椅子に座ってそっぽを向いている。何度も謝ってはいるのだが許してもらえそうな気配がない。

闇夢「お兄様、出来上がりでしたがよそいますか？」

満「私が鍋の面倒を見ました。」

薫「私がお皿を準備しました。」

闇夢「なに？まるで自分の手柄のように話すわね。」

有里「いらんことでケンカすんな、メイがよそって、満・薫が机に並べるはい始め。」

3人に任せていた料理の仕上げが出来たらしい。放っておくとまたケンカをし始めるので適当に仕事を振り分ける。

言われたことはテキパキとこなしてくれるのでテーブルの上にすぐ夕食の準備が出来上がった。

手当てをし終わり談笑している少女達に声を掛け適当に席につかせる。みんなで手を合わせて

『いただきまーす』

ちょっと遅めの夕食が始まった。ちなみに今日のメニューは、

うすら「すごい！とってもおいしーです！甘口のルーの中にも野菜

系の奥行きある味わいにご飯のほどよい柔らかさがベストマッチです！」

こまち「甘さを際立たせながらも味にまろやかさがあるわ・・・これは隠し味にチョコレート？」

咲「詳しいことわかんないけどおいしいー！」

希「これなら何杯でも食べられるよ！」

りん「確かにこれならいけちゃうかも。」

舞「ほんとにおいしい。あつ咲、福神漬け取ってくれる？」

闇夢「さすがお兄様の作る料理は絶品。」

うららの熱烈な希望によつて今日はカレーの日になった。パスタや定食などと違ってカレーは鍋で一氣に作れてしまうのでこちらとしても有り難い。

ぱぱと作った割には好評らしくみんな美味しそうに食べてくれている。

がそんな中、なぎさがいまだ1人カウンターにふせていた。時折腕の間からチラチラとテーブルを見ているからきつと輪に戻るタイミングを見失っているんだろう。

オレは席と立ってちゃちゃっとカレーをよそいなぎさの前に置くと「ゴクツ」と唾を飲み込む音が聞こえた。どうやらかなり空腹らしい。

有里「ほれ、お食べ。」

なぎさ「ふんっ、いらないもん。」

有里「誰が作るうがご飯に罪はない。食べるまでずっと置いとくぞ。」

なぎさ「じゃあ・・・食べる。」

仕方なくといった感じでもそもそもカレーを食べ始めるなぎさ。一度口にしてしまえば空腹もあいまって手を休めることなくすごい勢いでスプーンを口に運んでいる。すっかり機嫌も良くなったようで笑顔が戻っていた。

有里「あらためてごめんな、道路に落ちると思つて無くてさ、ごめん。」

なぎさ「いやっ！私の方こそ特訓してくれてのにぐちぐち言っちゃって・・・その、ごめんなさい。」

有里「解つてくれたなら嬉しいよ。特訓は明日もあるんだ、この調子じゃはかどらないからな。」

そうオレが言い放つと同時に騒がしかった店内が静寂に沈む。目の前にいるなぎさもスプーンを持つ手を止めてこちらを呆けたように見ている。

有里「あれ・・・？何かおかしいこといったかな？」

なぎさ「え？特訓つて・・・毎日やるの！？」

有里「そりゃそうだろ、毎日やってこその特訓だからな。それに今

日はほんの小手調べみたいなもんだし。」

うらら「あの・・・私明日は撮影で・・・」

有里「じゃあ仕方ないな、うららは欠席と。」

希「私も明日はアクセサリーを見に行く用事があつたりなんかして・
」

りん「それに付き合う予定なんだけど・・・。」

咲「私も庭の木に水を上げなきゃ！」

かれん「委員会の集まりがあるからその後になるけど、いいかしら。
」

こまち「ならかれん私も図書委員の係りがあるから明日は一緒に行
きましょ？」

ほのか・舞「私は特に・・・」

有里「よし、他のやつらは全員参加だな。明日は本格的にビシバシ
行くから覚悟しとけよ！」

うららは仕事なので仕方がないが他の子達は予定も無く暇らしい。
有意義な特訓が出来そうだ。

当然闇夢達やひかり達も参加する。というか来るなといつても来る
だろう。

なぎさ「ぶつちゃけありえな〜い!!」

火がついたように騒ぎ出しオレへの非難の言葉を並べ立てる彼女達を尻目に、オレはデザートのアイスクリームを用意してその怒りを静める作戦へと出るのだった・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0860/>

プリキュアハーレム！

2011年1月19日01時06分発行